『一本君、僕はもうお暇しよう。そしてこの船でまた下田まで歸らう！』

『なに！』

彼の險しい眼がきらりと光つた。

『逢ひさへすれば氣が濟む、ゆつくりとまたいつか機會を待つて逢ふことにしようよ！』

言ひ終らぬうちに彼の荒々しい手が私の腕を摑んだ。そして遮二無二私を引き寄するなり其處に捻じ臥せて續けさまに擲りつけた。

細君が驚いて仰山な聲で叫びながら彼を引き離さうとしたが女の腕ではなかなかさう行かなかつた。次の部屋から、先刻船著場で友の紹介した此の燈臺の臺長だといふ五十歲あまりの中老人が出て來てニコ〳〵笑ひながら漸く彼を引き離した。

『馬鹿奴、折角今までひとを待たせておいて、來て直ぐ歸るといふ奴が何處に在る！』

立ち上つたまゝ細君に捉まつてよろ〳〵しながら彼は尙ほ私を白眼みつけて罵つてゐた。

『取消し〳〵、ぢやこの次の船まで厄介になるよ、どうも僕が惡かつた。』

私は腕や背をさすりながら、この孤島に一週間餘りの日を過すことに改めて決心した。

考へて見れば初めからさうした下心でやつて來ておいて、どうして今の樣な氣になつたことかと醉うた上とは云ひながら私は自分の所作を訝つた。そして、非常に友に對して濟まぬ思ひがした。

臺長や他の二人の臺員や、はてはその細君連をも呼んで來て、酒はそれから夜まで續いた。

『何か書きでもするなら此處で書き給へ、殆んど誰も來やしないから。』

その後二三日して、友は同じ家屋內の事務室といふ札の懸つてゐる一室に私を連れて行つた。其處は他の室よりやゝ廣く、壁には隙間なく世界地圖や日本地圖、航海地圖、萬國々旗表などいふもの、古いのが懸け列ねてあつて、その隅には僅かの書物や帳簿類を入れた箱、同じく簡單な醫療器械や藥品を入れたガラス戶の棚などあつた。中央には間拔けて大きい卓子が頑張つて、其上に唯だ宿直日誌だの新聞の綴込だのが置いてあつて、半ばは砂で白くなつてゐた。

さう言ひながら友は何處からか小形の卓子を持つて來て窓の際に据ゑた。椅子をも割合に新しいのを探して來た。そして雜巾桶を持つて來てその卓子を拭いたり、煙草盆を持つて來て其上に置いたりしてくれた。

『難有う、素敵な書齋が出來た。』

かう言つて私は椅子に凭りながら、斯うした細かい世帶じみた事に氣のつくことなど、以前の彼には見出す事の出來なかつた樣子を感ぜざるを得なかつた。

椅子からは殆んど眞上に眞白な燈臺が仰がれた。手近には唯だ尖つた岩を見るのみで、海は見えなか

つた。秋を思はする風が斷えず窓のガラス戸を鳴らして、獨り居るには靜か過ぎる程の部屋であつた。

この友を初めて知つたのはまだ私が早稻田大學の豫科に居る頃であつた。何課目かの試驗の前でその日は特にそのための質問日とされてあつた。私はその頃夢中になつて讀んでゐた北村透谷の『透谷全集』を敎師の眼の屆かぬ室の隅の机に載せて一心になつて讀み耽つてゐた。その時、私の背後の机にゐたのが彼で、少し伸び上つて覗きこみながらコツ〳〵と私の肩をつゝいた。

『そんげな物を讀んどつちァ落第しますど。』

顏の中で最も眼立つ大きな鋭い眼に微笑を見せて彼は言つた。聞けば彼も同書の愛讀者であつたのだ。そしてお互が九州生れであるといふやうな所から餘り親しくはしなかつたが何だか外ならぬ思ひがしてゐた。彼は肥前の名高い金滿家の二男か三男かである事をあとから私は聞き知つた。

その後一年ほど經つと突然彼の姿が敎場に見えなくなつた。彼と同じく哲學科に出てゐた彼の同鄕生に樣子を聞くと、その男は笑ひながら斯う言つた。何か急に思ひついて鄕里に歸つて二萬圓とか財産を分けて貰つて五島沖の小さな島を全部買ひしめて牛を飼つたり鷄を放したり桑や茶を植ゑてすつかり百姓を氣取つてゐる、が、あの變人の事だからいつまでそれが續くか解らないと。私もその島の名など聞いて葉書を出したが、返事は來なかつた。

その後四五年經つてから私が或る新聞社に勤めてゐた頃、或日突然彼は例の通りニヤ〳〵しながら

私の下宿を訪ねて來た。背廣の黑い帽子を被つて古汚い呑廣を著てゐた。亞米利加から昨日橫濱に著いたのだといふのだ。

その島の百姓仕事は一年餘りで嫌になつて、島全體を二束三文に賣り拂つた金で暫く博多や長崎で馬鹿遊びをしてゐたが、それが盡きるとその頃重野安繹博士などの兄事してゐた老儒者が種ケ島に居るのを訪ねて行つてその學僕になつた。

『初めて行つた時、老先生自身玄關に出て御座つた、入門の事を賴むと默つてその儘奧へ引き込まれたが、やがてちやんと袴を著けてまた出て御座つた。』

と、思ひ出した樣に敬虔な眼をして彼は言つた。

其處ではかなり滿足して仕へてゐたらしいが不幸にも其後間もなくその儒者は長逝した。彼はそれから亞米利加へ渡つた。以前財産を分けて貰ふ時から鄕里の家とは義絕同樣であつたらしいが、渡米の時汽船賃を貰つていよ〳〵家族親族から絕緣を申し渡されたのであつたのだ相だ。果樹園の雇、皿洗ひ、罐詰工場の職工、さうした事をしながら其處此處と流れ歩いたが終に健康を害して昨日橫濱まで歸つて來た。歸る時も一二の日本人と一緒になつて半ば下級の船員同樣の仕事をやりながら太平洋を渡つて來たのだといふ。

『まだ船で取つた金の殘りが幾らかある、これから何處かで一杯飮み直さう、矢つ張り生れた國の酒

が美味いね。』

と自分で註文して取り寄せた下宿の酒に舌鼓を打ちながら彼は言つた。昔ながらの鋭い大きな眼にはもう以前の澄んだ所は失くなつて、いかにも落ち著かぬイラ〳〵した光を宿してゐた。

彼はそれから暫く私の下宿にゴロ〴〵してゐた。繪が好きで、よく繪具箱を擔いで郊外の雜木林などを寫生して歩いてゐたが、どうして傳手を求めたか、深川あたりのペンキ屋の職工に入り込んだ。酒の癖がよくないので、間もなく其店の主人を擲つて飛び出して、今度は電車の運轉手になつた。

東京にも立派な彼の親族や友人などがあつたのに、どうして從來手紙すら往復しなかつた私の所を選んで突然彼が訪ねて來たか不思議であつた。私も丁度その頃彼と同じ樣に焦燥した、落ち著かぬ朝夕をのみ送つてゐたのであつた。一面非常に明るい靜かな生活境を頭に描いて居りながら、眼前の一切にすべて深い興味や執着を持ち得ず、自分から求めた自暴自棄に走りながら、身體を捻ぢ曲げ〳〵して暗い所へ這入つて行く樣な日を重ねてゐた。其處へ同じ型ではあるが自身よりずつと大仕掛の放浪者の入り込んで來たといふことは一面迷惑ではあるが私にとつて非常に心丈夫な事であつたのだ。斯うして新米の電車運轉手と下級の新聞記者とは十錢二十錢の金を出し合ひながら、その日〳〵を一杯二杯の酒に代へてゐたのである。

すると間もなく豫期してゐた不健康が其うちに私の身體へやつて來た。いよいよ東京の生活に耐へられなくなつた時、父の病死など起つて止むなく私は鄕里へ引き込んだ。そして其處に二年近く我慢して、終に再び東京へ出て來た時は、彼は思ひもよらぬ燈臺守となつてこの神子元島へ渡つてゐたのであつた。

東京では似て非なる舊時(もと)通りの生活が私の身に始つた。健康や年齡の加減も加はつて到底舊時(もと)そつくりの狀態に在ることには耐へ得なかつた。人生とか社會とかいふものを唯チラ〳〵と橫目に見ながら自分の性質の赴くまゝにズルズルと思はぬ方へ赴いてしまふことは當時の私にとつて餘りに無意味であつた。そして斷えず頭に描いて憧憬れてゐる自分の眞實の生活と、常にそれに裏切つてゐる放縱な放浪的な性質とを私は先づそのいづれもが共有してゐるらしく見ゆる事業熱によつて調和しようと企てた。

そして、その企てはその何れもを互に混濁させ疲勞させたに留まつて——私全體の生命生活を空しく混濁させ疲勞させたに過ぎないことになつてしまつた。いよ〳〵さうした狀態のどん底に沈んで、手も足も出なくなつたと自分でも思はるゝ昨日今日になつて私は端なくこの洋上の一孤島に靜まり返つてゐる舊友を思ひ起したのであつた。

海面から斷崖の絕頂まで十六丈、絕頂から其處に建てられた燈臺の最高部である燈室まで十二丈の

高さがあつた。その燈室は周圍も屋根も圓くなつて居り、そして總てが厚いガラスから出來てゐた。其處に登れば伊豆の天城山が最も眼近に北の方に見え、その蔭に駿河相模の山々が續いて、その反對には伊豆の七島がとび〳〵に海上に散つてゐた。望遠鏡を取ると恐しい勢ひで流れてゐる黒潮の姿をもあり〳〵と見ることが出來た。ツイ眼を落すと三十丈の眞下に激浪が白々と岩を嚙んでゐた。どうかすると薄い雲がさつ〳〵と風と共に音をたてて、その燈室を掠め飛ぶ事もあつた。霧の立つた夜など、其處に登つてゐると種々の山の鳥がその輝いた一部の空に沿うて怪しい聲で啼きながら飛び巡つてゐる事もあり、または驀地にその壁に飛びついて嘴を碎いて死ぬるのもゐた。多く天城の山から來るのだ相な。

けれども私のやうな神經衰弱症の者にはその燈室は餘りに明るくて、忘れて崖下の浪打際でも見やうものなら今にも其處へ飛び込まねばならぬやうな恐怖に襲はれがちで、到底落ち著いてぢつとしてゐる事など出來なかつた。そして私はその燈室とたゞガラス張の床一枚を隔てた階下の夜間宿直室といふのが好きであつた。燈臺の礎から其室に到るまでは厚さ四尺の花崗石の外壁のなかに螺旋形の暗い狹い階段が廻り〳〵登つて來てゐるのだ。が、その室だけは面積にして疊二枚敷位ゐの廣さを持つた圓い室となつて居り、小さいながら二個の窓がついてゐた。中には机と椅子とが一つづつ、それに油入れの罐や、燈室掃除用の拭巾などが置いてあつて、夜は宿直員一人づつが毎晩此室に詰めて頭上

の燈火を監視してゐねばならぬ筈なのだが、朝の大掃除と夕方の點火とのほかは殆んど其處に登つて來る人は一人もなかつた。

高い〳〵階上の室内に居るといふ意識と晝間でもほんの黄昏がた位ゐの明るさしかない靜けさと、餘程荒れた日でもなくては眼下の怒濤の響すら聞えて來ぬ厚い四方の石の壁とは流石の神經質の私をしてもすつかり身心を解きほぐして全く自由に自分の魂を遊ばせることが出來た。岩の頭で友だちと共に釣を垂るる時のほかは、私は殆んど多くの時間を此處で過した。はては友も笑ひながら私のこの樂しみを妨げようとしなくなつた。

元來この島は周圍十五六町位ゐの岩礁で、固い枝葉の一種の磯草が僅かに岩蔭に生えてゐるほか磯馴松一本をすら見ることが出來なかつた。水も無論無い。洗濯や入浴のためには天水を溜めるやうに鄭重な仕掛がしてあり、飲料水その他の食物及び日用品等をば一週間に一度づつ數哩を距てた對岸の下田港から燈臺附屬の便船で運んで來ることになつてゐた。岩石のほか柔い土といふものが少しも無いので、をり〳〵交替で下田へ渡つて土を踏んで來ないと一種奇妙な病氣に罹りがちである相だ。

私がこの島に渡つてからいつの間にかその一週間が過ぎ行いて、明日は下田からの便船の來る日となつた。友から誘はれた魚釣を斷つて私はまた獨りでその好きな室へ登つて行つた。

椅子に凭つてゐると、眼の前の壁に懸つてゐる唯だ一つの小形の八角時計がチク〳〵と動いてゐる

ほか、全く世界は死んだやうな靜寂に閉されてゐる。とぢた瞼の次第に熱くなつて來るのを感じながら、私はまたこの二三日來頭の中に纏はり著いてゐる問題に就いて考へ始めた。

或日二人とも大きな岩の蔭に默り込んで釣り入つてゐた時に突然友が私を見返つて問ひかけた。

『いま君は一體どんな暮しをしてゐるのだ。』

その聲にはいつもと違つて重々しい力が入つてゐた。二年あまり續けてゐた出版業には悉く失敗して借金ばかりが殘つてゐるし、それ以來何處に勤めてゐるといふでもないといふことをば彼はよく知つてゐる筈だ。そして唯だ僅かに無名の青年文學者として立つてゐるといふだけのことで親子三人の一家がどうして東京の眞中で保たれてゐるのか、さうした狀態についても大抵彼には消息が飮み込めてゐるに相違ない。

で、私もその質問には狼狽した。で、苦笑しながら何といふことなく釣竿を持つてゐる手首の垢づき切つて磨れ破れてゐる衣服の袖口を撮み上げた。

『これさ、どうも斯うも言ふことはないよ。』

友は笑ひもせずにそれにぢいつと眼を留めながら、

『實をいふと僕も君がそんなのを著て來たので初め臺長などに紹介する時、氣が引けて仕方が無かつたのだよ。あの變人の臺長が船著場まで人を出迎へたといふことも殆んど無いことだのに、その日はまた曾て見たこともない羽織袴まで著けて行つたらう。そんなにして出迎へられた君のそのざまと云つたら無かつたのだからねえ、僕は實際泣いたよ。』

さう言はれてみると、私にも言ひ難い羞恥の念が燃えた。

默つてゐる私を尙ほ見守りながら彼は語調を轉じて言ひ續けた。

『どうだ、いつそ僕と同じ商賣を始めんか。』

『え?』

『燈臺に來んか、僕は色々考へたんだが、これは屹度君にも適すると思ふ。』

彼は竿を上げておいて專心に私の方に向いた。

『橫濱にその學校みたいなのがあるのだ、それに六ケ月入つてゐて、出さへすれば直ぐ二十二圓取れる、學校に居る時も七分通り官費でやつて呉れるから月々五圓か三圓もあれば足りるのだ。燈臺といへば大抵何處でも斯んな處だからネ、生活費なんか幾らも入りアせん、此處なんか月給の外に難場手當といふのを呉れるので僕なんかいま二十六圓ばかになるのだが、つましくさへすれば十五圓か二十圓丸きり殘るわけだよ、僕にだつてもう幾らかの貯金が出來てるのだから察しがつくだらう……、何も強ひて殘さないでもいゝがさうして生活の根柢を固めておいて一方で君の創作を熱心にやればいゝ、

ぢァないか。毎日の仕事と云つた所で、朝の掃除と夕方の點火と、二三行の日誌を書けば濟むわけだ、それも交替でだよ、故障なんか殆んどあるもんぢァないよ。暴風雨の日なんかにァ一寸困るがその位るのことァ我慢せんぢァ、』

いつ知らず私が耳を傾けてゐるので、彼は一層熱心になつた。

『滿三十歳まではその學校に入られるから君には丁度一年まだ餘裕があるわけだ、……、なァに入學試驗はあるが小學卒業程度でいゝし、それに若し君が入るとなれば此處の臺長から學校の方に一寸手紙を出させれば身體檢査なんか如何にでもなるよ。學校を出て義務年限が二年あるが、それさへ經てば嫌になつたらいつでも止せるぢァないか。』

その日の談話は尚ほ細々と續いて行つた。そして兎に角僕にも少し考へさせて呉れと云つてその日はそれで終つたのであつたが、その時以來その問題はしつとりと私の頭にこびり著いてしまつたのである。

要するに自分如きは自ら社會の表面に出てずん〳〵と押し進んで行くべき柄で無い。寧ろ物蔭にかくれながら靜かに社會といふものを望み見てしみ〴〵とそれを味ひつゝ、轉じてまた自分自身を味ひ養つて行く、さうした生活が最も身に叶つた自分の路では無いだらうか、若しさうとすれば友の言ふやうにこの燈臺に籠るのなどが最も適當してゐるかも知れない、——私は先づ斯う思つた。

自分は餘りに今まで自分といふものに期待し過ぎた。そしてそのため取り返しのつかぬ自分の生命を刻々に目に見えずして滅して行きつゝあるではないか。その哀しむべき生命のためにもこの厚い石壁の室と眞青な大海とに抱かれて三年五年の休養をとる方がよくはないか——斯うも思つた。そして私はまだ餘りに何も知らない、知つてゐるのはほんの自分一個の眼前を通り過ぎる泡沫のやうな快樂や苦痛に過ぎない、あらゆる人類の底に通じて横はつてゐる深刻な、微妙な根本的の事實に就いては殆んど與り知る所がない。そのための讀書、思索、さうした事に要する金と時間のためにもこの燈臺生活は今までにない便宜を與へて呉れるだらう——斯うも思つた。

が、繰り返し〳〵さう思ひ確めようとするごとにあとから〳〵と不思議なほどの力強い寂しさが身體の何處からか浸んで來て、自分ながら如何とも爲し得なかつた。それはもう理由もない、取り返しもつかぬ絶望的な、冷たいものであつた。

澄んだ、足速な壁の時計のセコンドの響が室内に滿ち渡つて居る。とりわけても風のない日で高く聳えたこの燈臺自身も死んだ樣な靜けさの裡に立つて居る。

矢張り自分は思ひ切つて友の親切な勸告をも斷らう、と終に私は悲しい氣持で決心した。そして、

『三年五年！』

呟きながら離る、ともなく椅子を離れた。實際口でこそ三年五年といふものの、一切先きの知れぬ自分にとつては假初にも油斷のならぬ大切な時間である。その間をさうした休養とか云つてゐる餘裕などは如何にもありさうに思はれない。後は後、今は今、更にまた他(ひと)は他、自分は自分、矢つ張り現在あるがまゝに從つて採れてゐた方が、どれだけ自ら慰められるか解らない。

『それにこの燈臺の人たちの生活の單調さは如何だらう！』

飲み物、食ひ物、見るもの、聞くもの、此頃見馴れてゐる斯うしたものがまざ〳〵と眼の前に並んで來た。そして、あの事務室の戸棚の隅にしよんぼりと入つてゐる埃だらけの藥品と醫療器械とを思ひ起すと、舊(もと)の健康を失つてゐるだけに、急に身體がぞつ、とした。

この風ならば明日は早く船が來るであらうと、今にもその船の見える樣な氣持で、そゞろに小さな梯子から上の燈室へ登つて行つた。

海は誠によくはれて、大島の三原山の頂きには煙か雲か眞白に纏はり著いてゐる。それでもよく見れば流石にもう十月の末だ、吹くともなく西風が吹いてゐるらしく、島に近い海面には光つた波が先きから先きへ一齊に白けだつて續いて居る。

不圖眼を落すと燈臺の下の磯で釣つてゐる一人の男が居る。一本だな、と思ひながら見てゐると側の岩かげからその細君も表はれた。魚の餌にする小さな蟹を取るのはいつも彼女の役目であつた。

ぢいつとそれを眺めながら、明日はこの友とも別れるのだと私は今更の樣に思ひ當つた。

狐か人か（少年小説）

一

日本歴史のずつと初めの方によく出て來る日向國、其處が私の鄉里である。地圖を開いて見ると日向國に耳川といふ河が流れてゐるだらう。餘り大きい川ではないが、それでも高瀨舟（激流を上下する細長い川舟を私の國では高瀨舟と呼んでゐる）が三十里近くの間通つてゐる。その河の河口の美々津港から今から二千五百年の昔に神武天皇が小さな船に帆をあげて東征の途に上られたのであつた。その耳川のずつと上流の山々の間の村で私は生れた。

それこそ西を向いても東を向いても高い高い山ばかりで、明けても暮れても青い大きな山ばかりを眺めて私は育つた。そんな處だから私の村には尋常小學校があるきりで、その尋常科を卒業すると、私は私の村から十五六里も離れた或る城下町に出て、高等科と中學校とを修業せねばならなかつた。丁度中學の二年級の頃であつたと思ふ。私は春の試驗休みで一週間ばかり其町から私の村に歸つて

ゐた。そして或日のこと、隣村の叔母のところへ遊びに行つた。隣村と言つても五本松峠といふ上り下りで五里餘りもある大きな山を越さなくては行けないのだ。幼い時から山には馴れてゐるので、別にそんなに恐いとも思はず、私は一人で其山を越えて叔母の家へ行き、二晩程泊つてまた其路を自分の家へ歸りかけた。山の中に生れた故か、私は幼い時から獵が好きであつた。重くてよく持てもせぬ癖に父の獵銃を擔ぎ出して小鳥を打つ眞似などをしてゐた。で、父も母もそれを危ながつて、そんなに好きならといふので、或時父が大阪に行つた土產に小さな杖銃を買つて來て呉れた。御承知の通り杖銃は長さが三尺ばかりで、輕くはあるし、子供の私が弄んでもそんなに危險でなかつた。そしてかなり大きな鳥などでも打つことが出來た。自慢ではないが、其頃から私は銃を打つことが上手であつた。

叔母を訪ねて行く時にも其杖銃を持つて行つた。行く路には餘り打てなかつたが、歸りには澤山な鳥を打つた。その五本松峠の頂上に登りつく頃には、鵯や、樫鳥などを十二三羽も打つて腰に吊してゐた。それが段々重くはなるし、路は嶮岨だし、山國ではまだ肌寒い四月の初めなのに、全身に汗をかいて、私は漸くその峠の頂上に辿り着いた。流石に山が高いだけ、其頂上の眺望はまた素敵であつた。山といふ山の峰々が深い霞の中に浮き出てゐて、其間を縫ふやうにして細く白く光つてゐるのは谷や川である。遠くの山はただ薄紫に霞んでゐてよく解らないが、近くの峰々には時を得顏に山櫻が風もない靜かな眞晝に麗かに咲き盛つてゐる。現に私の佇んでゐる附近にも其木の太やかなのが一二本あ

つて、薄紅の花びらが、頻りにほろほろと散つてゐる。子供心にも私は此景色を美しく思ひ乍ら、よく四方の見渡されるやうな場所を選んで其處に腰を下した。つい周圍には早蕨の可愛らしいのが幾つも萠え出してゐる。身體を落着けて、身も心も靜かになると、四邊の木にいろいろの鳥の啼いてゐるのもよく聞えて來た。今は景色に見恍れてゐるので其聲を聞きつけて、直ぐ杖銃をとり直す心もなかつたが、それでも腰から十二三羽の見事な獲物を取り外して、あれこれと手に取つて見る樂しみをば忘れなかつた。少し息も休まつてから、私は辨當を食べ初めた。正午には少し早かつたが、お腹が充分に空いてゐた。一口二口食べてゐると、その美味は眞實骨身に響くやうであつた。

二

わざとゆつくり食べてゐると、不圖奇妙な物音が耳に迫つて來た。最初は自分の耳鳴でもあるだらうと氣にも留めなかつたが、何となく氣に懸るので聽くともなく耳を澄すと、どうもそれは耳鳴ではない。微かながらもドンドンと響くのは太鼓で、ガンガンと鳴つてゐるのは鐘か何かの音である。私は思はずぎよつとした。自分の居るのは山の中である。しかも高山の頂である。其處等附近二三里が間には人家らしいものの一つもないこともよく知つてゐる。犬とか牛とかの啼聲でもあるならばまだしものこと、鐘や太鼓の聞えて來る理由はどう考へてもあるべき筈がないのだ。早や慄き初めた胸の動悸を

強ひて押し靜めて私は更に耳を傾けたが、今は早や疑ひもない鐘太鼓の音である。その間に混つて人間の叫んでゐる聲もする。何時の間にか私は握飯を摑んだまま立ち上つてゐた。

殆んど無意識に私は小さな鐵砲を引き寄せた。そして既につめてゐたケースを引出して、代りにそれよりやや大きな散彈を詰め込んだ。それから獲物の小鳥をも身近に引寄せた。遠くに聞えてゐる鐘太鼓の音を私はてつきり狐か狸の仕業であると思つたからだ。私の持つてゐる獲物に眼をつけ、かういふ怪異を示して私を誑かしながら、それを盜まうとするに相違ないと信じたのだ。さういふ事は現に今日でも私の鄕里には度々行はれてゐることである。で、もう眼前に狐か狸の群が迫つて來たやうに思ひ込んで、私はしつかりと身構へた。

これも山國の習慣で、山に入る時には何か刃物を身に帶びる事になつてゐるので、私も其時短刀を腰にしてゐたが、それにも心を配つた。ともすれば齒の根がかたがたするのだが、今はもう恐いの怖ろしいのと言つてゐる時でない。逃げるにしても此深山をどう逃げられるものではない。力の限り防戰するより外はないのである。これも土地の習慣で、狐狸に誑されたと思ふた時には決して一歩も動くな、動けば危險いと言はれてあるので、幸ひ其處にあつた松の根がたに學校で教はつた「折敷きの構へ」で、鐵砲を持つたまま無理に沈着を裝うて、今にも迫つて來る危難に對して待ち設けた。もう其時は身體中が耳ばかりになつたやうで、例の怪しい物音は益々明かに、人聲も次第に近づいて來る。

隨分長い間同じ姿勢で私はその物音のする方向に向つて待ち構へてゐた。幾らかづつ近づいては來るが、中々遲い。ぢいつと見張つてゐる私の兩眼からはぽろりぽろりと涙が浸み出はじめた。いつそのこと、此方から聲を掛けてやらうかと思つたが、聲がどうしても出ない。咽喉が引きつけるやうで、呼吸すら苦しくなつた。咽喉ばかりでなく、力を張り切つてゐる全身まで石のやうに固くなり、且つ痛くなつて來た。たうとう耐り兼ねて、私の指先は鐵砲の曳金に觸れた。どーんといふ響は山から山、谷から谷へ長い尾を引いて響き渡つた。と同時に、不思議なるかな、鐘太鼓の音がハタと止んだ。思はず私も立上ると、今度は今迄よりも統一した明かな人間の聲で、オーイと叫ぶのが聞えた。今の一發の鐵砲で、いつか身體に餘裕が出來たものと見え、思はず知らず私の咽喉からも、オーイといふ聲が出た。

オーイと呼び、オーイと應ふる。どうもそれが眞實の人間の聲らしくてならなかつた。しかも幾らか聞き覺えのある聲のやうにまで思はれて來た。かうまで巧に化けられるものかとは思ひ乍ら、私はまた聲をかけた。

『オーイ、誰かッ。』

『おつどむぢア、わりやアだりか（俺達だ。お前は誰だとの意味。）』

とすぐ斯う答へた。まがひもない人間の聲である。

『俺だよ、俺だよ。』

と私は我知らず續け樣に本音を出してから答へた。

すると何かがやがや騷いでゐたが、急にこちらを指して登つて來るらしい樣子だ。もう太鼓の音などはしなくなつた。私は直ぐ鐵砲の彈を新に込め代へたが、もう今迄の樣な姿勢をしてゐなかつた。提げたまま松の根方に立つてゐた。

三

がさがさと下の木立の中から登つて來るのを見てゐると、眞先に出て來たのが私と同じ村の若者で仁三といふ男、その次が同じく德といふ元氣者、あとから續いて來る四五人の者も皆見知り合ひの村の者どもだ。見れば各自に石油鑵の空や金盥の古や太鼓やを提げてゐる。

向ふでも私を見て驚いた。如何してこんなところに來てゐるのか、同伴の者は誰かなどと尋ねる。私は叔母の許に行つた歸り路のことを答へて、お前達は何故そんなものを持つてこんな山の中を騷ぎ廻つてゐるかと訊いた。すると德は笑ひ出した。

『坊なよつぽづおづかつたどハハハハハ（坊ちやんは嘸恐しかつたでせうといふ意）……』

私もつい笑ひ出したが、それでも不審は晴れなかつた。なほよく訊けばかういふ譯なのださうだ。

矢張り私どもの村に松藏といふ大工がゐた。この男はこれまでにも一二度神隱しに會つたことのある男だが、今度もまた神隱しに合つた。以前の事もあるので、一二日もすれば歸つて來るだらうと捨て置いたところ、今度は中々歸つて來ぬ。もう今日で四日目にもなつてゐるので、村の者もそれぞれ手分けして山から山を鐘太鼓で搜してゐるのだといふのだ。なアンだ、そんな事かと私にも理由が解つて、今度は心から大笑ひをしたのであつた。神隱しといふのは矢張りこんな山深い所にはよくある話で、何といふ理由もなく不意に人が居なくなることがある。一日か二日でその人はまたぼんやりと村に歸つて來ることもあり、終には行衞不明になつてしまふこともある。歸つて來た者の話を聞くと、何だか大變立派な御殿の樣な所に行つてゐたと答へる者もあり、どんな所を如何して來たか、一向に解らないと言ふ者もあつた。眞實に山にそんな惡戲好きの神樣があつてする仕事か、それとも狐狸の仕業か、理由は確と解らなかつたが、兎に角度々そんな事が行はれてゐた。だから松藏大工がそれに會つたと聞いてもそれ程驚きもしなかつた。いづれ茫然して二三日うちに歸つて來ることと子供乍らにも思つてゐたが、二三日は愚か、一月經つても一年經つても歸つて來なかつた。……。

麥の秋

ふと眼を覺すと、隣の部屋ではもう人聲がしてゐた。いつものやうに彼はそれを聞くと寢返りをして雨戸の方を見たが、其處の節穴にはまだ何の明るみも無かつた。

澄ますともなく耳を澄ますと、隣室の物音が平常と違つてゐるのに直ぐ氣がついた。いかにも何かを憚つたやうな、ひそ〳〵した調子である。そして聞き馴れぬ聲すら混つてゐる。

『は、ァ、始つたな！』

と彼は思つた。

果して產婦の忍び兼ねたらしい唸聲が聞えて來た。

聞き馴れぬ聲は隣家の女房らしい。低いながら力をこめて、今一度產婆さん所まで迎へに行つて來いと宿の娘に言ひつけて居る。

『獨りぢァおつかねえなァ！』

『ぢァ、辰ちやんを連れて行きな』

『いやだア、おらア』

夙くから起されてゐたのだらう、弟の辰ちやんの聲もいつもの寢惚聲ではなかつた。お婆さんがゐないので皆困つてゐるのだと彼はまた寢返りをしながら、一昨日の夕方あたふたと横濱へ出かけて行つた宿の婆さんのことを思ひ起した。

彼が部屋を借りてゐる家には平常はその婆さんと二人の孫としかゐないのであつた。家を繼いでゐる一人きりの息子は半農半漁の家業を嫌つて、海軍を志願して出てゐたが、それから歸つても東京や横濱に出て種々な仕事に手を出してゐたが、數年前から横濱で小さな運送業を始め、達磨船の一二艘も作つて、今度はやゝおちついてその仕事を續けてゐた。その達磨船はいつの間にか失くして行つた田畑のあとに辛うじて婆さんが引留めて置いた家や宅地や家のめぐりのほんの食扶持の田畑などを全部抵當にして借りた金で作つたものであつた。此頃ではその金の催促が隨分烈しくなつてゐるのを彼は知つてゐた。どうせあれの代でこの家も壞れるのでせうよ、とさうした用件の手紙の代筆を彼に賴みながら婆さんはその時々に愚痴をこぼして泣いてゐた。

臨月だといつていつもの樣に子を產みに嫁が横濱から歸つて來たのは先月の初めであつた。もう四十歲を越した女で、初產の時よりも恥しいと逢ふ人ごとに言譯しながら、わけても目に立つ大きな腹を抱へて不安さうにその日の來るのを待つてゐた。矢張り齡が齡だからだらう、どうも月が遲れるやうだとも婆さんと話し合つてゐた。

其處へ突然息子から病氣危篤の電報が來たので、產婦と子供とを殘しながら婆さんは取るものも取りあへず橫濱へ出かけて行つたのであつた。妾の來る頃から脚氣の氣味だつたが、大方それがひどくなつたのだらう、一昨年もそのために命を取られかけて五ケ月も寢てゐたこともありましたし、それに今年はまた丁度四十二の厄年にも當つてゐますから、といよ〳〵心細げに產婦はその後で彼に語つた。

何か小言を言ひ〳〵幼い姉弟は隣家の女房に叱られて家を出て行つた。眼はすつかり覺めて、もう起きやうかとも考へて見るのだが彼の枕許の節穴はまだはつきりとは明るまない。何とはなく胸がときめいて手足には微かな汗を覺えながら、彼は聞くともなく不快な唸り聲を床の中で聞き續けてゐた。

產婆らしいのが子供に連れられてやつて來た。模範村とかいふのにしたいため貧乏役場なのにも係らず年二百圓で村長が東京から雇ひ入れたといふ產婆だナ、と思ひながらまだねつかから年若さうな東京辯の女の聲に耳を傾けてゐたが、間もなく石炭酸の臭氣が襖を漏れて來るやうになつて彼は終に跳ね起きた。

思つたより戶外は明るかつた。そこ〳〵に顏を洗ひ、濡手拭をさげたまま濱の方へ歩いて行つた。

風いだ海向うの山脈は濃い藍色にうち續いて、その中腹から麓にかけていかにも夏らしい靄がうつすらと棚引いて居る。今日も晴れるナ、と思ひながら浪に近い濡砂の上に蹲踞んで彼は燐寸に火をつけた。

一時間あまりも濱にゐて宿に歸つたが、まだ子供は生れてゐなかつた。直ぐ溫いのが出來ますからと加勢に來てゐる近所の女房達の言ふのを聞き流して、昨夜の食ひ殘りの飯を掻き込むと直ぐ彼は釣竿を取り出してまた家を出た。石炭酸の臭氣は今は家いつぱいに流れて、さも事ありげにひそ〳〵と喋舌り合つてゐる漁師の女房どもはいつの間にか三四人にも增してゐた。それに隨いた鼻垂らしの子供だちも大勢庭さきや土間の中に集つてゐた。

氣が向かぬせゐか、その日はいつもほど釣れなかつた。小さな半島の岡から岡の田畑の間を縫ひながら流れ出てゐる薄濁りの小川で沙魚や小鮒が釣れた。土地の者は子供たちですらそれを釣ることを面倒臭がつてゐたが、彼は浪の荒い磯に出て黒鯛や鱸を釣るよりその藪蔭の濁つた淀みに人にかくれて絲を垂れることを好んでゐた。半日も坐つてゐると少くとも三四十疋は釣れるのが常であつた。

彼の行きつけの場所は對岸が暗く茂つた孟宗竹の林で、一方は木や竹の淺い藪となつて居り、その藪蔭に腰を下すと彼自身にも淵の上にも殆んど日光の射さぬやうな所であつた。斑らな木洩日は何かの生物のやうにくつきりと水や岩の上に影を投げ、風でも立つと鉤を下す場所もないほど孟宗の枯葉が水の上に散り布いた。直ぐ川下の瀬の響や、孟宗竹のあちらで鳴く鶏のほかに、投げ出した彼の足のめぐりを這ひ廻る無數の小蟹の足音などが僅かに耳についた。

釣り飽いた彼は竿をそのまゝにしておいて藪蔭のやゝ乾いた所を選び、用意して來た新聞紙を幾枚か重ねて敷いて其上に仰向けに寢轉んだ。白と淡紅と斑になつた蔓草の花が椋の稚木の枝からツイ彼の顏の上に垂れ懸つて咲いて居る。そしていかにも初夏らしい強い匂ひがその花から滴つて來た。靜かな日で彼さへ動かねば附近の竹の葉ひとつ動かうとしない。をり〳〵吹き出す彼の煙草の煙がその蔓草に纏りついてはやがてかすかに消えて行つた。

睡眠不足の氣味か、彼は朝から妙に頭が暗かつた。何か不吉の事の起り來る前兆のやうな、いらいらした落ちつかぬ氣持が胸いつぱいになつてゐた。まだ耳に殘つてゐる產婦の唸聲、橫濱に行つてゐる耳の遠い婆さんの顏、戰爭以來損失續きで唯一の商賣道具である達磨船すら今にも借金の抵當に取られかけてゐるといふその息子の病氣のこと、それらが斷れ〴〵に頭の中に浮んでは消えた。さうかと思ふと、この二三ケ月米味噌の拂すら滯りがちで今は取りつけの店への出入すら苦しくなつてゐる自分自身の現在が思ひ出されて、はてはまた此儘にしてゐて一體自分等はどうなるのだらうといふ此頃ともすれば起りがちの不安までだく〳〵と起きて來た。

よく〳〵費用も盡きて醫師とも相談の上、永い間の妻の病氣を全治さすため彼がこの半島の漁村に移り住んでからいつのまにか一年半あまり經つてゐる。移つてからも隨分執拗であつた病氣も土地のい、ためか知らず〳〵恢復して丁度今から一月ほど前、それまで看護に來てゐた彼女の妹を送りかたぐ〳〵二人の子供を連れて妻は其處から五六十里距てた山國の實家の方へ歸つたまゝ、まだ彼の許に歸つて來ないでゐた。初め妻のために思ひ立つた事ではあつたが、この海岸へ移つたことは彼自身にとつても寧ろ偶然に永い間の希望が果された形であつた。彼は夙うから東京の亂雜な朝夕を嫌つてゐた。そして自分の營んで行かうとする眞實の生活から知らず〳〵離れて行くやうな不安と焦燥とを常に感じてゐた。彼は自身の性質が人なかに立つて派出な暮しをして行くことより、常に蔭に〳〵とかくれて、靜かに他を見自己を眺めて暮して行くことを好んでゐるのを知つてゐたのである。それかと云つて東京を離れてしまふことは第一職業——定收入から離れることであり、且つは彼の日頃から抱いてゐる和歌の研究創作の上にも不便を生じはせぬかと氣づかはれ、またその和歌を作ることによつて僅かに得てゐる文壇上の地位を危くする惧もあり、なか〳〵斷行し得なかつたのである。それが今度止むを得ぬ事情から斯うして田舍に移つて來て、次第におちついて來てみると、定收入を失つた苦痛のほかは總てが杞憂に過ぎなかつたことが解つた。研究には兎に角、單に創作する方から云へば東京で忙しい中にやつて居るより遙かに自由に胸一杯に作ることが出來るし、同僚の間で最も忌み嫌つて居る「都落ち」といふことなどてんで頭に上らない位ゐの强い創作慾を感ずるやうになつてゐたのである。そして自分はいま初めて自分の眞實來ようと思つてゐた所へ來てゐるのだと思ひ出した。

で、妻の恢復したのを認めても彼はまた東京へ引返すことを欲しなかつた。そして、不自由な寂しい漁村の生活では月二十圓餘もあれば、如何にか一家四人が暮して行けるので、その費用をば彼はその好む道の歌を詠むことによつて得ようと企てたがそれはなか〳〵思ふやうに行かなかつた。

歌を詠む、といふことに就いては彼は相當に了解と自信とを持つてゐた。そしてその事を考へ始めると前後の區別もなく自分の思ふだけのことをやつて見たくて仕樣がなかつた。今度海岸へ移つた事が端なくその希望の一端に觸れると共に、彼はもう是が非でもその境地から動くまじと思つた。それと同時に浪の音ばかり聞いてゐるこの靜かな朝夕は、今まで餘り考へもしなかつた自分の身のなりゆき、これからを如何して暮して行かうか、といふやうなことを續いて考へさせ始めた。今まではたゞどうにかその日その日を過してさへ行けば他は何かに紛れて氣にもならなかつたが、その日〳〵の事さへ覺束ない今の身になつてみるともう眼の前にはつきりとしてその不安が横はつて見えるのであつた。いつのまにか三十を越してゐる自分の年齡、何の不安も無げに從順に自分に從つてゐる妻、めき〳〵大きくなつてゆく二人の子供、さうした背景がその不安の影をいよ〳〵濃くして現はれるのも此頃の習慣である。

さく〳〵、さく〳〵といふ鎌の音がする。

彼の寢てゐる藪のあちら側はすぐなだらかな登り傾斜の畑となつてゐて、黄色く實つた麥を一人の男が刈つて居るのである。向うでは彼の寢てゐるのに少しも氣づかぬらしく、ただ專念に刈り入つて居る。藪ごしに見る外光はきら〳〵と砂地の畑に照り輝いて、その男の顏や五體の輪廓がくつきりと浮き出てゐる。

彼はその男を驚かすのを厭つて、ずつと遠くへ刈つてゆくまで我慢して寢てゐたが、やがて起き上つた。もとのまゝになつてゐる釣竿を上げてみると、思ひがけずも一疋の大きな沙魚が鉤に懸つてゐた。微笑しながら彼はそれを魚籠に投げ入れたが、魚籠にはほんの十疋たらずしか入つてゐないのに氣がつくと直ぐそれを逆さにして全部水の中へ放してやつた。中には既に眞白な腹を上にして水の上に浮ぶのもゐた。

藪を潜つて麥畑の畔に沿ひながら二三丁も川下の方へ下ると、眞白に立つ濱邊の浪が見えた。彼は日中の道路を行くのを嫌つてその濱邊へ出ようと道を横切つて松原の小徑へ歩み入つたが、すぐその松原の中の二軒の小料理屋の前を通りかゝつた。すると、その一軒の店さきから一人の女が飛び出していきなり彼の提げてゐた魚籠を引き取つて中を窺きながら頓狂な聲で笑ひ出した。それを聞いて奥からもまた一人同じやうなのが出て來た。いづれも二三度顏馴染のあるその店の酌婦である。

喫驚してその光景を眺めてゐた彼は、不圖何か思ひついた。

『オイ、晝飯があるか』

『あるわ、自宅（うち）にだつて！』

それでも魚籠と釣竿とをば忘れずに彼が宿に歸つた時には、もうものも言へない位ゐに醉つてゐた。縁側から上ると直ぐ、砂だらけの脚を洗ひもせずに其儘倒れて睡てしまつた。そして、眼の覺めた時はもう室内が薄暗くなつてゐた。惡酒のあとの頭がつく〳〵痛んで居るのを我慢して起き上ると、彼は先づその足許に近く机や本箱などが亂雜に投げ散らされてあるのを見た。

彼は二間借りてゐた。八疊の一間を妻や子供の居室に宛て、奥の暗い六疊をば自分の書齋としてゐた。

自分にとつては大事な机や本箱が無斷でこの八疊に運ばれてゐるのを見て醉後の頭に發作的に不快を感じたが、ふら〳〵立ち上つて六疊との間の襖を開いてみた。すると、其處の眞中に棄てられたもの、やうに赤ん坊が寢せられてあつた。まだ何處かに石炭酸の臭ひが殘つてゐた。

板の間になつてゐる臺所を通つて平常宿の人たちの居る茶の間へ行かうと重い木の戸を勢ひよく開けると其處には小さな屏風を立て、產婦が寢てゐるものとのみ思つ

てゐたのである。

彼は默つて爪先立て、直ぐ引返した。そしてもとの八疊を通つて緣側づたひに茶の間に入つた。其處にはまだ灯もつけないで、婆さんが一人長火鉢の側につくねんと坐つてゐた。

『オ、、いつ歸りました、お婆さん！』

實際意外でもあつたので、尙ほいつもより大きな聲で彼は呼びかけた。七十八歲だといふが、耳の遠いだけでまだなか〳〵しつかりした、きかぬ氣の老婆である。

『エ、、エ、、先刻歸りましたよ、また留守中にとんでもねえお世話樣で……』

『イエナニ、それでも案外に輕かつたやうですね、男ですか女ですか、赤さんは？』

『男でしたよ、丁度私が留守にしてたもんだで旦那にも……』

『それで橫濱は如何でした、何でも無かつたのでせう』

『それがネ、永いことこつちに隱してゐたもんですからネ、嫁が來ると直ぐ病みついて、もう今ぢア大變なことになつてゐて……ほんとに、魂消てしまひましたよ』

いかにも煩りなげな、殆んど聞き取り兼ぬるやうな口吻である。彼も何とはなしに驚いた。

『一體何です、病氣は？』

『胃腑氣だつてますがネ、一昨年もそれで命を取られかけたことがあるもんですからネ、……』

脚氣には生れた土地に歸るのが一番だつて云ひますからネ、一刻も早くと思つて明日こちらに歸つて來ることになりましたよ、橫須賀まで蒸汽で來て、橫濱の親類が二三人附き添つてネ、あれから俥ぢアよくねえつて云ひますからネ、村の人から駕籠で迎ひに行つて貰つて……』

そんなことになつてゐるのかといよ〳〵彼も驚いた。自分の言ふことだけ、ねち〳〵と言つてゐる俯向いた婆さんを見てゐると、何とも慰めやうもない氣がしてそこ〳〵に自分の部屋に逃げ歸つた。

ランプをつけると、机と本箱、積みくづされた書籍や雜誌がいよ〳〵眼に立つ。何しろ弱つた、今のうちは兎に角、子供たちでも歸つて來たらこの一間だけで如何しやうと、彼は四邊を見廻した。そして、三四日のうちに實家を立つてこちらへ歸つて來ることになつてゐる彼等のことを思ひ起した。

立つたまゝ、ぢいつとしてゐると、襖越しに赤ん坊の泣く聲が起つた。案外にも大きな、烈しい泣聲であつた。

妻の居ぬ間、飯だけ婆さんから焚いて貰つて副食物は自分で造へることになつてゐた。で、その翌朝彼はまだ顏も洗はず齒楊子を口にしたまゝ、深い椿の木立にはまだ朝日も流れてゐず、しつとりした曉の靜けさが今日も快晴をほのめかしてゐた。裏の井戶端で馬鈴薯の皮を剝いてゐた。井戶を圍んだ

『ようござんすよ、私が剝いてあげますよ』

婆さんが土間から出て來た。一二日のうちにめつきり力が無くなつたやうに見受けられる。強ひて彼から庖丁を取つて蹲踞んで剝きかけた。彼も同じくその笊を中にして蹲踞んでゐた。

『奥さんがお留守ぢァ、なか〳〵たいていぢァありませんネ、何時ごろ歸られます』

『三四日のうちだらうと思ひますがネ、子供が二人とも麻疹に罹つたとかで、すつかりのび〳〵になりました。そして、如何です赤さんの阿母さんは？』

『難有うございます、お蔭にネ、今々のとこ何ともありませんが、何しろ、また病人も歸つて來ますし……』

手もとの馬鈴薯の皮が長く地に垂れて、俯向いたきりの婆さんは何やらまだ言ひ足し度い樣子であつた。彼はただ默つてその後を待つた。

『それでネ、斯んなこたァ氣の毒で言ひ出せねんですけんど、産婦は寢てるし、その上また病人が歸つて來ると……、病人の居る宅つてものはねえ、何だかいやァなもんで、それに見舞人だとかお醫者だとか、出たり入つたりも多なりますから、どうか旦那に座敷を明けて貰ひてえつてネ、昨日からも皆で話したんで御座いますよ』

彼はは、つと思つて齒を磨く手を止めた。婆さんは、尚ほ俯向いたきりで先を續けた。

『旦那もネ、急ぢァお困りなさろと思ひますけれどもネ、何しろ今日病人も歸つて來るもんですから

……、またあとはあと、して入用なもんだけでも持つて、何處か他を探して貰ひてゃんで御座いますよ……、昨夜ネ、申し上げようと思つたんですけれどもネ、旦那があんなに醉つて歸つて來なさつたもんだから……』

婆さんは初めて輕い笑ひ聲になつて何だか狡さうな瞳を上げた。

ひとの氣も知らないで、といふ反感からかとも彼は一寸考へた。昨夕あれから飯を食ふのもいやで茫然としてゐる所へ二三週間前彼の近所へ東京から移り住んでゐる友人がぶらりとやつて來た。妙に淋しくひと可懷しくなつてゐた所だつたので、强ひて引き留めておいて酒などを取り寄せながら、二人して遲くまで飮み合つたのであつた。そしていつもの癖で心づかひはしながらもツイ高話もしたらうし、馬鹿笑ひも出たかも知れぬと思ひ起した。

何しろ彼に取つては非常な迷惑であつた。今日といつて今日引越せるもんぢァない、第一近所にそんな宿が無いと彼は先づそれを思つた。昨夜の友人が突然東京から一家族して彼の許へやつて來て、僕もこれから君の樣にこちらに移つて夙うからの希望の小說を專心に書いて見たいと思ふから何卒ひとつ適當な宿を探してくれと言ひ込まれた時、三四日もか、つて探したのだが、適當な空間も空家も無かつた。どゝのつまり詮方盡きて街路沿ひの前、煎餅屋の古汚い座敷を無理に借り受けて移り住んだことを目の前に見てゐるのである。終日砂埃を吹き込まれてこの暑いのに障子すら自由に開けることの

出來ないやうなその陰氣な部屋の光景が彼の頭を掠めた。

急に彼はいら〳〵して來て楊子を手に移しながら立ち上つた。

『それアお婆さん亂暴だ、そんな馬鹿な話があるもんぢアない、困るから今日出て行けつて、それアお婆さんも困るだらうが僕の方ぢア猶ほ困りますよ、第一昨日無斷で六疊の方の書物をあゝ亂暴に投り出されたのすら僕はいゝ氣持はしなかつた、幾ら場合が場合だつて一應何とか斷つてからにしたらいゝぢアないか』

性來直ぐかつとなる彼の癖は此頃ことにひどくなつてゐた。そしてわれ知らず聲高になつたことに氣がつくと、彼は自分の身にまだ昨日の酒氣の殘つてゐるのにも氣がついた。そして、急いで調子を落した。

『然し、今の場合そんなことを言つてた所で仕方がありませんから、如何でせう、いま二三日あの八疊だけあのまゝにしておいて頂けないでせうか、その間に何處か探します、實際僕も弱りますよ、僕獨りならまだ方法のつけやうもありますが、二三日うちには子供たちもやつて來るものですから……』

婆さんも立ち上つてゐた。小作りの、にや〳〵しながら默つて俯向いてゐる姿を見ると、平常は極く善良な老人ながら一度何かに怒つて拗ねたとなるともう一切あとさきの見えなくなるこの人の性質を知つてゐるので、そのにや〳〵した顏を見ると、思はず彼もにやりとして話を切つた。

婆さんの孫が二人、近所で評判の意地惡なお喋舌な漁師の嗚が一人、ツイ其處の土間の入口に立つて眼を張つて此事を見てゐた。

綺麗に剝かれた馬鈴薯は笊の中に眞白に滿たされてあつたが、それを煮る氣もしなかつた。彼はこそこそと朝飯を掻き込んでまだ奧齒に物を噛みながら戸外へ飛び出した。そして、取り敢へず富士屋へ寄つた。富士屋は彼がその村に移つて以來、唯だ一軒だけ往來してゐる家で、その店から彼は米も味噌も酒も其他の雜貨などまで取つてゐるのである。

『どうも困りました、何しろ突然だし、それに此間の友人の時で他においそれと移る所の無いのをよく知つてますからネ、全く途方に暮れました、無理なお願ひだが、またひとつこちらの周旋で何處か無理にも見附けて頂くことは出來ないでせうか』

其處の主婦は東京から來た女で、物言ひも樣子もすつかり土地の者とは異つてゐた。主人は郡會議員などしてゐて、村唯一の利者である。多くは店にゐなかつた。

『困りましたネ、恰度また奧樣もお留守の時で……、それはまア、ほんとにお困りでせう』

考へる樣な樣子をして、

『左樣ですねエ、ほんとに此處等の人たちは惡い癖で廣い座敷が空いてゝも他に貸したりなんかすることを嫌ひますからねエ、……、左樣ですねエ、彼處は如何でしたアノ岡の松中の家は？』

『エ、此間の時、友人と一緒に見て來ました。どうもまるで妖怪屋敷ですよ、廣いには廣いが、眞つ暗でしてネ、壁なんてばら〳〵に破れて、月の晩なんかい、でせうが、雨降りには、傘でもさして寢なくちアなりますまいよ』

『ハツハ、、、それではねエ、何ぼ何でも……、アノ、役場の裏の婆さん一人の家は？』

『あれも見ました、靜かでい、場所ですけれど疊が半分きり敷いてないんです、イエ、上げてあるのでなくて頭から無いんです』

主婦の心當りの家といふのは全て此間、友人の時に彼等の見て廻つた所ばかりであつた。其處へ主人の末の弟で、店の手代やら御用聞きやらの樣なことをしてゐる若い男がのつそり歸つて來た。

『ア、い、所だつた……、ねエ、新ちやん、また一つお前さんのお骨折を願はなくちアならない事が起つたんだよ、吉田さんが今日岡の家から追つ拂はれなすつたんだとサ』

『へ、エ、どうもそんな事になりアせんかと思つてましたよ、へエ、さうですか、それアお困りでせう』

『困るも困らないも、三界家無しだ、どうしてもまた君を間誤つかせなきアならないことになつて來た、何卒よろしく』

彼は若者の肩を輕く打つた。

『困りましたねエ、何しろ此間の谷口さんの時でさへあんな風でしたからねエ』

印袢纏の裾を捲くるやうにして店さきへ腰を下して柱へ背を凭したが、帽子を摑んだまゝ、彼のまだ立つてゐるのを見ると、

『まアお掛けなさい』

と火鉢をつきやつておいて、

『さうですかねエ、それぢやア何ですか、岡の家の圓三さんも駕籠で歸つて來るやうになつたんですか、……危いもんだ、一昨年だつたかも、もう少しだつたんですからねエ、若しものことがあると、第一、あの家は如何なるだらう』

『ネ、新ちやん、圓三さんは自宅の保險を續けてるかい』

富士屋では何とか生命保險會社の取次をもやつてゐた。

『い、エ、昨年の五月に懸つたきりで、あとはもう切れてますよ』と言つて突然驚いたやうに、

『オ、さうだ、自宅の保險を中途で止した人はどうしたものか、そのあとで皆死んでる、エ、ト、……』

三四人の例を數へ立てた。嫂も、心から驚いたらしく聲さへ細めて半ば立膝の身體を火鉢の側に寄せた。

續いて産婦の話が出た。婆さんの話も出た。彼もせうこと無しに火鉢の近くに腰を下した。

『ねエ嫂さん、彼處はどうだらう、お米婆さんの家は？』

『だつて狹いぢアないか、それこそ二間借りられたら婆さんのゐる所は無くなつてしまふ』

『なアに、婆さんをば追ん出しちまうのさ、そして五十錢も餘計にやると婆さんはまたそれで何處にでも首を突つ込む所を見つけるだらう』

『左樣さネ、婆さんが聞くか如何だか、まア當つて見な、物は試しだ』

『何處なの、それは？』

彼は漸く口を入れた。

『ソラ、野比の橋の方に行く途中の左側に石地藏があるでせう、あの直ぐ横手に曲る小さな路があつてその角に小さな家があるぢやアありませんか、あれでサ』

『ア、ある〳〵、月見草が澤山咲いてる所でせう、成程、彼處なら佳いなア、海も見えるし！』

彼の心には月見草の中の石地藏ばかりではなくその家の戸口に錢葵の花が眞赤に咲いてる光景も浮んで來た。

『どうです、ひとつ直ぐ懸合つてみて呉れませんか、屋賃なんか少し張り込んでもよう御ざんす、此際だから』

『さうですネ、行つて見ませう、婆さんが聞いて呉れりアいゝが』

『成るたけ聞くやうにして下さい、駄目だつたらまた他を探さなくちアならない、忙しい所を濟まないが直ぐひとつ當つてみて下さい』

彼は先づ立ち上つた。そして若者がぶら〳〵とそちらへ出懸けて行くのと店さきで別れて煎餅屋に居る友人の方へ急いだ。

それは困つたな、隨分亂暴な婆さんだな、と言ふきり他に友人にも策の出やうは無かつた。細君は細君で、ではいゝ宿の見附かるまで私共の方に來て被居つしやい、それがいゝわ、と言つて勸めて呉れるけれど、常から病身の彼女や同じく餘り壯健でない二人の子供、何も書けないと言つて苦しんでゐる友人、それにこの狹い部屋、その中へ無理に入り込む氣には如何してもなれなかつた。そして二三日中に歸つて來るといふ妻子の事が彼の頭から去らなかつた。どうしても今日中に何處でもいゝから移らなくてはならぬと思ひ詰められた。

其處へ富士屋の新ちやんが例の通りのつそりと入つて來た。はち切れさうな大きな半づぼんの膝をきちんと合せて坐つた。二十八歲だといふけれど、四五にしか見えぬ。

『如何？』

『どうでした、またお世話様ですネ』

彼も友人も言葉を揃へて訊ねた。

『まア、まア』

大きな赭ら顔を他愛なくにこ〳〵させながら、

『まア、そんなに急いたつて駄目ですよ、兎に角話は有望です』

『エ、出來ましたか』

『まだ確りとは定りませんがネ、まア定つたも同じですよ、婆さんは却つて大喜びで……、婆さんなか〳〵これが好きなんですからネ』

盃を口に運ぶ眞似をして笑ひながら、唯だ自分一個の意見にもなり兼ぬるので、先づ相談をするため、いまその弟の方へ出て行つた。多分弟も承知するだらうと、告げて、

『それに私の方から口を利いたとなると、少し位るは我慢をしても承知せねばならぬ事情もあるのです』と言ひ足した。

『難有い、奥さん！』

彼は早や既に聲を逸ませた。

『前祝ひに一杯奢つて呉れませんか、今朝からのくさ〳〵で頭が少し變になつた、何しろ突然でしたからねエ』

『エ、〳〵、奢りますとも……、でもほんとに結構でしたネ、直ぐ見つかつて』

細君は子供を抱いて立ち上りながら、

『ソラ、彼處でせう、門口に錢葵やら松葉菊やら澤山咲いてゐる、……まア吉田さんは狡いのネ、あんない、所を占領しちやつて』

『なアに、餘り好くもありませんよ、それに私も考へましたが、机を置くに恰好な所が無いやうです』

新ちやんは此間の部屋探しの時に彼と彼の友人との間に先づ問題になるのは机の置場所であつたことを記憶してゐた。

『なアに机なんか何處だつていゝサ、雨露が凌げたらそれで澤山だ、贅澤は言はないや、ねエ谷口君』

『左樣とも、此際だからネ、ハゝゝ』

此際だから、とは此頃中彼等の間に流行つてゐる言葉であつた。三人は聲を合せて笑つた。笑ひながら彼はいつの間にか自分の眼の潤んでゐるのに氣がついた。そして人知れず手早くそれを拭き取つた。

『さア召し上れ、その代り何もお肴はありませんよ』

『結構です、頂戴します』

彼は眞先きに大きな盃を取つた。酒は彼の希望で冷たいまゝのものであつた。

道路一つを距てた浪の音が障子の向うで斷えず碎けてゐる。

『ねエ谷口君、僕は今度つく〴〵さう思つた、どんなのでもいゝから自分の籠るだけの巢は是非造つて置き度いもんだねエ』

『うん、夙うから僕は思つてゐるのだが……』

友人は痩せた唇元を引き締めて微笑しながら、

『それでないと、どうも僕はおちついて筆が執れない氣がするよ、眞實今のところ僕等の生活は今日明日を知らない樣な危險なものなんだからねエ、せめて自分の居る部屋だけなり固定してゐると少しは安心して仕事が出來るのだが……、それでも可笑しいね、君までそんな事を考へ始めたのか』

彼も苦笑せざるを得なかつた。

『……、此村に移つて來てからをり〳〵獨りで考へてゐたがね、今日といふ今日、心底からさう思つた、……、いつまで「漂泊を愛し」てもゐられまいし、それに斯ういつも心がおちつかなくちやア、まご〳〵してゐるうちに自分の一生も極めて怪しいものになりさうだ、此儘ぢァ何ぼ何でも餘りみぢめだからねエ』

『二百圓お出しなさい、私が明日にも建て、上げます』

新ちやんはもう眞赤になつた顏に兩眼を細くしてゐた。

『二百圓で建ちますかね』

友は眞面目であつた。

『建ちますとも、二百圓は入りませんよ、玄關が二疊、四疊半、六疊、……』

新ちやんから夙つくにきいてゐた二百圓足らずで出來た一二の例證が新しくまた彼の心に思ひ起されてゐた。そして子供を連れて散歩する時など、海岸の松林や高臺あたりにそれとなくさうした眼を向けてゐたことも思ひ浮べられた。二百圓、二百圓、と心の中で繰返してゐると、何とも云へぬ心細さが萌して來た。

一足先きに歸つた若者のあとから彼が再び富士屋に赴いたのはもう正午近かつた。貸す貸さぬの婆さんの返事が其處に齎らされてゐる筈である。

居ると思つた若者はゐずに、彼の聲を聞いて主婦が澁々奥から出て來た。

『どうもネ、話が面白くないんですよ、婆さんはネ、貸し度さが一杯なんです、そりァ何處にだつて行つてゐられる暢氣な一人者ですからネ、お貸しすれば好きな酒もそれだけ餘計に飮めるといふわけ

で……、ですけど弟つての、方ぢァまたそれを心配してるでサ、以前も酒ぢァ隨分失策の多かつた婆さんでしてネ、今度またそんな事があつちァ世間に對しても僅かな金にァ代へられないつて腹があるでサ、それに夏になると東京から親類の子供とかが弟の方に來る事になつてるさうで、それを婆さんの方に廻したい氣もあるのだとさう言つて、婆さんは大分不平な樣子でしたつけ』

早呑込の新ちやんの言葉を信じ切つてゐた彼はもうそれに返事をする勇氣もなかつた。主婦も手持無沙汰に煙草を吸つてゐたが、

『どうせ末は弟の厄介にならなきァならないと解つてるもんだから婆さんも此頃ぢァ弟に頭が上らないんですよ、昔ならなか〳〵如何して！』

彼は矢張り立つたまゝ、默つてゐた。落膽すると同時に、また何とか他に法を講ぜねばならなかつた。

『如何ですか、一時おいやでもその妖怪屋敷で我慢なすつちァ、またそのうちには新二も何とか心配するでせうから……』

『エゝ、僕も今それを考へてゐた所なんです』

投げるやうに言ひ捨てゝ、彼は其處にどしんと腰を下した。

『とう〳〵妖怪の仲間入りかなァ！』

『ハゝゝゝ、仕方ありませんよ、また其中にァ何とかなるでせうから一時さつぱりとお諦めなさい、ほんとに此處いらは仕樣のない所なんですからねエ』

その妖怪屋敷に行くには又一つ不愉快な思ひが先き立つた。此前友人が其處を借りようとした時、仲に立つたのが、彼の宿の隣の者で、近所で有名な意地惡の噂であつた。そして話が壞れてから彼は後の祟りの恐しさに友人の細君をして若干の金を包ませた。其時その噂は、東京あたりは如何だか知らないが、此土地ぢァ顏のつぶされ賃は受取らない事になつてるますよといふ意味のことを惡たれながら仰々しくその金包みを突き返したのであつた。今度また其家に話を持ち込むとなると、順序からも云つても、あとの便利を思ふ點から見ても如何しても再びこの噂の手を經ねばならぬと彼は思つた。彼女とその妖怪屋敷の主婦とは極めて親しい間柄であることを彼は知つてゐたのである。

思ひ切りわるく腰を上げかねてゐると、折よく富士屋の前をその噂が通り懸つた。機會を逸すまいと彼は直ぐ立ち上つた。そしてわざと事もなげに、今一度その家へ一緒に行つて呉れと賴んだ。無論、今度こそは斷じて小母さんの顏をつぶさないと附け加へた。

得意氣に笑つた彼女は、彼の顏や足元をじろ〳〵見てゐたが、突然

『偉ェ役者になると、はァ、忙しいこつぢァ！』

と富士屋の主婦を振り返りながら大きな聲で笑つた。主婦も解はわからぬながらそれに調子を合せ

た。

彼等に妖怪屋敷と呼ばれてゐる家は街道から引き込んだ小高い所で、周圍に松の老木を圍らした、大きな一廓であつた。もと附近第一の豪家で、奉行や代官の定宿であつたといふほどあつて、廣い庭の前には半ば壞れた長屋門があり、土地に見られぬ大きな玄關も附いてゐた。漁師の噂のあとからその門を潜つた彼はその廣々した庭を眺めながら先づ子供の遊び場のことを思つた。

森閑とした庭の隅の方で主婦は一人で麥を扱いでゐた。彼等の這入つて來るのを見て異樣に顏を輝してゐたが、漁師の噂が如何にも愁傷げに間借りの事を話し出すと、その言葉の終るのを待たずに半ばでそれを引き取つた。

『折角ですけれどネ、もう自宅などお客樣にお貸し申すなんてことア思ひも寄らないんですよ、この通り壞れ方題にしてあるもんですからネ、疊も床もぼろ〳〵でとても足踏みも出來アしませんよ、折角ですけれどネ、何處か他をお探しなすつて下さいましな』

小柄な、見るからに神經質らしい五十歲あまりの婆さんのこの突慳貪な言葉を聞いて彼は强かに驚いたが、直ぐこれは先回の破約を憤つてゐるのだナ、と思ひ當つて苦笑した。

『此間のお客の時はネ、どういふ理由だつたか、お前さんにもえゝえゝ濟まねえことになりましたつたが、この旦那はネ、どうでも此方さんに御厄介になり度えつて……』

『いゝえネ、折角だけれどネ、何處か他をお探しなすつて下さいましな』

流石雄辯の女房も唯だ茫然とその麥扱きの手許を眺めてゐるよりほか無かつた。

彼も苦笑ばかりして居られなかつた。そして此の前の時富士屋の新ちやんから聞いた、今では僅かな村稅すら納め兼ねて居ること、獨り息子が怠惰者で二人の子供をお袋になすりつけておいて橫濱だとか東京だとかに稼ぎに行つてゐるといふのは名ばかりで殆んど音信すら無いこと、その女房は女房で實家に逃げ歸つて居ることなど次第に思ひ出されて來た。半ば白くなつた髮に頰かむりをして、何處か華奢に見ゆる身體に麥の毬の黃いろく降り懸つてゐるのを見詰めてゐると、彼は永い間忘るゝともなく忘れてゐた遠い故鄕の母の事まで心に浮んで來た。そして、風の渡つてゐる四邊の老松も、靑い草の伸びてゐる古寺の樣な屋根も、無花果の茂つてゐる井戶端も、物音ひとつせぬ座敷の奧も、皆すべて自分にとつて親しいもののやうに眺められて來た。

如何かしてこの老婆の心を宥めてこの家に住むやうにしたいものだと次第に落ち着いて來た彼の心にはもう部屋の暗いことも壁の破れてゐることも大した問題ではなくなつた。そして今度は自分自身口を入れて此前の時の不始末を詫びたり、今度の自分の事情を述べたりして、折入つて賴み込んだ。老婆も漸く麥扱きの手を止めて頰冠まで取つたが、それでも言ひ出したことをば思ひ返さなかつた。そして、其處の木の蔭に蹲踞みながら、

『それに私もネ、此頃ではから意氣地がなくなつて、別に何處が如何といふではありませんがネ、寢たり起きたりで、座敷のめぐりでも掃除ひとつするではありませんし、間があつたら何處へでもごろり〳〵してるもんですから座敷の襖を締め切つておいたり、他さまに氣兼ねをしたりすることはもう到底出來なくなりましたよ、此間の時もネ、貴下の方からあゝして斷られてまアよかつたと思つた位るでしたよ』

半ばは愚痴のやうに初めとはずつと變つた口調で斯う付け加へた。

彼もその調子に乘じて更に一二度押し返して賴んでみたが、どうでも諦めねばならなかつた。

兩人はまた長屋門を潜つて通りへ出た。女房もあれほどまでとは思つてるなかつたらしく、呆れたやうに悄氣てるた。そして、默つて先に立つてゆく彼の後から、

『あの人もネ、あゝいふ變人で無えといゝ人だけれど……、ねエ旦那、忠兵衞んとこの婆さまは今の主婦さんの姉さまだ、婆さまからも一度話さしてみたら如何だネ』

彼は厚く女房に禮を言ひながら途中で別れて忠兵衞の家に行つた。

其處も廣庭一杯に麥を散らして多勢して賑かに扱いでるた。彼の賴みを聞くと世話好きの婆さんは歡んで出かけて行つたが、二十分も經つとぷり〳〵怒りながら歸つて來た。

『あゝいふ馬鹿も無えもんだ、だからもうこそ口を利くめエ〳〵と思ふけんど……、如何だろ、ひとが親切に言ふてやれば泣きわめエて、零落したをい、事にして皆で寄つてたかつて馬鹿にするつてこきやがる……』

忠兵衞の家から富士屋へ行くには彼の舊の宿の庭を通るのが近道であつた。けれど彼はどうしてもいま其處を通り度くなかつたので、廻り道をして街道へ出た。永く照り續いてるるので砂地の道は不氣味なほどぼく〳〵と乾いてるた。兩側に穗を垂れてるた麥も大方刈られて、それらの畑も眩しく乾き輝いてるる。

輕い眩暈の氣味で、ふら〳〵その街道へ出ると彼は靜かな一群の行列に出會つた。それは橫須賀から病人を舁いで來た附近の漁師や百姓であつた。彼はつとして、唯だ默禮してやり過ごしたのであつたが、狹苦しい駕籠の中に眼を瞑つてるる病人をそれとなく注目すると話に聞いてるた通りの大きな男で、氣味惡く蒼膨れに膨れて生きた樣にもなくぐつたりと背を曲げて凭れてるた。

それから一二時間を經て彼は富士屋の新ちやんと共に其處から二十町も離れた、同じ街道沿ひの小さな空家の前に立つてるた。街道の片側は狹い西瓜畑で、畑の畔には曲り蜒つた小松がばら〳〵に立つて、それからは廣い砂濱となつてるた。松原の中には煮干小屋らしいものとその煙突から出る烟が

見え、濱には一杯に鰯の煮干が乾してあつた。蒸す様な腥さが、生溫かな濱の風につれて彼等を襲うて來た。

もと鹽煎餅などを賣つてゐたとかで、店の様になつた所が道路に向いて三疊、その奥が六疊、それと鍵なりになつた部屋が四疊半で、三疊は明るいが、その奥には窓一つ無い。四疊半の方には後から切り開いた様な、變挺な小窓がついてゐたが、その向うは直ぐ崖になつて、木や草が茂つてゐて薄暗い。

『先づ此處に机を据ゑるのですネ』

『左様だネ』

と答へながら、彼は眼前に近づいてゐる梅雨の頃を頭に描いてゐた。

『此處が勝手か、生意氣に廣いや』

積り積つた塵埃に下駄のさきを爪立てながら新ちやんは先に立つて一渡り家の内を見終つて、また道路に出たが、疲れた様に苦笑しながら彼を顧みた。

『如何します、此處にしておきますか』

既にさう諦めてゐたので彼はたゞ默つて點頭いた。

その家を預つてゐるといふ、むつつりした爺さんの家はそこから六七十間離れてゐた。其處で新ちやんは家を借りたいことを言ひ込んで、そして明日正午頃移つて來ること、それまでに掃除をして貰ふこと等を取りきめた。

『サテ、月お幾らで貸してお呉んなさるでせう』

新ちやんは訊ねた。

『お前さんの口入れぢア、お前さんの胸一つで幾らにでもきめておいてお呉んなせえ』

眞黒な顏に三角の目のみ光つてゐる爺さんはさう繰返して答へるのみで終に幾らとも言はなかつた。爺さんとも別れて一二丁歩き出してから急に彼は立ち留つた。

『ア、新ちやん、井戸は何處だつたらう』

新ちやんはたうとう見つかつたといふ風に苦笑しながら、

『それがどうも少し不便なんですよ、今の爺さんの家のを一緒に使ふんです』

『すると、アノ道路傍の？』

彼はツイ道路に沿うて青木一本、屋根すら無い野晒しの井戸を思ひ出して思はず眉を動かした。

けれど、もうその時の彼には苦情を言ひ出す元氣も失くなつてゐたので、たゞさう言つてみたばかりで、次第に暗くなつてゆく心に氣づきながらそのまゝ歩み續けた。

今朝出たまゝでそれから一度も顏出しをせぬ舊の宿に、明日の朝引越す旨を傳へて貰ふ事を賴んで

おいて、煎餅屋の友人の前で彼は新ちやんと別れた。
もう彼是夕暮に近かつた。

今朝彼等が酒を飲んで居るうちから何だか急に氣分が悪くなつたと云つて床についてゐた細君の枕許に友人は子供を抱いて坐つてゐた。
いつもの元氣もなくしよんぼりと這入つて行く彼を見ると、
『如何だ、見つかつたか』
と低い聲で訊ねて、
『さうか、とに角、それアよかつた。斯んな風で一緒に探しにも行かずに濟まなかつた』
矢張り低聲で詫びを言ひながら、寢てゐる人に眼を落した。
『どうも濟みません！』
睡つてゐると思つた細君が、夜着から少し顏を出した。
『うゝん、……どうです、少しは快くなりましたか』
『えゝ、もう起きようと思つてた所でした』
『まア、そのまゝにしてらつしやい、そして、今夜御厄介になりますよ』

『えゝ〳〵よう御座んすとも……、でもまア好う御座んしたねエ、そんな家でもあつて。幾間ですつて……、そして井戸は』
次第に聲もはつきりして來た。
『さア、それがねエ、困るんですよ……』
と詳しく話して、
『仕方がないから水だけは私が汲んでやりませう、人通りの少い時を選んでネ、……とても女仕事ぢア出來さうにありません』
『それア吉田さん駄目だ』
細君は半身を起した。
『貴郎がお汲みになるにしても、赤ちやんのお襁褓をどうなさいます。それアね、炊事用の水なんて幾らも入りませんけれど、お襁褓となるとそれこそ大變ですよ！』
彼も思はず友人と顏を見合せた。
それからよく考へて見れば、洗つたものを乾す場所もなかつた樣な事を思ひ附いた。
彼はたゞ苦笑ひをして二人の顏を眺むるよりほか、答ふる力も無かつた。
『如何にかなるだらう、……如何にかなるもんだよ』

友人も笑ひながら慰めるやうに言つて立ち上つた。そして、

『まア、此方に來給へ、茶を入れよう』

と火鉢の方に座布團を直した。

『それもさうネ、いよ〳〵さうなつてしまへば、またいろ〳〵方法のあるものだから……』

細君も起きて來た。

が、取り返しのつかぬ失策を仕出かした様な氣持は疲れ切つた彼を次第に不安に導いた。

取り敢へず彼は自身出懸けて酒を提げて來た。そして成るたけ病氣の人を動かすまいとして、直ぐまた近所のよろづ屋に行つた。海苔やとろゝ昆布など買つてゐると、夙うから馴染の其店の婆さんは、彼の借りてゐる家に病人の歸つて來たことを既に知つてゐて、嘸ぞ迷惑だらうと彼に言つた。

『實はネ、今朝彼處を追ひ出されて、いま宿無しで困つてる所なんです』

と彼は笑ひながら愚痴を言つた。

『それはお困りですネ、そして、只今はどちらに？』

簡單ながら今朝來の始末を話してゐる彼の聲は自然老婆の同情を喚んだ。

『ねえ』

彼女は店に坐りながら奥の間に聲をかけた。

『前の家は如何だらう、蜜柑屋の座敷は？』

『借すだらうよ』

先刻からの話を聞いてゐたと見えて、直ぐさう答へながら婆さんの息子が出て來て立ちながら彼に挨拶した。四十歳前後の背の高い男である。

『所がネ、二間欲しいんですよ、僕の商賣が讀み書きをする商賣なんだから女房や子供なんかと別になつて、靜かな部屋が一つ是非欲しいんです。もつとも僕の居る方は三疊でも四疊でもいゝんですがネ』

『恰度いゝや、物置の二階が空いてるだらう』

主人は事もなげに母に向つて言つた。

彼の胸はときめいた。

『空いてるにア空いてるだらうが、暑からうよ、是から』

『えゝもう暑い位ゐは我慢します、如何でせう、貸して呉れませうか』

『貸しませうよ、此間まで物置の方に齒醫者が入つてましたがネ、……奥の座敷には永いこと誰も入らなかつた様ですから汚れてませう』

『僕自身直接に行つてみてい、でせうか』

『よう御座んせうとも』

彼は買物をば其處に置いて、小走りにその店から眞向うに入り込んだ蜜柑屋といふのに入つて行つた。道路から折れ込んだ徑は双方から蜜柑の木に掩はれて、もう薄暗くなつてゐた。眞直ぐに立ち寄つて門口から覗き込むと土間の奥の竈らしい所に火は燃えてゐたが、其處には誰も居なかつた。見廻すと庭の隅にある木蔭の井戸端に二人の女が立つて此方を見てゐた。

『濟みませんネ、御病氣のところへ斯う朝も晩も德利を持込んで』

彼は漸く幾らか靜まつた氣分で徐ろに杯を取り上げながら、寢衣のまゝで唯だ一人粥を喰べてゐる友人の細君を顧みた。

釣洋燈が二つの部屋の間に點つて、向うの間には二人の子供が、小さい頭を並べて寢てゐる。

『い、え、飛んでもない、病氣つても私のは別なんですから……、それにもう何ともないんですよ』

眞實、晝間から比べるとさうらしい明るい顏になつてゐた。

友人もほつかりした樣な樣子でちび〳〵飲んで居る。

『ほんとに大變でしたわねエ、お獨りで……谷口もそれを非常に氣にしてましたけれど、運惡く今日に限つて私がひどかつたもんですから』

『で、如何なんだつて、大概出來さうなのかい、その蜜柑屋つてのは』

『出來るだらうと思ふんだがネ、兎に角今日は主人が留守なんだ、歸つて來たら相談をして富士屋まで返事するつて事になつてるんだ、都合のい、事に其家の主婦が僕を知つてたんだよ』

『君を？』

『うん、行つて話をしかけると、向うからそれでは貴郎が吉田先生で被居つしやいますかつて譯なんだよ、聞いてるうちに思ひ出したがそこの娘つてのが何でも東京あたりで看護婦か何かしてたらしいんだ、そしてそれが橫濱の、何だか大變お金のとれるマツサージのお內儀さんになつてるんだ相だ、そしてつまりそれが和歌愛好者の一人だつてわけなんだらう……、昨年の丁度今頃だつたらう、一日何處かへ遊びに行つて歸つてみると橫文字入りの女の名刺が置いてあるんだ、先生の樣な方が自分の鄕里においで下さつたのは非常な名譽だといふ樣な事が書きそへてネ、それがその娘なんだよ、實家に歸つたついでに訪ねて來たんだらう』

『へえ、面白い事があるんですネ、それなら吉田さんもう大丈夫だ、屹度出來る、御安心なさいまし な』

『餘り貧弱な吉田先生だつたんで、ハイカラのお袋さん、大いに悲哀を感じたでせうがネ、兎に角其

處が出來ると大分仕合せの樣です、井戸も庭に在りますし、物置の二階に立て籠るなんかも風流ぢァありませんか』

よく鬱ぎよくはしやぐ友人の細君は、その夜非常に元氣がよかつた。昨年あたり、一時危ない位の肺が病るかつたのであつたが、次第に快くなつて今では殆んどラッセルも無くなつたと言つて居る。けれど、今度突然職業を止して此方へ移つて來たのは、友人自身言つてる樣に靜かに筆が執り度くなつたからといふ外に、矢張り細君や子供の健康の事が氣遣はれたからに相違なかつた。土地が極端にその患者を嫌つてる事を彼の注意で知つてゐるので、宿にも誰にもそれらしい素振を見せまいと力めてはゐたが、急の移轉や何かで疲勞の結果か、土地の變つたゝめか、どうもこの數日容態がよくなかつた。そして、土地の醫者に診せるのを嫌つて、前から服み續けの持藥風のものをひそかにのんでゐた。

そして、衰へた顏には絶えず濃く白粉を塗つてゐた。

『だつて、何ていやなところでせうねェ、此の村は。私はまた吉田さんたちが永い事動かずに被居つしやるから餘つ程い、所だと思つて……、谷口は谷口で、遮二無二此處で無くてはならぬ樣に言ひ張るんですもの……、それにどうでせう、ろくな部屋も無いし、いやにじろ〳〵他の顏をば見るし、此處の宿の婆さんなんかの因業と來たら……』

細い煙管を取り出しながら、

『斯んなことなら矢つ張り大島へ行けばよかつた！』

と心から後悔してゐる風に、ぢいつと眼を落してゐる。

伊豆の大島は彼等夫婦にとつて切つても切れぬ緣故の所であつた。初め彼等の識り合つたのも其處なれば結婚して直ぐ手を携へて渡つた島も其處であつた。

『そんなにいゝんですか、大島は』

『え、〳〵、それアもう此處なんかと比較にはなりませんわ、それに……』

と淋しく笑つて、

『吉田さんにい、事には非常にお酒が安いんです』

『それア何よりだ、行きませうか一緒に』

『行きませうよ、本當に。わたし、斯んな所に居る位ゐなら一人だつてい、から東京に歸るわ、ほんとうに歸るわ、身體なんか如何なつたつて構やしない』

彼女の癖で、直ぐ本氣になつて激昂して來る有樣が彼にも能く解るので、先刻からたゞ默つて杯を取つてゐる友人の顏をちらと見てわざと話を外らした。

『それとも君は二百圓の組か、恐しく考へ込んでる樣だが』

實際何か考へてゐるたらしい友人は、斯う言はれて急ににやりとしたが、

『まァその方だネ、彼方だ此方だと動き廻つてるのは眞實もう耐へられない』

『ぢァ、速くさうすればいゝぢァありませんか、わたしだつて何も動き度くは無いんですよ』

捨てるやうに言つて、

『どうしても動かなくちァならないのなら斯んな所より大島の方がいゝつてあれほどわたしが言つたんだけれど……』

『馬鹿、前後の事も考へないでさうふら〳〵出て行かれるか！』

この人にしては珍しく強い調子で叱つて置いて、彼の方に向ひながら、

『何しろ、大島は不便だからネ、いざといふ時に困るんだ』

『左樣だらうネ、何か定つた收入でもある樣にしてからでないと心細いことが多いだらう』

先刻から胸の納らなかつた細君は二人に關はず言ひ續けた。

『何處に居るにしたつてその日〳〵のこと位るには困らないやうにやつて行けさうなものだ、それが男の役目ぢァありませんか！』

二人はそれ〴〵苦笑したきり、何とも言はなかつた。友人夫婦が移る早々から金のことで苦しんでゐるのをば彼も知つてゐた。細君の不平も一つは其處から出てゐた。

暫くてん〴〵に默り込んだが、それでも酒の殘り少くなつた頃にはまた大島の話で座は賑かになつてゐた。酒の安いこと、人情の醇朴なこと、景色のいゝこと、牛乳の安いこと、人情の醇朴なこと、景色のいゝこと、または其處で出會つた種々の人のことなど夫婦は興に乘つてそれからそれへと交る〳〵熱心に語り合つた。夫等は幾度か彼等によつて語り聞かされてゐた事だが、今朝來の彼の耳にはこの土地と比べて如何にも其處が靜寂な醇朴な、といふより好く碎けた住み心地のよい所らしく思はれて來た。

そして暫く默つてゐた末、彼は眞面目になつて言ひ出した。

『ぢァ、君、本氣になつて其處に移る計畫を立てようぢァないか、どう考へても僕はいま東京に歸る氣にならんし、それかと云つて斯んな味も素氣もない所に永く居る氣もせん、今まではそんなでもなかつたが今朝からのことでつく〴〵此處がいやになつた、それアどうせ大島だつて永く居るうちにはまたいやになるに相違ないが、その時はまたその時サ、兎に角出かけることにしようぢァないか、……君等は直ぐその準備に懸れるだらう、僕は先づ此處の借金を片附けなくちァならぬが、なアに幾らも無いんだからその積りで稼げば直ぐ濟むよ、それからはまたそれからの事だ！』

夫婦も彼のこの樣子に目を見張つたが、やがて今度は何れも前より聲を細めてそれに關する具體的の相談が語り交はされた。

はては紙や鉛筆まで持ち出された。

彼は翌朝まだ薄暗いうちに眼を覺ました。

隣室に友人たちの眠つてゐるのを覺まさない様にこつそり部屋を出て、富士屋に出懸けた。

顔を洗つてゐた新ちやんは彼を見るなり、ぶつきらぼうに、

『蜜柑屋からは何とも云つて來ませんよ』

と言つた。

元來新ちやんには折角あ、して約束して來た所を棄て、彼自身無斷でまた他の新しい話を取りきめようとしてゐるのが甚だ氣に入らなかつた。彼もそれを知つてゐた。

返事が來てゐないとすればあまり結果は香ばしくないと見ねばならぬが、今一應こちらから出懸けて見ようと彼は覺悟をきめた。それには新ちやんを同伴して行く方が都合がいゝと思つて切りに賴んだけれど、何の彼のと言つて如何しても腰を立てなかつた。

止むを得ず獨りしてまた蜜柑屋の庭へ入つて行つた時、夥しい惡臭が彼の鼻を襲うた。其家の主人親子だらうと思はれるのが、庭隅の大きな二つの溜桶から下肥を汲み出してゐる所であつた。昨夕井戶端で逢つた主婦と嫁らしい女とは、束ねた麥を解いて庭一杯に乾してゐた。

案の如く話は不調であつた。今までは困るといふ人に奥の座敷をもちよい〳〵貸してゐたけれど、子供は多くなるし、私たち老人夫婦は今年あたりから物置の方へ隱居しようと思つてゐる折なので、

折角だがお斷りするといふ事であつた。

其朝の彼は妙に一種の勇氣を持つてゐた。從つて平常より餘程雄辯になつてゐたので、その斷りを聞きながら、今まで程に氣も落さず、更に押し返して一層丁寧に賴み込んだ。

主婦は終に返事に困つて主人をも其處へ呼んで來て今一度相談を始めたのであつたが、その結果漸く次の樣な條件づきで承諾を得たのであつた。兎に角一時い、宿の見附かるまでお貸しする、その間でも若し宿に止むを得ぬ樣な場合が出來たら直ぐ空けて貰ふことといふ樣な。

考へて見れば隨分慘めな條件だが、彼はその場合それをも歡ばねばならなかつた。主婦が汲んで出した番茶を一口飮むなり、數多度び禮を述べてそ、くさと彼は其處を出た。そして昨日の夕方借りる事にしておいた空家の方へ急いだ。

朝も早いし、まだ掃除には着手してゐまいと思ひ〳〵行つて見ると、二三人の人が既にその家に集つてゐた。庭の草さへ拔かれてあつた。

彼は茫然としてその前に佇んだのであつたが、急には何ともよう言ひ出せなかつた。その樣子を見い見い昨夕の爺さんは彼の前に立つた。

『もう直きにお出でなさるかね、荒方掃除は濟みやしたが』

彼は終に思ひ切つて破約を申し出た。そして何とかお詫びのしるしをしたいからと言ひながら、中

には幾らも殘つてゐない財布を取り出した。その家族らしい三人

爺さんはそれを聞くと、そのまゝぢいつと其處に蹲踞んで煙管を取り出した。

の女はみなその手を止めて此方を凝視してゐた。

永い沈默に耐へ兼ねて彼は繰返し詫を言ひながら幾らかの小さな銀貨を紙に包んで彼の前にさし出した。それに目も呉れないで尚ほ暫く煙の出る煙管を額のところに當てゝゐた爺さんは、やがて徐ろに立ち上りながら頭を振つて、

『富士屋の口入れで起つた話ぢァから、何とか富士屋から話がありやせう、』

そして女たちに同じく眼顏で仕事をやめる事を知らして、のろりと道路の方へ出た。途方に暮れた彼もそれに續いたが、いづれ後に富士屋からも人をよこさせるからと言ひ置いて眞黒な背のひよろ長い爺と別れ去る外はなかつた。

兎に角これで暫くでも自分のものとして眠るべき巢が出來たと思ふと急に疲れと安心とが感ぜられた。そして昨日の朝宿を斷られて以來の自分の狼狽へ樣を思ふと何とも云へぬ佗しい笑ひが彼の心の底から湧いて來るのであつた。東京なら斯んなにまで狼狽へもしなかつたらう、とも思はれた。今まで隨分苦しい生活をば續けて來てゐるが、今度ほど賴りない、いかにももう居る所のないやうな氣の

したことは記憶に無かつた。ひとつは年齡のせゐる、境遇のせゐもあるだらうなどと考へながら麥の刈られたあとの徑を通つてもとの宿へ入つて行つた。

流石にまだ八疊の間はそのまゝにしてあつて、病人は六疊の方に寢てゐた。彼は簡單な挨拶をしておいて、なるたけ靜かに八疊の間で荷作りを始めた。宿の婆さんの言つた通り、當座必要のものだけ持つて行つて、あとはまた細君でも歸つて來てから運ぶやうにしようと心がけて始めたのだが、机のめぐり、夜具、行李、食器、炊事道具など、それでもなか〳〵男手一つには大變な仕事であつた。次の間には近所の人や見知らぬ人や、幾人も見舞の人がやつて來てゐた。聞くともなく聞いてゐると横濱から病人が歸つて來ると急に產婦が逆上せて容態がわるくなつたのださうだ。そんな事にならねばいゝがと思つてゐたんだと彼も心に思ひながら、一枚々々皿や鉢を新聞紙に包んでゐた。

三時間もかゝつて漸く如何にか一纏めに纏めて緣側に持ち出しながら、ほつかりして煙草を吸つてゐると、婆さんが何を思つたか、大きな丸盆に銚子と小魚の煮たのとを載せて持つて來た。この一二日にこの人もげつそりとやつれて、自身にも言つてる通り耳まで一層遠くなつてゐた。一言二言、病人の事から產婦のことなど話して、それとない氣休めを言つてやると、他愛なく涙を零してゐた。そして、急に斯ういふ移轉などをさせて眞實濟まない、悴からも叱られましたといふことを繰返し〳〵言つてゐた。

富士屋から荷車を借りて、近所の女房たち二人に頼んで荷物を蜜柑屋へ運び終つた時はもう夕方であつた。疲勞がまた際だつて感ぜられ、もうその荷造りを解く勇氣もなく繩で括つたまゝ、座敷へ投り込んで置いて、今夜もう一晩泊めて貰ふつもりで煎餅屋へ行つた。

子供の聲を揃へて泣いてゐるのが、遠くから聞えてゐた。障子を開けてみると、赤ん坊の方は座敷の眞中に轉がされたまゝでその姉の三歳になるのは裏の緣側の七輪（その緣側で自炊してゐるのだ）の側で、火のつくやうに泣いてゐる。友人もその細君も其處らに見えない。赤ん坊の方を抱き上げながら姉の側に行つてあやしてゐると、平常肌抜きすらせぬ友人が襯衣一つで水を汲んで來た。

『大變だネ、細君は如何した？』

『醫者に行つた』

『醫者へ！』

と言ふなりあれほど醫者を嫌つてゐたのを知つてゐるので、彼は驚いて友人の顏を見た。そして自づと聲も低くなつた。

『餘つ程惡いのか』

『うん、まアよくないんだネ』

と言ひながら此方も聲を低めて、

『この頃惡阻だつたんだがネ……』

『エ、これか？』

思はず自分の腹に手を當てた。その事も彼には意外であつたのだ。それを見て友人は苦笑しながら、

『うん、さうなんだ……、先刻二度ほど續けて嘔吐した時に二度とも五勺位づつ血が混つたんだ相だ。それで奴さん驚いて出懸けて行つたんだが……』

何時の間にか泣き止んだ子供を抱いてぼんやり立つたまゝ、友人の顏を見詰めて彼は何ともよう言はなかつた。咯血、と聞くともう取り返しのつかぬ事の樣に此場合思はれたのである。

『もつともそれが此處の……』

と胸を輕く叩いて、

『せゐだとばかりは思へないんだ、何しろ嘔吐すのも烈しいしいから胃からとか、また咽喉あたりの關係かも知れないんだ』

言つておいて思ひ出したやうにざぶ〳〵と洗ひ物を始めたが、その側にくつ着いて姉の方は一層烈しく泣き出した。赤ん坊を抱いたまゝ、彼は姉をも無理に引張つてぶら〳〵濱の方へ歩いて行つた。流石に照り續いた梅雨前の天も幾らか雨氣づいて、海はとろりと澱んで居る。引き汐と見えて沖の方にはいつもの二つの岩が表れて、そこにだけ微かに白い波が立つて居る。沖合に突き出た岬の端で

は、藥を採るのだといふ海藻を燒く煙が、低く〳〵海面へ流れて遠くまで靡いて居る。

抱かれた子供はすぐ眠つた。砂の上に坐つて自分の膝許に引き寄せて途中で買つて來た菓子を喰べさせてゐるうちに姉の方もうと〳〵としだした。二人の子供の重みを手と足に感じながら、彼は今にも何か起つて來さうな不安と、疲れた身體から浸み出て來る哀愁とに、ぢいつと眼を瞑つて耐へてゐた。

連れ歸つた子供二人を座敷に寢せて置いてまだ細君の歸つて來ぬうちに彼は友人に一寸言葉をかけておいて自分の新しい宿に歸つた。そして座敷にある荷造りの中から夜具と洋燈とその他二三のものだけ引き拔いて物置の二階へ上つて行つた。なるたけ靜かな所へ其夜眠りたかつたからである。

上つて先づ彼は驚いた。庭から見上げた所では物置とはいへ、いかにも普通の二階らしく見えたのであつたが、來て見れば二階とは名ばかりで、全くの屋根裏である。疊は敷かれてあるが、彼のやうな背の低い者でも立つては步かれぬ位ゐの低さに、棟木などが露出して、隅から隅に種々な道具が積み重ねてある。

泣き出したいやうな氣持を耐へて彼は先づ洋燈をつけた。そして手近の窓の障子をあけた。窓の直ぐ側から鬱蒼たる蜜柑の木立が續いて居る。可なり廣いその蜜柑畑の外れには松の並木が聳えて、そこちらから浪の音が響いて來るのを聞いた。ぢいつと窓に凭れて居ると頭は鉛の樣に重くなつて支へ難く肱の上に落ちて行く。

彼はやがて立ち上つて更に机を運んで來た。そして洋燈をもその上に載せて、いま煎餅屋の歸りに買つて來た鷄卵と一本の麥酒とで、變つた夕飯を濟ませて、直ぐ筆を取つて遠國の實家に在る妻へ宛て、手紙を書き出した。二三日うちに歸る筈であつた彼女から如何もまた身體の具合が變つて來たやうなので今暫く遊んで行き度いが差支へなからうかといふ手紙を、先刻彼はもとの宿で受取つて來たのであつた。

昨日からの出來事を認めて、斯ういふ際であるから少し位ゐの我慢をしても早く歸つて來て貰ひ度いとなるたけ優しく書きながら、彼は近來に覺えのないほど彼女戀しさの情に燃えた。そして、終には書きをへたその手紙の上へ熱つてゐる自分の顏をしつかりと押しあてたりした。

翌日、荷物を大よそに片附けて、是非いま必要で忘れて來た二三のものを取るためにもとの宿へ出かけた。そして、道路を折れてその庭へ近づくと直ぐはつと思つて彼は立ち止つた。

烈しい、取り亂した聲で病人を呼び生けてゐるのを聞いた。二三の人が、その戸口から飛ぶやうにして這入るのを見た。ぼんやりして立つてゐる彼の側を突き拔けて馳けて行く人もあつた。

餘程そのまゝ引き返さうかとも思つたが、われともなく彼もそわ〳〵とその家へ入つて行つた。

今はもう醫者も隅の方へ引き込んでゐた。そして病人の上へは幾人となく種々の人がのし懸つて泣くやら喚くやら、または紫だつた脣へ水を塗つたりしてゐる所であつた。

『いまわれに死なれて俺どもは如何するだ！』

と叫ぶ聲も聞えた。ひとに助けられて死人の胸にしがみついてゐる產婦も見えた。

彼もそゞろに嚴しい氣持になつて、その一群の背後から默つて頭を下げた。そして見るともなく其處の人たちの背を見てゐると、いづれも仕事半ばで飛んで來たものと見えて、襤褸仕立の着物の上にはみな黃いろい麥の毬が一杯に着いてゐた。

若き日

朝は一層目立つてきたない古びた遊廓のはづれに停車場がある。垢や脂肪や夜露やが重々しく垂れ下つてゐるその黑暖簾の一つをくゞり出た彼は、殆んど豫定してゐたかの如くその停車場へ急いだ。連日の、しかも昨夜の泥醉からまだ覺めきらないで、足も胴もふら〳〵して、唯だ頭ばかりが重かつた。頭ばかりの動物が蠢いて行くやうな氣持であつた。

其處の大時計はちやうど午前五時をさしてゐた。明け早い頃なのでもう構內は全く朝になつてゐたが、まだ電燈は薄く殘つてゐた。打水の鮮かな上を往來する人も疎らで、靜かであつた。彼はいきなり其處の小さな賣店の前に行つた。そして今漸く折つて並べたばかりの匂ひの高い新聞紙を二三種類買ひとつた。人氣の少い二等待合室に入つて、四邊を見廻したが、無論誰も知つた人はゐなかつた。で、やゝ安心して椅子のずつと隅の方に身を置いた。そして惶しく新聞を繰りひろげた。最も信用のあるものから次へ〳〵と、いらだつ心を押し靜めつゝ、三面記事に眼を走らした。初めは大きな活字の見出しにのみ氣を注け、はては隅から隅の小さな活字で埋められた雜報にまで悉く眼を通した。一

度で慊らず、二度も三度も讀みかへした。そして愈々心あての記事に行き當らないのを確めると、彼は急に安心したやうに、がつかりと椅子の上に身を投げた。

とにかく今日はこれで助かつた。と思ふと急にゆるみをおぼえた双方の瞼から眼脂のやうな涙が浸み出た。思ひ切つて踏み延した手足も急に自分のもの、やうに思はれて、そしてその節々の離れ〴〵になつてゆくやうなのを感じた。永い間新聞で顔を掩つたまゝ、瞑ぢてゐた眼を開くと、すぐ上は開け放たれた大きな窓で、今日もよく晴れるらしい朝空が水々しい光線を宿して涯もなくうち仰がれた。徐かに目を移すと、向ふ側の窓には房々と咲き盛つた桐の花の薄むらさきがさし出てゐた。

けれど、その安心も永くは續かなかつた。ぎいつと見入つてゐる朝空の靜かな底に、例の蒼白い女の顏がおのづから描き出されて、また惶しく眼はとぢられた。

次第に變りゆく身體の樣子を遂に家族から發見せられて、あらゆる憤怒と罵詈と絶望とに包まれながら、彼女が或る親戚に預けられたのは數ヶ月以前であつた。それ以來、兩人の間には手紙の往復すら絶對に不可能であつたのである。それが突然、今より四日前、彼は自分の下宿の玄關に平常とは打つて變つた樣子の彼女の姿を見出したのであつた。彼の部屋に通るや否や、提げて來た藥壜の包をそこに投り出すと共に泣き倒れて永い間、顏を上げ得なかつた。無論話も何も出來なかつた。思ふさま

泣いて、やがて起き直つた彼女の顏を、彼は恐しいものを見る心地で眺めた。眼だけは落ち窪んで、いつも櫻色を失はぬ双頰には殆んど血の氣が無かつた。一語々々、きれ〴〵にいふ言葉の尻は悉く痙攣的にふるへてゐた。最初はどうにかして、……しまはうと二度も二階から落ちたりした。一度は階子段の下の板さへ割れ破けたほど烈しく落ちたけれど、甲斐がなかつた、それがこのごろになつては、何ものにも代へがたいほど可哀相でならなくなつた。おなかの中で靜かに動くのを感ずるやうになつてから、益々可愛くて耐らない。このまゝ生み落せば必ず目鼻も開かぬうちに他に遠ざけられて、恐らくは一生涯逢ふことも出來ぬやうにされるは知れてゐる、既にそれ〴〵その準備も整つてゐるらしい。それと同時に自身の運命もまた大抵推察することが出來る。それこれのこと、みな自分には想像するにも耐へ難い。今日醫者からの歸りに僅かの隙を得て逃げて來た。いま直ぐ自分と一緒にどこにか姿をかくしてくれ。よしまた見付かるとしても、いまは自分にも相當の決心がついてゐる、何しろ自分一人では心細くて耐らない、たとへどうなるにしても一緒にゐて呉れ、と言つて四邊を見廻すやうにしながら、今にも人が追つて來るに相違ない。兎角の事は言つてゐられないから、直ぐ自分のいふことに同意して呉れ、それとも厭か、と彼を見詰めた其時の瞳の光を、まざ〳〵と彼はいま思ひ浮べてゐるのであつた。

彼は寧ろ呆氣にとられた。そして、よしあしの返事をする前に少しでも彼女の心を落ち着かせよう

と思つた。曾て見たこともないほど取り亂した姿に全く別人のやうにも驚きながら、彼は唯だ狼狽するのみであつた。おど〳〵しながら二言三言云ひなだめようと始めた彼をぢいつと鋭く見守つてゐた彼女は、やがてまた其處に突きふして泣き出した。永い間嚙みしむるやうに泣いてゐる彼女を途方に暮れて眺めてゐる間に彼は漸くわれに返つたやうに自分の心のうちに愛憐の情の萌して來るのを感じた。そして、それと同時にその後から〳〵と湧いて來る憎惡の念をも、どうしても拂ひ除けることが出來なかつた。斯うした身體になつて以來、急に以前の從順な處女のやうな態度を棄てゝしまつた女を、彼は夙うから意外にも感じ、醜くも面憎くも思つてゐたのであるが、斯うして取り亂した姿を見ると一層その感が强くなつた。

然し、女の現在を想ひやると何を措いても氣の毒さ憐れさが先き立たざるを得なかつた。とり分けて複雜つた彼女の家庭の事情を知つてゐるだけ——それに同情を寄せたのが兩人の斯うなる初めであつた、と彼は襲はれたやうに思ひ出して長椅子の上で寢返りした——一層憐れに思はれた。手紙の往復も叶はぬやうになつてから實際彼は夜も晝も、歩く時も飯を喰う時も、常にさうした女の事を思ひやつてゐたのであつた。そして、意外にも今日思ひがけぬその姿を眼の前に見て、驚き訝りながらも直ぐにも抱き寄せたいやうに思ひ昂つてゐる矢先に、全然それを突き除けるやうにして女は彼に逃走を迫つたのであつた。

逃げてもわるくはない。曾つては自分自身それを思つたことさへあつたのだが、果してよく何處まで隱れ得らるゝものであらう。その結果はます〳〵恥を明るみに出して、自分の方はとにかく、あなたの家の人たちの憤怒を招くのみではないか。それよりも今暫くなるまゝになつてゐて、どうせ斯うなつた身體をあなたの家でも如何し得るものではない、いづれは折るゝに相違ないから、その日を待つてまたこちらにも手段の取りやうがある、と彼は自身の膝の前に俯伏してゐる女の亂れた髮や痩せの表れた頸などを痛いものに觸れるやうな氣持で折々眼を注ぎながら、訥り〳〵低聲で話しかけたのであつた。自分ながら恥しくも思ひ、胸の底にともすれば起りかけて來る厭惡を抑へながら、それでも一生懸命になつて斯う言つたのであつた。

いつの間にか泣く事をやめてゐた彼女はやがて顏を上げた。そしてはつきりと彼を見た。その瞳には恨むといふより何だか氣味の惡い冷たさが宿つてゐるやうに彼には感ぜられた。よく解りました、と一言云ひながら、急に彼女は立ち仕度を始めたので、彼は惶てゝそれを留めた。その態度を見て輕く笑ひながら、でも、斯うしてゐて若し見付かつたらあなたの折角のその計畫も無駄になるぢアありませんか、と言ひすてゝ藥壜を取り上げた。彼も何ともよう言はなかつたが、それでもこのまゝ、接吻ひとつ無しに別れるのが何とも云へず淋しかつた。默つて自身も立ち上つて手を取らうとすると、彼女は輕く頭を振つて急いで部屋を出た。車を呼ばうか、其處等まで送らうかと言ひかくる彼をすべ

て退けて、癖ではあるが別しても小股の急ぎ足ですらりとしたうしろ影を殘しながら門口を出て行つた。廣い下宿屋の玄關口に冷たくなつたやうにして立つてゐた彼は、取り卷いた女中どもの戲談口すら耳に入らないやうな氣がしたのであつた。

あの時追つかけて行つたところで、あの女のことだ、到底あとには引返さなかつたらう、と今更のやうに思ひ返しながら待合室の汚い長椅子の上に彼は起き直つた。

彼女が下宿屋を出て行つた日の夕方、彼女の家から使の者が事た。後には巡査も來た。そして彼は警察に呼ばれもした。彼女はそれ限り自分の家にも親戚の家にも病院にも歸らなかつたのである。

一體自分は終りまで彼女を愛してゐたのであらうか……。

彼はいつか長椅子を離れて、足音をも立てぬやうにして室内を歩きながら斯う考へ始めた。

眞實愛してゐたならば、あゝして必死の覺悟で出て來たものを、如何に將來のためとは云へ、あゝいふ風に追ひ歸す事が出來たであらうか。また、眞實自分はあの時將來のことを考へてゐたのであらうか。それより先づ、女の素振が變つてとげとげしくなつたのを咎める前に、女に對する自分自身の心の狀態を考へて見る必要は無かつたらうか、豫期せぬでもなく、したでもない女のあゝした身體の變化をいよ〳〵眼の前に見た時と、否、それよりもつと以前、女とあゝいふ仲になつて僅か半年あまり經つた頃と、初めて彼女と熱い握手を交はした當時と自分の心に少しも變りは無かつたであらうか。

段々と考へて行けば行くほど彼は息のつまるやうな苦しさを覺えずには居られなくなつた。顏も瞼も急に熱つて來るのを感じた。

『いゝや、それは自分ばかりの事ぢアない。彼女だつて終りまで自分を愛してゐたか如何か知れたものぢアない。』

彼は斯う心の中で呟きながら、或る事を思ひ起した。それはまだ彼女が親戚に預けられぬ前、僅かの隙を盜んで自分に逢ひに來た時、さん〴〵苦しさを訴へて、どうかして自分はいま死に度いものだ、死ぬより外に道は無い、けれど、自分一人で死ぬのはいやだ、と言ひ切つた彼女の聲であつた。さう言つて上目づかひに自分を見上げた鋭い、寧ろ氷のやうな彼女の眸であつた。あの時、自分はどんなに彼女を氣味惡く、面憎く思つたらう。

とすれば、最後に逃亡を誘ひに來た時も、或はまたどういふ下心であつたも知れぬ、と思ひ出すと彼はわれ知らぬ寒さに瞼を瞑ぢた。そしてものごころがつくとから他人の間に生長して、常に周圍を冷たく暗くのみ過して來た彼女の、寂しい、絶望的な性質をまじ〳〵と思ひ浮べた。

『然し……』

彼は、はたと立ち上つた。

『それらは要するに過ぎ去つた問題だ。唯だ、眼の前に在るのは、自分も知らぬ、他も知らぬ所に横はつてゐる筈の彼女の蒼醒めはてた顔だ。それと共に光を知らずに亡びて行つた小さな生物のしかも自分自身の血の通つてゐた生物の冷たい影だ！』

唯だ新聞を買ふために入つて行つた停車場から彼は三四十分間汽車に揺られて平野の間を走つた。その事があつてから彼はどうしても自分の部屋に歸り得なかつた。恐る可き兇報が彼を待ち受けてゐるに相違ないと信じ込まれてゐたからである。歸り得ぬのみか、知つてゐる人の顔を見るのも恐しかつた。が、今朝停車場に入つてから、其處から少し離れた郊外に極く親しい友人の畫家の住んでゐるのを思ひ起すと、急に遇ひ度くなつて汽車に乘つたのであつた。思ひ出すと、その友人の家には二度ほど彼女を伴つて行つた事もあつた。一つは知人に逢ふ機會の少い郊外を使としたのと、一つは多少見せつけたい氣もあつたのであつた。

開け放つた窓に頭を載せて眼を瞑つてゐると、いかにも平野の間を走つて行く汽車に相應しい種々な植物の匂ひが、爽かな風と共に彼の顔を包んで來た。雲雀の啼く聲も聞えて來た。靜かに揺れてゐる汽車そのものも疲れ果てた彼の身體を次第に安らかにした。彼は泣くやうな、睡るやうな心地で今

まで化石してゐたやうに固くなつてゐた自分の身體が次第に溶けて行くのを感じた。涙らしい涙が、初めて彼の頰を傳ひ始めた。

友人の家は停車場を出て色づき切つた麥の畑の間を少し行くと直ぐであつた。が、まだ門も雨戸も締めてあつた。彼は癇癪を起した樣に作つて間もない其處の生籬を乘り越えて、庭の中に飛び込んだけれど、雨戸を叩くのをば流石に躊躇した。氣拔けした樣に茫然と突立つて居ると、郊外の事で家の割に廣く取つた庭には庭だか畑だか解らぬやうに和洋種々な草花が植ゑてあるのが眼についた。若い癖に夫婦とも庭いぢりが好きで、そのためわざ〳〵斯んな郊外に引込んで來たのではあつたが、僅かの間に斯う整頓して作り込んで居やうとは思はなかつた。名は知らぬが大輪の眞紅の花が露を帶びて血のやうに咲いてゐるのなどもあつた。

朝とは云へ、終りかたの五月の日はもう可なり暑かつた。餘程叩かうかと雨戸の方を見やるのだが、いゝんと締め込んである眞新しいそれを叩くのは今朝の自分として如何にも深い罪惡を犯すやうで、容易に手がつけられなかつた。庭の隅まで歩いて行くと、しつとりと垂れた葉櫻の蔭に蹲踞んでゐると、疎らな靑苔と眞黒い地との匂ひが鮮かに鼻を突いて來た。好い心地でそれを嗅ぎながら凭れるともなく櫻の大きな幹に背を凭せると、酒の醉と疲勞とのために力を失つてゐる五體はすぐぐつたりと地の上に頽れてしまつた。起き上ることもせず、彼はそのまゝ、其處につき坐つて睡つてしまつた。

笑ひながら赤ん坊を抱いた友人と、呆れ果てた友人の妻とが自分の前に立つてゐるのを振り仰いだ彼は、流石に顔を赤くしてよろ〳〵と立ち上つた。が、如何なる場合にも微笑を失はぬこの友人の顔をはつきりと認めると、もう解の知れぬ可懐しさと悲しさとが胸の底からこみ上げて來た。

その日の夕方、彼と友人とは友人の家から程近い小さな岡の上に坐つてゐた。全ての事情を打ち明けた彼を、友人夫婦はさま〴〵に慰めて酒を勧め飯を勧め、そして床を延べて臥れた。そして、朝から今しがたまで幾時間といふ事なく睡り通してゐたのを友人に起され、餘りに好い夕方だからと云つて氣乘りせぬながらに散歩に誘はれて來たのであつた。

酒を飲み、都合のい、方の話のみ聞かされてゐる間は何といふことなく慰められてもゐたが、斯うして起き上つて見ると、不安は實に彼の身から去つてゐなかつた。何彼と話しかける友人に時々返事をせぬ事などもあつた。

『また、考へてゐるのかい。』

見て見ぬふりをしてゐた友人も終には憐れむやうに斯う言つて笑つた。

『大丈夫だよ、人間一個の生命はなか〳〵さう簡單に棄てられるものぢアないよ、特に姙娠中ぢアないか。』

『だからサ……』

『だから餘計死ぬと言ふのかい。さうなれば君、人間二個の生命となつてゐるのだよ、死なうと云つて神さまがなか〳〵殺さない、それにそら君にも言つたといふぢアないか、今となつちア可愛くてなか〳〵死ねないと。』

『だつて君、それも人に因るよ。』

『……、君はあの人をいやにヒステリーのやうに考へてゐるやうだが、決してさうぢアないよ、僕は幾度も逢つてはゐないが、なか〳〵さばけた、而かも勝氣な人だと思つてるよ。』

『如何して、』

『如何してつて、さうでなくてそんな陰氣な女がどうして君のやうな男に密着くかい。』

『……』

『ハ、、、、冗談は抜きにしても、女の觀察はやはり女の方が細かいものだが、僕の妻などもさう言つてゐた。さうだ、今度の事だつて矢張り女の證明を信じ給へ、妻などはもうそんな事に寸毫の懸念を抱いてゐないからネ。實はうちの奴なども目下仕上げ中なのだ。』

『またか？』

いか。』

『またかは御挨拶だネ。年々連發の意氣込だよ。ハヽヽヽ。』

呆れたやうに彼は友人の顏を打ち目守つた。夕陽は恰度いま國境の連山の嶺に近く眞圓に懸つてる。麥を刈る農夫どもがずつと打ち續いた畑に、遠く近く幾つも〳〵動いてゐる。友人は何か寫生の構圖でも考へてゐるらしい風であつた。

『それに……』

他所事のやうにして友人は續けた。

『生れつきの性質は別としてそんな家の中で揉まれてゐる間に幾らか陰氣に黝んだか知れないが、君といふものを得て漸く本來の性に歸ることが出來たのだよ。さうでなくつて幾らラブが樂しいものだからつてあんなに君の言ふなりに、と云ふより君を拉してか、自由に跳び歩けるものかい、まるでそれこそ放たれた鳥同樣ぢアなかつたか。』

友人は案の如く寫生帖を懷中から取り出した。太陽は次第に黃いろくならうとして居る。

『さうではあるが、ソラ、永い間の鍛鍊で性根が練れてゐるから、今度の事だつて決して輕はずみなことは爲はしないよ、賴んだつて爲はしない。萬一何かしてゐたのなら夙うにそれ君が樂しんでる新聞ものになつてる筈だよ。』

『さうか知ら……』

『さうだとも、怪しむなら下宿に歸つて見給へ。いよ〳〵もう度胸をきめて君の部屋に鎭座かも知れないよ。なんなら、僕が行つて佳人の家を調べて來てやらうか。』

『……』

『何とか云つたな、ソラ、君等がよく樂しみに出かけた多摩川べりの爺さん婆さんの宿屋よ。彼處なら佳人の家でも警察でも知つてはゐない。』

『お、彼處がある！』

『あるとも、彼處に行つた方が近道かも知れない。』

彼は默つて考へ込んだ。

友人はまた續けた。

『佳人、少し人が悪いもんだからこの坊ちやんを驚かしてやらう位ゐに考へたかも知れない。つまり犬も食はない種類のや、大なるものだネ。』

『でも君、萬一僕の想像が當つてゐたら……？』

『當つてゐたらそれまでさ。仕方はない。まさかそのためにお巡りさんが君を引つ立てる法もあるまい。』

『でも良心が……』

『良心は君、君等が第一の接吻をやる以前に起きて、離れなくちゃ駄目だよ、今になつて眼を覺して
そんな御詫を並べるやうなら良心寧ろ監禁ものだ。』
彼は默つた。ぢいつと友人の横顏を見詰めてゐると、友人も默つて忙しく鉛筆を動かし初めた。そ
して斷々な口笛が折々その唇から漏れた。
『まだ居らしたの?』
不意に細君の聲がした。細い徑を下から上つて來たのだ。
『坊主は?』
『よく自宅でねんねしてます。……オヤ、また同じネ、いつだつて同じ雲ばかりぢアないか。』
斯う言つて良人の側に近寄つて畫帖を覗き込む廿歲を漸う越したばかりの細君を注意して見ると、
なるほどもう六月か七月のお腹であると彼は思つた。
何とも言へぬ淋しさがまた襲うて來た。泣き出したいのを耐へてすつと立ち上ると彼は彼等に背後
を向けて五六步あるいた。
其處の下には濁つた小川が流れてゐた。音をも立てず流れてゐる木蔭の澁みをぢいつと見てゐると
冷たい燻銀の色をした水の面に、また例の顏がまざ〳〵と見えて來た。

或る死んだ男

底寒く曇つた日で、身體に少し熱のあるのを感ずると直ぐ、惡い感冒の流行る時であつたし、岡見
落葉は書間から床を取つて寢込んでゐた。うと〳〵としかけては隣室の子供達の騷ぎに眼を覺して、
次第に心持の重くなりかけてゐた夕方に、突然、
『電報!』
といふ聲を玄關に聞いた。電報といふものを餘り受取り馴れてゐぬ彼は、この鋭い聲を聞くごとに
何といふことなく胸をときめかせて先づ何等かの凶事を豫感するが常であつた。うと〳〵としてゐた
時だけに、一層驚いてゐると、やがて彼の妻が出て行つてそれを受取つた。默つて彼女の言葉を待つ
てゐると、果して頓狂な聲を擧げた。
『マア、山崎さんが轢死したんですつて、山崎昌道さんが!』
『ナニ!?』
『太田さんが知らしてよこしたんですよ、ヤマサキマサミチサクヤレキシス、つて!』

『どれ、寄越せ！』

彼は寝ながらその電報を手に取つた。まさしく妻の言つた通りに認めてある。發信局も太田や山崎たちの鄉里のS——町局である。今朝早く打つたのが、餘程遲れて屆いたものらしい。

彼は二三度讀み返すとそれを枕許に投り出しておいて初めの通りに蒲團を被つて眼を瞑ぢた。妻は其處に膝をつきながら電報を取り上げて今一度丁寧に文字を拾つた。

『どうも斯んな事になりさうな氣がしてゐた、ソラ、いつかも妾がさう言つたぢやァありませんか！』

彼は返事もせず、眼もあけなかつた。

『どうしませうネ』

『どうもしないよ、其處にそれを置いといたら可い！』

不興氣な聲を聞くと妻は電報を其處に置いたまゝ、次の間へ立つて行つた。

たうとう行つたか、と電報を一目見るとから彼も思つてゐた。恰も當然な結果が其處に現はれたのを見る樣な氣持で、普通謂ふ人の自殺、しかも知人の自殺に對するといふ驚愕も——それは驚くには驚いたが——哀愁も、憐憫の情といふ樣なものも一向に岡見の心に動かなかつた。動かなかつたどころか、何となく不潔な、醜汚なものを眼の前に突きつけられた不快すら起きてゐた。彼は蒲團の中でも顏をしかめては思はず唾を飲み込んだのであつた。

それと共に僅か半年ほど前に別れた最後の時の事が直ぐ心に浮んで來た。夜ふけの十二時近くに矢張り一通の電報を持つて山崎は岡見の宅を訪ねて來た。そして、危篤と云つて鄉里の父からこれが來ました、如何しませうかと云ふのである。君はどうする積りだ、と岡見はその泣き張らした樣な赤い眼を見ながら訊いた。斯う云つて來ますと矢張り歸らないわけに參りませんから歸らうかと思つてゐます、と常に似ず明瞭に答へた。さうか、ではお歸り給へ、然し大變だねえと言ひながら、で、何時立つ、と訊くと明朝の八時の汽車で立たうと思ひますと答へた。汽車賃は、と追ひかけて訊くと、主人が都合して呉れるさうですと言ふ。岡見はその時自分だけ起きて寢衣のまゝ玄關の二疊で逢つてゐたのであるが、改めて妻をも起した。そして斯う〳〵だと告げた。岡見の妻を見ると、そしてその手短かな見舞の言葉を聞くと山崎はしく〳〵と泣き出した。思ひ切つた樣に遠慮なく泣き出した。それに誘はれさうになつてゐる妻を岡見は次の室へ呼んで、金はあるかと訊いた。何でもいゝからある丈け出して御覽と言ひながら彼自身の財布や妻のやを、はては火鉢の抽斗まで探して一圓と八十二錢を集め得た。もう二十錢あるといゝんですがねェと言つてゐる妻の手からそれを受取つて、傍にあつた新聞紙を裂いてくる〳〵と包みながら玄關へ持つて出た。ゆつくり話せるといゝが、愚圖々々してると電車が失くなるだらうから、今夜はこれで歸り給へ、明日も見送るといゝんだが早いから失禮する、これは汽車の中で果物でも喰べて呉れ給へと言ひながら、その小さな新聞包みを渡した。辭退するや

ら泣くやらしてゐるのを追ひ立てるやうにして、電車まで彼も送つて出た。どうも僕には阿父さんの病氣といふのは嘘としか思はれないが、さうして電報などが來て見ると君としては歸らずにもゐられまい、歸るのはいゝが矢張り君自身餘程しつかりしてゐないと是迄の折角の苦心も水の泡になるし、双方共倒れになるに定つてゐるのだから、と電車までの路を急ぎながら彼はこの憐れな男にいひかけた。例の通りの仕事着の小倉服に下駄を履いて、兩手をヅボンの隱しに突き込んで前くゞみになつて歩いてゐるのを見ると平常より一層痩せてゐる樣で、そゞろに岡見も憐れを覺えずにはゐられなかつた。えゝえゝ、もうそれは覺悟して居ります、とは言ひながらその聲は上の空であつた。今度逢ふのはS——町だか東京だか知らないが、兎に角立派な一軒の主人になつてゐて大いに僕に御馳走して呉れ給へ、と子供らしいとは思ひながら斯う言つてわざと笑ひかけると、えゝもうそれは充分御馳走します、と案外にもその夜初めて力のある聲を出して彼は笑つた。

案の如く電車はもう無くなつてゐた。五分ほど前に赤が出ました、とその電車の終點に在る交番の巡査は言つた。

『どうするネ、もう一度僕の宅へ引返して明日の五時のに乘るやうにするか』

と岡見が言ふと、

『イエ歩きます、まだ何の用意もしてゐなかつたものですからこれからそれを爲ねばなりません』

と言ふ。彼の主人の宅は本所外手町であつた。

『だつて、大變だらう』

『イエ、わけはありません、急ぐと直ぐです』

と言つて帽子を取つた。

『さうか、では』

と岡見も帽子を取つた。彼は、山崎はまた泣き出してゐた。岡見も流石に迫つた氣にはなつたが、側に立つてゐる巡査の手前もあるので、

『では、歸つて來給へ、歸つたら事情を詳しく知らする事と、それから太田君にも宜しく言つてくれ給へ、では、左樣なら！』

と、わざと輕く言つて別れた。

それから彼是五六ヶ月の間、山崎からは葉書一本來なかつた。太田の葉書で無事に彼の歸つたこととその父の僞病氣であつたことだけは知つてゐた。其後は太田からも久しく音信が途絶えてゐるので、折々思ひ出してはゐたが、こちらからも改めてどうしてゐるかを問ひ合するだけの氣もなかつた。

その山崎が昨夜轢死したといふ。

『どうも、そんな事つきり出來なかつた男かも知れない』

岡見は斯う思ひながら最後に別れたそのうしろ影を見送つてゐる樣に天井を見詰めてゐた。驚かぬとは言ひながら流石にはつとしたものか、彼は急に自分の頭の痛み出してゐるのに氣がついた。

山崎が岡見を東京に尋ねて來たのは三年餘り前になる。同國とは云つても岡見の生れたR——町と山崎のS——町とでは二十里から離れてゐたが岡見の幼な友達の太田俊一がS——町の方に移り住む樣になつてそれを仲に兩人は相知つた。三人とも文學好きで、中でも岡見は東京に出ていつの間にかその道で一身を立つる樣なことになつてゐた。太田と岡見落葉とは齡も同じだし、小學も中學も同じに經て來たのであつたが、山崎は五歲ばかりも年下で、家も貧しく、小學をも出たか出ぬかであつた。そしてその文學の方面から云ふと山崎は太田に兄事し、太田は岡見を尊敬してゐるといふ地位に在つた。山崎は殆んど毎日太田を訪ねて、その話を聽いたり、書籍や雜誌を貸して貰ふのを喜んでゐた。岡見が父の葬式を濟ませて上京の途中久しぶりに太田を訪ねて、かねて手紙などではよく知つてゐた山崎と公然に初めて逢つた時、その慇懃なのに驚いた。名乘はしなかつたが、實はその少し前に岡見はこの青年を或る所で見た事があつたのだ。山崎の父はR——藩に仕へた漢學者で、特に書を能くした。そしてそのために縣廳の文書課といふ風のところへ出て、辭令などを書かせられてゐた。それも昔の

友達で今は相當の位地になつてゐる同じ役所の者のお情の仕事で、位地も報酬も極めて輕いものであつた。そして山崎もそれ等の緣故で父と共に同じ役所に勤めてゐたが、父よりも一層低い地位であつた。それが或時、縣の教育會の催しか何かで、或る上役の人に隨いて幻燈を持ちながら縣下の各小學校を廻つて歩いた事がある。岡見の鄕里の小學校にも廻つて來た。その頃丁度岡見は父の病氣のために東京から歸省してゐたので、太田から斯う〳〵といふ男がいつか行く相だから行つたら逢つて呉れ、といふ手紙を貰つてゐた。幻燈會は開かれたが、その男は訪ねて來なかつた。その二日目の夜、岡見は小さな姪を連れて幻燈を見に行つた。すると、何處とかの小學校からこちら、その上役の人が病氣で休んでゐるとかで、色の生白い、小柄な、痩せた青年が一人で萬事を切り廻してゐた。

『コラ〳〵、近くに寄つてはいかん』

と大きな聲で子供ばかりでもない見物人を叱つたり、

『君々、それを如何して呉れ給へ』

と自分より十歲も年上のその學校の敎師にわざとらしい高聲でものを言ひつけたり、幻燈の前半の說明をば學校の敎師がやり、後半はその青年自身がやるのであつたが、說明といふよりいかにも目下の者に敎へてやると云つた風の橫柄な氣取つた態度でやつてゐた。

『これがその男だナ』

斯う思ふと、岡見は自分から名乗つてこの猪口才な小僧に逢ふ必要はないと思ひ込んでしまつた。

翌日もわざと早朝から家を外してゐた。それが斯うした太田を仲にして逢つて見るとまるで打つて變つた慇懃な、青年といふよりは子供とでも云ひ度い程で、三度も五度も聲をかけねば彼は廊下に坐つたまゝ岡見達の居る座敷には入つて來なかつた。そしていかなる時でもさも面白相に莞爾々々と笑つてゐた。剛れない間は、岡見はそれを氣味悪く思つた。

『少し變ぢアないか』

山崎が席を外した一寸の間に岡見は太田に言つた。

『うゝん』

と太田は笑つて、

『自宅がひどい貧乏をしたりなんかしてるもんだから自然あんなになつたんだらうよ、性格にもよるだらうがネ』

と言ひ足した。太田の家は土地で有數な財産と名望とを持つてゐた。

そんな風で逢つて來た翌春、まつたく突然に山崎は岡見を訪ねて來たのであつた。そして顏を合はせる早々、私はこれから理髪師になりたいからその弟子入の御周旋を願ひ度いと言ひ出した。

『理髪師ですつて？』

岡見は訊き直した。

『エ、、さうです、床屋です。實は私は鄉里で月給を十一圓貰つてゐました。父の月給と云つても似たものです。そして家には母と弟が二人と妹が一人ゐます。それでどうして家が立て、行けませう。そのうち父は程なく老朽でやられます。夙くに一度その云ひ渡しがあつたのですけれど泣き着いて漸く置いて貰つてゐるのです。私にしたところが、いつまであんな役所にゐたつて先きの知れた事です。で、いつその事いまの間に其處から出て、何か手に職でも覺えて置いたらさき〴〵安心だらうと、さう思ひ立つたのです』

さう言ひながら何時か彼は涙ぐんでゐた。岡見はその時彼の涙を初めて見た。幻燈會の時の彼、太田の家での彼、そしていま其處に泣いてゐる彼、何だか不思議なものを見る樣な氣で、唯だ空しくそれを眺めてゐた。役所の給仕あたりによく見る小倉服を着て、汽車から降りて來たばかりの脚をきちんと坐らせて、正しく兩手を膝についてゐた。四百里近い道中で考へ〳〵でもやつて來たか、彼の言ふ事は誠に理路整然としてゐた。そして、話してゐるうちに自づから熱を持つて來た。

『それに段々耻を、お話せねば解りませんが、私の父は——今は飮めないから止めてますが——舊は恐しい酒飮みでした。その爲でもありますか、私は幸ひに何ともありませんが弟や妹がみな普通の身體でありません。白痴とまでは行きませんが、ものもろく〳〵言へないやうな者ばかりです。そし

て妹はもうい、年頃ですのにまだ毎晩の様に疎匆をします。弟は弟で――末の弟はまだやつと九歳になつたばかりですけど――盜癖を持つてゐて、何處に奉公に出しても直ぐに歸されてしまひます。…』

ともすれば泣聲になりさうなので彼は暫く言葉を切つた。そして手布で兩眼をしつかと押へた。岡見も今は好奇心から離れて漸く本氣になつて耳を傾けて來た。茶を代へに來た妻をば目顏で直ぐ階下に降ろした。

『父は父で唯だ威張つてばかりゐて、そして時にはまるで半狂氣の樣になつて母を毆つたり、妹や弟を毆つたりします。私をばよく〳〵の時でないと毆りませんが、然し、それらを見てゐますと私自身が何だか氣が變になりさうで、どうかすると父を毆らうとする事なんか度々あります。そしてそんな事に氣がつくと私自身氣味が惡くてたまらないのです。で、どうかして先づそんな不愉快な事の見えない所へ行き度いと思ひまして、……その上役所の方の仕事も私の氣性に合ひませんし、先きの見こみもありませんし、それで……』

骨は折れても氣の樂な、金の取れる仕事をと考へた末、理髮を選んだのだといふのであつた。それには何も斯んな所まで來なくとも近くの鹿兒島なり、福岡なり、神戸大阪なりで修業してもい、のであるが、なるたけ家から父から遠ざかり度く、それに何を云つても東京だと思つて出て來ましたといふ。

『よく阿父さんが許しましたネ』

『無論許しません、こちらでい、職に就くやうに言つて欺して來たのです』

『毎月金を送れとか云ふ樣な事になりはしませんか』

『さうですけれど、それは仕方ありません、その代り私も精々早く修業して歸つて安心させます、幸ひに私は手さきは割に器用な方ですから案外に仕事は速く覺えられるかと思ひます』

『それまで家の方は大丈夫ですか』

『どうにかならうと思ひます、眼を瞑りさへすれば妹でも弟でも何處にか奉公口があらうと思はれます、母も少しは內職をしてゐますし……』

それから岡見は自身行きつけの床屋から知人達の剃染まで出來るだけ手を盡して奉公口を探した。が、悲しい事に山崎はもう齡が齡であつた。いくら器用だと云つても、この指さきの藝は十三四歳からたかゞ〳〵二十歳どまりでなくてはなか〳〵覺えられぬものだといふのである。山崎はその時廿六歳であつた。小柄で、子供々々しい所から後には廿二歳だと言つたりして賴んだけれど、そんな事情では手に藝が出來早々鄕里へ歸らなくてはなるまい、さうすれば禮奉公といふものもして貰へまいから、と云つてなか〳〵何處でも引き受けて呉れなかつた。まア仕方がない、氣長く探すのだと言つてゐる岡見をさしおいてまだ西東すら解らない市內の床屋を今度は一軒々々と自分に訪ねて歩き始めた。當時の彼の意氣込は實際見てゐて苦しくなる位ゐのものであつた。

たうとう彼は目的を達した。その床屋は神田のとある大通りに在つた。主人は何とか教の凝屋で、丁度彼の行つた時、朝の祈禱をすました所であつたが、よろしい、それでは自分が天なる神さまに代つて貴公を救つて上げるから、と云つて引き受けて呉れたのださうである。喜び勇んで岡見の宅に歸つて來た彼はすぐその足で引き越して行つた。そして直ちに彼もその日から何とか教の信者となつて天なる神さま〳〵と朝夕祈禱を上げるやうになつた。

月の十七日が彼等職業者の休日であつた。その日には毎月缺かさず山崎は岡見の家を訪ねて來た。どんな男なのだらうと内々不氣味に彼を見守つてゐた岡見も次第に彼を了解して來た樣な氣がした。それは極めて平凡な好人物な、もつと適當した言葉で云へば、へなちよこな人間であつた。來るとから歸るまでにた〳〵笑ひ通しで、起つたり坐つたりするのにも如何にも落ちつきのない、輕卒な、その性格が現れてゐる樣に思はれた。岡見の宅の五歳になる男の兒が先づ彼を馬鹿にし始めた。

『やァい、山崎の馬鹿野郎、なんだつてそんなに笑つてばかり居やがるんだい、やァい！』

『これ〳〵、太郎さん、何を貴郎は言ふの、山崎さん御免なさいよ！』

と赤くなりながら取りなすその母の聲も半分は包みかねた笑ひ聲であつた。山崎は無論多々益々笑ふばかりであつた。

それでも子供とはよく遊んだ。一日子供の言ふまゝになつて遊んでゐた。子供たちもその日の來るのを待つやうであつた。岡見の妻も亦たさうで、その日には晝とか夕方とかに必ず何か變つた食物を拵へて彼を待つた。たゞ困つたのは彼の遠慮深いことで、四品つけた料理ならば必ずその二つか一つには決して箸をつけなかつた。

『オイ君困るよ、君の殘したものをさう誰も喜んでは喰べんから喰べて行つて呉れ給い、無駄になるぢアないか』

などとぞんざいな口をきく樣にいつの間にか岡見もなつてゐた。

『へゝゝ、あまり勿體ないですから』

とお辭儀をしい〳〵、矢張り喰べ荒すことをしなかつた。で、いつとなくその十七日の御馳走も影を消すやうになつた。

彼が岡見の家に着くのはいつも晝少し前か、どうかすると晝少しすぎに決つてゐた。それは毎度主人に伴れられて午前中を其「天なる神樣」にお詣りして來るためであつた。「天なる神樣」の本社とか奉祭場とかいふべきものは麹町の富士見町に在つた。其處でただ「天なる神さま、天なる神樣」と呼んで手を高く合掌して拜んでゐると、いつとなく心が淨められて、その天なる神樣が來てその心へ宿るのだといふ。初め岡見はその床屋の主人の弱點につけ込む山崎の一つの手段だとのみそれを睨ん

でゐた。が、次第にそれは彼の本心から行つてゐることだと解つて來た。初め山崎がその床屋に奉公を許さるゝ時、床屋の主人はその朝豫め彼の來ることを知つてゐたのださうだ。神の前に祈禱をしてゐると神さまが現れて今朝斯う〳〵した憐れな孝行者がお前を訪ねて來るからお前が私に代つて引き取つてやれといふお告があつたのだといふ。

『その事を話す時、主人の眼からは眞實(ほんとう)に光が發する樣で、思はず私は慄へました』

と山崎は敬虔な眼を擧げて岡見に語つた。

『だつて君、その前の晩その近くの床屋まで君はめぐつて行つて置いたんだらう』

と言ひかけたが、その眞面目な顏を見ると口には出さなかつた。そして代りに、

『それは然しい、事だ、何にせよ信仰といふものは人の心を統一する力を持つてゐるらしいから…』

と言ひかけて、

『そして何かネ、君はその神さまの前で拜んでゐるといゝ氣持かネ』

と訊ねた。

『えゝもうそれは、まるで極樂に行つてゐる樣です！』

と言下に答へた。

或時は斯ういふ事も言つた。

『此方に來ます前、毎朝神さまの前で拜んでゐますと、もうちやんと岡見先生のお留守だかどうだかといふことが解つてゐます』

すると、次の日、門の前に例の山崎の笑ひ顏を見出すや否や、岡見の妻は頓狂な聲を出して玄關の窓から首を出した。

『いけない〳〵、山崎さんいまその門をあけてはいけませんよ、そして如何(どう)、けふ宅(たく)は居て、居なくつて？』

長火鉢の側で新聞を讀んでゐた岡見はその妻の言葉に驚くと同時に直ぐ例のへら〳〵聲を聞いた。

『へゝゝ、無論今日は御在宅です！』

『オヤー、ほんとに變なものですねェ！』

岡見はたうとう其處に倒れて笑ひ轉げた。

一年か一年餘りも經つた頃、山崎はバリカンや剃刀を持つて來る樣になつた。子供は一度で懲りて逃げ廻つたが岡見夫婦は進んで彼に頭や顏を任せた。唯だそれよりも迷惑だつたのはその度ごとに彼が何かしら手土產を持つて來ることであつた。それも煎餅や菓子などならばまだしもだが、時にはやや高價らしく見ゆるクリーム類だとか、ふけ取香水、石鹼、タオルなどを澤山持ち込むことであつた。

遠慮でなくそれを謝絶してもなか〳〵聽かなかつた。そして折りふし「恩を忘る、樣では人間でありませんから」と彼の言つてゐる事を岡見は妻から聞いてゐた。

『一體君はどうしてそんな金を持つてゐる？』

岡見は或る時、斯う訊いた。しきせは勿論いらない、小遣も普通の三分一か五分一で澤山だからといふ約束で初め住み込んだのであつたが、それでは神さまに對しても濟まないと言ひながら其處の主人は先づ普通の待遇をば山崎にしてゐる樣であつた。それだけまた山崎は他の幼い弟子共と違つてよく働いてゐるらしかつた。夜などは大抵三時間か四時間しか眠らない、とよく彼自身言つてゐた。思ひ込むとすぐ夢中になりさうな彼としてそれもさうだらうと岡見もそれを信じてゐた。が、まだ一人前にも半人前にもなり得ない彼として與へられてゐる金額は大抵知れたものであつた。

『あゝいふ所にはみな特約店があつてそれこそ嘘の樣な値で買へますよ、それに東京の商人は商賣が巧いから私等見た樣なものにも何か知らよく呉れて行きます』

と山崎は平氣で答へた。それもさうかとは思ひながら、以前に彼の弟の性癖などを聞いた事のある岡見は矢張り何か氣がとがめてならなかつた。暢氣な彼の妻も、

『山崎さんから貰ふのはいゝけど、何だか氣味が惡くて爲樣がない』

などと言ふ樣になつた。

君も折角の休みを神さまの前と此處とだけでつぶしてゐたのではまだ何處も知るまいから、これから段々と僕が案内してあげよう、と親切や義理のほかに自身遊びに出かけたいのが混つて岡見は頻りと淺草や銀座へ彼を引き出さうとしたが、山崎はなか〳〵應じなかつた。私のやうな意志の弱いものは直ぐ誘惑に負けるから成効するまでそんな所へは一切出ないことにしてゐる、といふのである。これには岡見の妻も全然同意を表してゐた。

が、或る日たうとう彼を淺草へ連れ出した。初めの約束であつたので、先づ活動寫眞館に入つたが——その時岡見は曾ての幻燈會の事を思ひ出してひそかに側にゐる萎びた山崎の横顏を盜み見た——餘り面白くないと云ふので早々に其處を出た。そしてそれが岡見の初めからの計畫であつた或る料理店へ寄つて一杯飲み始めた。

酒は嫌ひだといふ山崎の言葉の僞であることを人一倍酒好の岡見は夙うから見抜いてゐた。そしてうとかねてから樂しみにしてゐたのであつた。臆してゐる山崎を促して二階に通りながら一つの室に向ひ合ひになつて座を占めると、愈々その時が來たと岡見は子供のやうになつて心の中で手を拍つた。そして巧みに盃を強ひた。察してゐた通り彼は酒は嫌ひでなかつた。二三杯は辭してゐたが、やがて自身で德利に手を出すやうになつた。一二度はハツとした樣にその手を引き込めてもゐたが、終には

公然とさし出して來た。見るともう全身眞赤になつて、どうにも身體の中心が取れぬらしく、右に左にふら〳〵しながら兩眼は眠つたやうに細く眼尻が垂れて、例のへら〳〵笑ひのみ一層冴えて來た。可哀相に、飲み馴れぬからもう參つたナ、と思ふ頃には岡見自身もかねての願望を達した安心と共に彼に劣らず醉つて來た。

話はいつとなく「をんな」の話で持ち切るやうなことになつた。そんな馬鹿話に興味を持たぬ岡見ではなかつたが、その日は特に一方の氣を引いて見る興味が手傳つたので、一層面白さうにげら〳〵と笑ひながらうまく調子を合せた。そして內心驚いたのは山崎がその道にかけて明るい事であつた。かなり詳しいと自任してゐる岡見すら知らぬ種々の事を彼は知つてゐた。これは驚いた、これは如何して、などと誇張でなく驚いてゐる先輩の前でその夜も例の小倉服一着の彼は思ひも寄らぬ精力を出して火の玉のやうになつて饒舌りたてた。はては銚子を持つて來た女中どもまで其處に笑ひ轉げて、涙を流しながら、

『まア、この人は！』

などと泣く樣な聲を出して彼の背を撲つた。その度ごとに彼は恰度小野道風の繪に描いてある蛙の樣な恰好でぴよん〳〵と座蒲團の上に坐りながら躍り上つた。

それを見てゐた岡見はまた一つ新しい惡戲を心に企てた。そして、急に、

『オイ、歸らう、もう遲いぞ！』

と立ち上つた。

呆氣に取られた樣に岡見の顏を見上げてゐた山崎は、それでも澁々立ち上つた。そして店を出離れるとすぐ岡見の肩に兩手でつかまりながら、急に改つたやうな感謝やら、愚痴やらを述べてゐたが、それでも電車の遠いのには氣がついたらしい。頻りにまだか〳〵と訊いてゐた。直ぐだよ〳〵と答へながら鼻唄か何か唄つて行く岡見の足もとも少しも定らなかつた。そのうち急に明るい賑かな街路へ出た。すると、岡見はその時までも肩にもたれて眠つてでもゐた樣な相手を起して、

『オイ、斯んな所へ出たぞ、此處は一體何處だ!?』

山崎は起された身體を眞直ぐにして急に四邊をきよろ〳〵と見廻してゐたが、其處は狹い街路を挾んで洋風まがひの大きな建物が押し並んでゐた。そしてその建物の店さきへは幾枚となく女の寫眞の大きな額が懸けられてあつた。それに眼をとめると、矢庭に竦む樣に五體を固めた。

『此處は、此處は、吉原ですナ！』

と言ふや否や、まるで木の倒れる樣にその竦んだ身體を岡見に向けて一本立に倒して來た。と同時に、彼は岡見の胸に兩手で掩うた顏を磨りつけてオイ〳〵と泣き出した。

『あんまり酷い、あんまり酷い、先生は、先生は！』

『如何したんだい、これは！』

笑ひたさをこらへて、好奇心の塊みたやうになつてゐた岡見は膽を潰した。餘りに豫期しないこの光景だつたからである。

『あんまり酷い、あんまり酷い！』

そのうちにも山崎は立て續けに悲鳴を擧げた。

そのうち三四人の野次馬が寄つて來て二人の顏を覗き始めた。宵の口の丁度人の出さかりである。途方に暮れた岡見は矢庭に顏を掩うてゐる山崎の兩手を摑むと共に、それを肩に引懸けて大門口の方へ急いだ。五十間から見返柳の側を過ぎて其儘眞直ぐに電車の方へ出ようとすると、その時までもしくゝと泣いてゐた山崎が、突然、

『下駄が、下駄が、……』

と七八つの子供の樣な鼻聲で言ひ出した。小倉服に下駄を履いてゐた事に氣のついた岡見が尙ほ引擔いだまゝの山崎の足もとを振返ると、成程一方だけをからん〳〵と引きずりながら一方が失くなつてゐる。

『チエッ！』

舌打をすると共に肩から兩手を外すと山崎は其儘其處にクニヤ〳〵と坐つてしまつた。それを捨て

て置いて馳け戻つて見ると五十間の中程の所を職工らしい二三人連が面白がつて互にそれを蹴合つて行く所であつた。前に廻つて岡見がそれを拾ひ上げて見ると按摩の履く樣な高い足駄で、爪皮抜きに握り太の小倉緒がすげてあつた。腹が立つやら可笑しいやら、片手に高くそれを指し上げて馳け返つて來ると倒れもせず立ちもせず、舊のまゝに潰れてゐた。

『ソラ、ソラ、しつかりしろ！』

下駄を前に投り出して引起すと辛うじてそれに足を突き入れた。見ればもう泣いてゐない。前の樣に手を肩にかけ樣とすると、

『イエ、もう大丈夫です』

と低い、つぶされた樣な聲で言ふ。その泣く樣な寢呆けた樣な小さな顏を見ると、岡見は耐らなくなつて失笑した。

『正氣づいたか、どうだ、もう一度引返さうか』

『イエ、もう私は、……』

『それぢアもう一杯何處かで飮まう、馬鹿々々しくつて電車にも乘れはしない』

『イエ、もう私は、……』

『生意氣言ふな！』

折よく眼の前にあつた酒場へ幾らか反抗してゐる彼を無理に岡見は引入れた。

『どうしたネ、疎葉先生、まつたく驚いたよ、隨分大きな聲だつたからねエ、アノ前の家の華魁たちがみな出て來て大騷ぎだつたよ』

酒を三四杯引きかけると岡見はまた元氣づいて山崎に斯う言ひかけた。

『……』

山崎は唯だ手を振つてゐるきり、顏をばテーブルに伏せてゐた。

『眞實(ほんとう)に君は嫌なのかネ、何しろ淺草での勢ひが獰猛だつたからてつきり君をその道の勇將(もさ)猛者ヒーローだと僕は信じちやつたんだよ』

『……』

『まア一つ飮み給へ、悉く閉塞してしまつたぢアないか、さア、熱いのを、どうだ』

山崎は何と言はれても酒も飮まず、返事も出來なかつた。岡見だけは一時消えてゐた醉がまた急に出て來て獨りで面白くなつて來た。

『引返さうよ、折角此處まで來て空しく歸るんぢア、全く爲樣が無いぢアないか』

實は岡見はもうその時は山崎は相手で無かつた。たゞ解もなく先刻からの事が可笑しくなつて獨りで悅に入つてゐるのであつた。すると、急に山崎が顏をあげた。眼は血走つてゐたが、顏は氣味惡く

蒼褪めて見えた。

『では先生だけ御いで下さい、大變失禮ですが私は此處から歸して頂きます』

『へゝえ、それはまた如何いふ解だネ』

急に斯う眞面目に出られては面喰つたが、岡見の心はまだ面白さ可笑しさで一杯であつた。

『どういふ解といふではありませんが、……』

と言ひかけると、急に彼の聲の調子が變つて來た。また泣くナ、と岡見は上目でその顏を見た。

『私は一生あゝいふ處へは足を入れないつもりなのです、あゝいふ處ばかりでなく私は一生童貞を守り度いと思ふのです、私は……』

たうとうしく〳〵泣き出した。

『童貞を、ネ?』

『私は世の中の一切の男女關係を呪ふ者ですから、……』

オヤ〳〵また大變な事になつたと思ひながら椅子に身を反らすと正面が大きな鏡の壁となつてゐた。其處にはエプロンをかけた二人の少女が顏を差し寄せながらさゞめいてゐる顏が寫つてゐた。さうして鏡の上で岡見の笑つてゐる眼と彼等の眼と合ふと、急に彼等は顏を反けて笑ひ出した。それを呼んで勘定を拂ひながら、岡見は立ち上つた。

『サテ、童貞居士、歸らう、安心し給へ、今度こそ電車だよ』

山崎はまだ造作なくは椅子を離れかぬる位ゐに身體の自由が利かなかつた。岡見が側へ寄つて先刻の樣に手を肩にかけようとすると、危く逃げながら、

『イエ、もう大丈夫です』

と言つて、まだ泣きじやくりを止めかねてゐた。

『ほんとに大丈夫かネ、そして、下駄は！』

その次の月の十七日には來るかどうかと岡見が危ぶんでゐると、相變らずにこ〳〵しながら書過ぎにやつて來た。その日は小倉服でなく主人のを仕立て直した樣な縞袷を着て來た。そして平常のバリカンと剃刀との代りに自作の小說一篇と和歌數首とを持つて來た。小說には此頃日をきめた樣にして一人の少女が自分の店に顏を剃りに來る、神さまが運命づけてゞもゐる事か、その少女の番にはいつも自分が當る樣になつて來てゐる、そしてすべての運命を神の前に捧げてゐる人のやうに安らかに眼を瞑ぢてその幾十分かの生命を自分の手に委ねてゐる姿を見ると自づと自分も神の樣な心にならざるを得なくなる、然し、どうかした拍子にその豐かな薔薇色の頰や、しなやかな首筋を見ると、ぐさとばかりに手にした剃刀の鋭い刃先を突き立てずには置かれぬ樣な心にもなる、此頃自分はこの二つの

異つた心のために次第に精神と肉體との衰弱を感じつゝある、といふ風のものであつた。歌は、斯うした夜更にあなたの家の前に來て立つてゐると何處に寢ておゐでるか知らないがあなたの寢息がたしかに自分の頰に觸れるのを覺ゆるといふものや、ふところ手をしてゐる自分の指さきがいつとなくあなたの乳の動悸に觸れてゐる樣な感じに變つてゆくといふものなどであつた。苦笑しながら讀んでゐる岡見の顏には氣もつかぬ樣子で、自分は久しく怠つてゐたが、これから少しは仕事の方も隙になるしするから熱心にまた文學をやつて見るつもりだ、何と云つても自分の一生の眞實の仕事は其處に在る樣だ、などと語り出した。そしてその日から今までは固辭してゐた岡見の晩酌の盃を受けてゆく樣になつた。自然と口數も多く、歸つてゆくのも夜が更けてからになつた。

岡見は內心淺草に連れ出した事を後悔せずにはゐられなかつた。その日以來、山崎の岡見に對する態度が急變してしまつたのである。今までは迷惑な位ゐに自分を先輩扱ひにしてゐた彼が急に友達扱ひにする樣になつた。それも多くは自分の店にでも居る朋輩づきあひといふ風の態度であつた。話題も急に變つて多くは下卑た、それも女の噂が多くなつた。女の話と云つても彼の持つてゐる材料は縣廳時代の惚氣に、東京に來てからのものでは彼の店に顏を剃りに來る二三の女と、店の細君との二つしか無かつた。それらを聞いても彼が縣の敎育會から派遣されて幻燈を持つて廻つた事はよく〳〵彼にとつて得意の時代であつたらしい。何村小學校の女敎員がどうしたとか　何々校の校長の細君がい

い年増の癖に斯うしたとか、それを話し出すと相手の聞く聞かぬに係らず彼は獨りで夢中になつた。馬鹿々々しいとは聞きながら、蓮葉な女などには可愛がられさうな色白の小柄な小ましやくれたその顔を見てゐるとまんざらの作り事でも無かつたらうと岡見もツイ釣られて微笑む事などあつた。

そのうち山崎が岡見を訪ねてから三度目の春が廻つて來た。殆んど毎月缺かさずに訪問して來たものが、次第に間を置く様になつた。岡見の宅ばかりでなく、麹町の神さまの方へも段々疎遠になつた様子である。或日、三月目で夕方かけて例の通りにやつ〳〵しながらやつて來た。

『どうした、大分足が遠退いた様だネ』

『どうも濟みません、いつとなしに店のお馴染が殖えて、この十七日には待つてる、家内中のを一寸やつて呉れなどと仰有る方が出來るものですから、ツイどうも……』

『それは結構だ、それで、彼處は如何だネ、富士見町の神さまは?』

『あちらへも隔月位ゐになりました、どうも忙しいものですから……』

『他に增す神が出來たつて云ふわけだネ』

『へゝゝ』

と笑つてゐた。その日、平常の通り酒を持ち出して勸めたが、にや〳〵しながら彼は盃を取らなかつた。岡見は皮肉な眼でその顔を見てゐたが、

『山崎君、君顔色が悪いネ、病氣か?』

『へゝゝ、實は少しばかり』

『さうだらう、眼がどんよりしてる、どつちだ、「うめ」か「さびしきか」か?』

『え?』

『わからないネ、スペかゴノか』

『アノ――……』

『梅毒か淋病か?』

『へゝゝゝ、ソノ、後者です』

『後者ですか』

ハゝゝと兩人とも笑つた。そして笑ひついでに、

『到頭破つたネ、例の一生の童貞を!』

と岡見は何氣なく言つた。すると、急に眞面目になつた山崎は岡見の顔を氣味悪く見詰めて、

『いゝえ、それは決して破りません、それは破りませんが……』

岡見が嘲笑ひながら何か言はうとすると、掩ひかける様にして早口に、

『破らなくともこの病氣に罹る者は澤山あるさうです、醫者がさう言ひました』

といかにも訴へる様な顔をして言ひ足した。岡見もそんな話を聞いてゐないでも無かつた。

『と、すると、君のは自己流の結果か』

『マ、さうですナ、へゝゝ』

岡見はその卑しい笑ひを見ると、胸の悪くなる様な不快を感じた。そして手痛い罵倒をしてやらうとその文句まで頭に浮んだが、口に出すのも汚なかつた。

今まで自宅で原稿を書いてのみ暮して來た岡見は終にその貧乏に耐へかねて或る新聞社に勤むる様になつた。朝は十一時頃に家を出て、夜歸るのは十一時十二時若しくは一時二時であつた。從つて山崎と顏を合せる事も殆んどなくなつた。そして妻から彼の噂を折々聞いた。其頃彼は主人と共に神田から本所の方に移つてゐた。主人が變人であるために段々得意が減つて神田の店をば持ち切れなくなつたのださうだ。本所の店は前の半分もなく、三人居た職人も彼一人となり、居間も二階一間、階下一間しか無い家と變つた。それは兎に角、彼自身の更に弱つた事は此頃頻りに鄕里の父から彼の歸鄕を强請して來ることであつた。初め上京して來た時、まる三年だけ見逃して置いて吳れる様にといふ願ひを彼からも、また彼の賴みで岡見からも、その二人から賴んで太田からも口をきかせて、辛うじて頑迷な老爺を納得させたのであつた。その三年にはあとまだ一年あるのであるが、待ち切れなくなつたと見えて、山崎自身にも、稀には岡見に宛てゝも催促や愚痴の手紙を寄越すやうになつた。弟や妹

達をば他へ出してあるし、家も太田の持家を——もつともそれは小さな物置であつたのだ——貸してあるし、さう困るわけは無いのだが、と言ひながら山崎は流石にその手紙を見るごとに臆病な胸を痛めてゐた。唯だ打ち捨て、置くがい、といふ岡見の勸めをも用ゐかねて、その度ごとに何彼と返事を出してゐた。そのため、父の方ではいい氣になつたと見えて、一層頻々と手紙を寄越す様になつた。それも殆んど郵稅先拂のものであるのださうだ。岡見にも一度それが來た。

『けふ弱りましたよ、山崎さんに一時間ばかりも泣かれて』

或夜歸つてゆくと岡見の妻は言ひ出した。その日山崎はいつもに似ず浮かぬ顏をしてやつて來て、やがて懷中から取り出したのは二十通餘の封書であつた。それは悉く鄕里の父から來たもので、山崎は岡見の妻を相手に一々それを讀み出したのださうだ。

『そしてその間すつかり泣き通しなのですよ。初め可哀想だと思つてゐたけれど後では氣味が惡くて困つた』

その手紙には今日で幾日絕食してゐるとか、そのため役所で書く字を誤つて課長から蹴られたとかいふ事を書いたのもあるし、孝行の道を盡さずば何々といふ風のものもあるし、どうしても歸らないなら寧ろ餓死して永遠にお前を恨むに如かずとかいふ事を書いたのもあつたさうだ。因循で貪慾な、頑固で我利一天張のさうした漢學者のなれのはてを心に描いて、岡見は苦笑したゞけ、妻のいろ〳〵

言ひかくるのに返事もせず、その夜は寝てしまつた。

その次の月、都合よく岡見と山崎との休日が一緒に來た。岡見はそれに氣がついて、特に前日山崎へ葉書を出して、心待ちに待つてゐると、晝過ぎになつてやつて來た。この頃持つて來なくなつてゐた手土産を持ち、剃刀をも持つて來た。緣側で鬚を剃らせてゐると、今迄になくその調子がいゝ。岡見も嬉しく思つた。

『もう大丈夫だ、一軒持てるネ』

と世辭でなく言ふと、

『へゝゝ、まだ〳〵駄目です』

とは言ひながら山崎も心から嬉しさうに笑つた。

岡見の妻も氣を利かせて夕食の膳を賑かにした。病氣も癒つたと云つて山崎も久しぶりに酒を飲んだ。が、矢張り何處となく沈んでゐた。そして耐へてゐた樣にして袂から四五通の手紙を取り出した。そして、それを手に持つて何か言ひかけやうとするのを岡見も待つてゐた樣に直ぐ手を振つて止めた。

『もういゝ。見なくとも僕には解つてゐる。若し君が鄕里に歸つていま習つてゐる藝で親爺さんを立派に救ふ見込があるなら歸り給へ。でなくして若しまた昔の通りの腰辨にでもなる氣なら全然僕は反對する、今までの君の苦心が水の泡になるぢアないか。白髮三千丈の亞流だけに君の親爺さんのは確かに誇張だよ。よし誇張でないにしろ、今の場合その位ゐの苦痛を忍ぶのは親として當然の義務ぢアないか！』

岡見は心から激してさう言つた。例によつて俯向いてゐる山崎の顏からはまた涙が落ちて來た。苦々しくそれを見ながら尙ほ岡見は、

『況して自分の子の奉公してゐるさきへ毎日そんな先拂郵便を寄越す樣な親なら僕だつたら態とも酷めてやるよ』

とも言つた。そして、

『第一、君のそのめそ〳〵がいけない、それをやめないから親からさへ馬鹿にされてゐるのだ！』

とも言つた。

山崎はたうとう兩手で顏を抑へた。たまりかねた樣に次の室から岡見の妻が出て來た。岡見もそれと氣がつくと獨りで苦笑した。そして急に調子を變へて、

『まア止さうネ、それは君としては無理もないだらう、でも僕には以前からさうした……』

と言ひかけて、

『サ、一つ乾し給い、少し言ひ過ぎて惡かつた、あやまるよ！』

さう言はれると山崎は一層強く顏を掩うたが、漸く涙を拭いて盃を受取つた。そして、こちらにお

伺ひしてゐる間は自分もその氣でゐるが、店に歸つて棚に載せてある手紙を見るとまた急に心細くなる、と切れ〴〵に言つた。

『僕の意見は要するにそれだけなんだから、親爺さんの問題は今後君ひとりの考へにしておいて呉れ給へ、そして兎に角いま少し確固するのだ』

と言ひながら、相手の何か言ひかけるのを遮つて、急に岡見は笑顔になつた。

『どうだネ、本所は。剃りに來る新しいのが出來たかネ』

山崎も仕方なしに笑ひ出した。

岡見の妻は暫く側にゐて彼に酒を強ひた。量の深くない彼は間もなくころ〳〵と醉つてしまつた。そしてやがて持ち出されたのは例の「女」の話である。

『どうも困りますよ、自宅の內儀さんにも！』

『どうしてネ』

『どうしてつて貴下、店を閉つてから私だけは大抵毎晩一時間か二時間位ゐ起きてゐて何か書いたり讀んだりするんですが、サテ寢ようと思つて二階から便所へ降りて行くと、內儀さんだけ眠つた風をしながらこれ見よがしに……』

醉つてはゐても妻の手前、淺草で知つてゐるので岡見も彼の斯うした話に當惑した。さうして如何

にもわざとらしく團扇を使つて、眼顏でそれと注意したが、涎でも垂らしさうな相手には一向通じなかつた。

『それかと思ふとまた不行儀千萬にも私が其處を通るのを知つてゐて枕もとに汚ならしい……』

『オイ〳〵、大抵にしないか、もう解つたよ』

と言ひながら、岡見は山崎の顏を突いた團扇で次の室を指した。

『ハッ！』

と言ふと首を縮めて彼は自分の頭を兩手で抑へた。

程なく彼の歸つたあと、耐へてゐる樣に岡見の妻は笑ひ出して、やがて食卓を片附けながら、

『山崎さんはその內儀さんと如何かしてゐるのではないでせうか』

『馬鹿な、その勇氣があつたら先日からの病氣なんか爲やしないよ、馬鹿奴が！』

と投げ棄てる樣に言つて岡見も笑つた。

それは近年になかつた暑さが過ぎて、漸く凉しくならうとする頃で、それからまた暫く姿を見せなかつた。そしてその次に來たのがその歸國の暇乞の時であつた。

子供たちをば戶外に追ひやつたが、枕許に落ちてゐる電報が氣になつて、幾ら力めても矢張り岡見

は眠れなかつた。そして頭が次第に痛んでゐた。いつその事散歩でもして見よう、と思ひ切つて彼は起き上つた。そして妻の留めるのも聞かずに、ぶらりと戸外へ出た。

歩きながらも頭にあるのは、縊死した男の事であつた。郷里に歸つたところで費用からまた技倆から一軒の店を持つといふ事も急には出來まいし、持てばまた喜んで通知してよこすだらうが、それの來ない所を見ると何處か他處の理髪店に職人に入り込んだとか、まごまごすればまた昔のまゝの役所通ひを始めたとか、いづれそんな所に落ちてゐるに相違ない、と彼は歸國以來一度の葉書すら寄越さなかつた故人の事を考へた。そして例の父や家族、または昔の同僚たちからはソラ見ろ、ざまア見ろ、と罵られ、それかと云つて例の小心からそれ等を振切つて上京して來る勇氣もなく、せつぱ迫つて線路に飛び込んだのだ、と眼の前に見る樣にさうした彼を心に描いた。と同時に眼に浮んだのは彼の死態であつた。

岡見の住んでゐるのは東京の郊外で、家のツイ傍には伐り殘された小さな櫟林があり、その林の蔭をば山の手線の鐵道が通つてゐた。汽車はいま貨物列車だけしか通らないが、電車は間斷なく走つてゐた。そして其處で丁度線路が曲つてゐる上に林の蔭の暗みがあつたりするためか、よく人が飛び込んだ。岡見がその家に越して來て以來、まだまる二年と經たぬのに、もう其附近僅か一丁足らずの間で男女五人からの縊死があつた。一度はいままたあつたといふ話を聞いて、岡見も急いでその場へ行

つて見たが、屍體は既に片附けられて跡掃除の砂利をならしてゐる所であつた。カンテラの灯が動いて、がら〳〵、ざら〳〵と掻き均らされる小石の音ばかり起つてゐた。その次の時はまだ夕闇のさう深くない頃であつた。自分の室で食後のたるい身體を休ませてゐると、走つて來た一つの電車が、急にギイ〳〵といふ響を立てゝ停つたのを聞いた。何か起つた、と思ふと同時に彼は家を飛び出して一丁と距つてゐないその場所へ馳けて行つた。櫟林を馳け抜けて、一間ばかり小高くなつてゐる線路へ飛び上ると、丁度車掌と運轉手が身體を屈めて何物かを抱き起してゐる所であつた。何の氣なしにその前まで走り寄ると、一個の人間が——その場では男女の見わけすらよう爲なかつた——拘き起された。そして首から上と肩の一部とがだらりと胴から離れて眞赤に染りながら、岡見の前にむき出しに轉げて來た。思はず後へ引かうとして彼は小石につまづいて横向きに這つてしまつたのであつた。その時に見たその慘らしい、汚い屍體、その記憶が「山崎縊死す」の電報を見るとまた鮮かに彼の胸裡に蘇つて來てゐたのである。歩きながら靜かに種々の事を考へて居ると、一層それが明瞭になつて來た。そして眼の前にさうして死んでゐた見も知らぬ死人の面影が何だか山崎その者でもあつたかの樣にさへ思はれて來た。そしてその醜汚な幻影を見まいとして彼は歩みを停めて身ぶるひをしたりした。

そして、

『馬鹿奴、到頭あんなになつたナ！』

と心の中で幾度か呟いた。

翌日の新聞で、主人の金十七圓なにがしを遺失した、めに自から轢かれたのだと知つたその夜の轢死者——丁度二十歳の若者であつたさうだ——に對してすら彼は一片の同情をも憐憫をも感ずる事は出來ずにたゞ侮蔑と苦笑とを覺えたのみであつたが、それと同じ樣な自殺法をとつた自分の親しく知つてゐる男の死に對しては、更に一層の嫌惡を感ぜずには居られなかつた。その下劣な家族共と共に『ざまア見ろ！』と言ひ度い心をすら覺えたのであつた。何といふ理由があるわけではなかつたが、女の腐つた樣な、牛甲斐もない人間の樣に見えて平常から侮蔑し切つてゐたその性情、特にその意氣地無しに對して、彼は彼自身の性情から自然とさう感ぜずには居られなかつたのである。

電報が來てから四日目の夜であつた。岡見は勤め先の新聞社から寒さに凍えながら歸つて來て、茶の間の火鉢の側に突つ立つたまゝ、口早に、

『今日來た郵便は？』

と妻に訊いた。妻はツイ側の茶箪笥の上に置いてあつた二三の郵便物を彼に渡した。二度ほどその差出人を調べて見て、

『これだけか？』

とまた訊いた。

『え、……、何故？』

と不審がる妻には返事もせず、漸く安心したといふ風に初めて其處へ腰を降して、

『やれ〳〵助かつた、遺書は來なかつたよ！』

と眞實安心したといふ聲で言つた。

『眞實ですねエ、來れば今日來るわけなんですか？』

『さうサ、飛び込んだ晩に出したとすれば遲くとも今日は着くんだ、何しろ助かつた！』

『明日あたり太田さんから詳しく知らして來るでせう』

『なアにが！あの男から何が來るものか、先日の電報が全部よ！』

と言つて岡見は笑つた。太田の筆不精は有名なもので物心がついて二十年餘りも交際つてゐるが岡見はまだ彼から封書一本受取つた記憶がなかつた。大抵は郵便局で書いた樣な葉書のみであつた。それすら年に幾度も來るのではなかつた。

その翌夜であつた。彼は遺書の代りに五六枚を一緒に封じ込んだ新聞紙を受取つた。帶封の裏には何も書いてなかつたが、疑ひもなく太田俊一の手蹟であつた。

『來たナ！』

と思ひながら惶しく開いて見ると、書きも書いたり、三面の最上段に初號活字の見出で、

『青年理髪師の自殺!!!』

として、それに添へた小見出には、

『屍體滅茶々々の轢死!』

『結婚後三日目の慘事!』

『軟文學の惡感化!』

と書き並べ、更に鋭く彼の眼を惹いたのはその中見出として、

『岡見落葉』

と二號活字で彼自身の姓名の出てゐる事であつた。

思ひもかけぬ自身の名を其處に見出したので岡見は一層周章へた。而して忙しく眼を走らすと、事ごとに彼は驚くの外は無かつた。

山崎はS——町に歸ると直ぐ町内に彼自身の理髪店を開いたのであつた。そしてそれに自身の雅號である疎葉を冠らせて山崎疎葉軒と命名した。「知人富豪太田俊一氏及び縣廳奉職中の先輩某々氏等の後援になりし事とて店構へも町内有數の美々しさにて、殊には東京型最新流行の理髪振人氣に投じ……」瞬く間に職人二人を置いても間に合はぬ繁盛を呈したのださうだ。そして半年も經たぬうちに

開店當時の借財をも大半返却し、去る××日世話する人があつて彼の父と同藩士なるR——町某氏の女、美人の聞え高き△△子を迎へて華燭の典を擧げた、とも書いてあつた。更に「斯く人生の黄金時代とも謂ふべき最得意の時に於て何が故に斯る悲慘極る自殺を遂ぐるに到りしか死人口無うして探るに由なしと雖も……」と書き進み、「同人は數年前縣廳奉職中より文學を愛好し、殊に上京後はデカダン詩人岡見落葉の家に出入して一層その趣味癖に耽溺したる形跡あれば不知不識岡見等の惡感化を蒙り、現代流行の厭世思想の毒汁に刺され……」斯る思ひもよらぬ悲慘事を生むに至つたのだらうと推定してあつた。そしてその證據として慘事のあつた附近には一丁の西洋剃刀と一冊の書籍、それは伊國大文豪ダンヌンチオ著「死の勝利」とが發見せられたのでも解ると書いてあつた。「決行は一昨夜××時終列車通過に於て爲されしらしく、終列車が轢死人ありしを氣づかで過ぎし跡を昨曉××時發一番列車が更に轢き直したるらしく……」頭も胸も手も足も殆んど原形を留めぬまでに散々に轢き散らされてあつた、とも書いてあつた。さうして終りの方の家人談といふ中には自殺した日の朝、新婚後三日目の妻△△子は急用があると云つて郷里へ向け出立し、先程電報を打つた所だといふ事が書いてあつた。S——町で發行せらる、新聞は二種あつた。一方は平常から同縣下出身の岡見に故のない反感を持ち、一方は文學種を多く載するだけ好意を寄せてゐた。その後者の方には山崎の歸つた事を土地の文學好の青年たちが宛然「洋行から歸つた博士を迎ふる樣に歡迎し、疎葉軒は一

面彼等の倶樂部然たる觀を呈したり」と書いてあつた。

歸つて來れば餓ゑたる者の樣にして飮み始める酒にも手をつけず、夢中になつて見馴れぬ新聞に讀み入つてゐる岡見の顏を不思議さうにその妻は見てゐたが、やがて彼の背後に立つて行つて自身もその新聞を覗き込んだ。そして、

『オヤ！』

と言つたまゝ、同じく息を飮んで讀み始めた。岡見が二三度讀み返して、漸くそれを投げる樣にして下に置くと待ち兼ねた樣に彼女は言つた。

『い、迷惑ですネ、惡感化だなんて！』

その聲には憤怒が燃えてゐた。

『……』

『御鄕里（おくに）の阿母さんたちだつて大迷惑だわ！』

『ウン、町中の評判になつてるだらうよ』

とは言つたが、他に何かを考へてゐるらしく、その聲には何の力も無かつた。そして初めて氣がついた樣にして眼の前の盃を手に取ると、ぐつ〳〵と一息づつに飮み乾して行つた。

夫婦の間にはこの意外な上に意外な出來事、山崎が開店してゐた事、それが盛つてゐた事、結婚してゐた事、結婚後三日目であつた事、ダンヌンチオを持つて死んだ事、等に就いてそれから永い間ひそひそと談話が交はされた。何もひそ〳〵とするには及ばない事だが、何しろ事が事であつた。それに夜が更けてゐた。彼等の頭上の柱時計は夙うにもう二時を打つてゐた。

『だつて、なぜ死んだのでせうネ、何もそんなだつたら死ぬには及ばないぢアありませんか？』

『サ、俺もいまそれを考へてゐる！』

いつもなら夙うに上機嫌になつてゐねばならぬ筈の岡見にはまだ少しも醉が見えなかつた。平常二日分づつ取つて置く酒はもう殘り少なになつてゐたのだ。實際、彼はいま何とも名狀しがたい一種の衝動に似たものを全身に感じてゐる所であつた。

『窮死！』

それならば何の問題でも無かつた。てつきりそれだとのみ信ずればこそ、彼等は、特に彼はこの知人の死を限りなく侮蔑してゐた。が、事實はそれとは正反對の、まつたく思ひも及ばない事であつた。

『と、すると！』

彼は心の遠方に、ずつと以前に見た幻燈會場に於ける故人の光り輝いた小さな顏の浮んでゐるのを見た。斯うした人間はその得意を極めた時に於て時に特殊な心理狀態に陷る、それであらうかと思つた。

たのである。店は繁昌する、金は出來る、文學者としては持て囃さる、、使はれてゐた身が忽ちに他(ひと)を使ふ、美人は來て添ふ、何として得意にならずに居られやう。況してそれが彼の山崎ではないか！

『然うしてふら〳〵と線路に行つて立つたのかも知れない！』

さう考へてゆくと岡見は知らず〳〵自分の胸の迫つて來るのを感じた。熱い涙が瞼の蔭に一杯に來て溜つてゐるのを感じた。と同時に、何といふことなく、『濟まなかつた、濟まなかつた！』といふ力が胸の底から押し上つて來た。

『さア、お寢(やす)みなさい、今更考へたつて爲樣がないぢアありませんか！』

斯う妻に促されると、

『ウン！』

と言つて岡見は從順に立ち上つた。そして便所に行つた。

長い便所から歸つて來ると敷き並べた床の上にぼんやりと立つたまゝ、帶をも解かうとしなかつた。

『オイ！』

突然彼は妻を呼びかけた。待ち兼ねた妻は彼より先に既に床についてゐた。

『エ？』

といふ彼女の返事は蒲團の蔭であつた。

『奴の死ぬる朝に細君が鄕里へ歸つて行つたのをお前は何と思ふ⁉』

返事は無かつた。岡見のさう言つた聲がいつもの醉つたのとも違つた怪しい調子であつたので、妻は多少驚いたのであつた。

『結婚後三日目だぜ、里歸りといふにも二十里からの所をさう早々に出かくるわけが無い！』

『だつて、……』

とは言つたが、彼女には愈々答ふる術が無かつた。

『俺は彼奴を「不能」だつたらうと思ふ！』

『まさか！』

と言ひながら蒲團から全く顏を出した彼女の顏にはにやりと笑ひが宿つた。

『でないとすれば烈しすぎたんだが、どうも俺は不能だつたらうと思ふ！』

片手に帶を摑んで、まだそのまゝ立つてゐる彼の姿は醉つた時によく見馴れた形ではあつたが、それとも確に何處か違つてゐた。

『馬鹿々々しい、どつちだつていゝぢアありませんか、死んだ人の事を！』

『イヤ、不能だつたとすると……！』

岡見は今度は妻とは反對の側(がは)を向いて床の上へ坐つてしまつた。そして言ひ繼いだ。

『俺は何だか大變悪い事をした様な氣がしてならない！』

眞實、さう言ひながら彼の胸には「悪かつた！」とも「濟まなかつた！」とも「いぢらしい！」ともわけの解らぬ感情が一杯にこみ上げて來てゐたのであつた。（天正七年十二月十二日）

老人

殆んど一面が白い小石の原となつた川岸まで出て來て見て、自宅の二階で毎日眺めて想像してゐたより遙かに水の痩せてゐるのに見海老人は驚いた。淺い水がそれでも清らかに流れてゐる流の底まで一杯に小石が敷き詰つてゐるのだ。以前の滑らかな岩底とは大した違ひだ。

『これでは成程鮎もゐない筈ぢア、第一喰ふ苔が無いわい』

老人は斯う心の中で呟いた。

よし川底が小石の原とならなかつた前としても今は既う十月の末、どんなに遲れた錆鮎だとて居る解はないと承知してゐながらも、徒然な餘りに毎日二階から眺めてゐると、その日光にきら〳〵と輝いた流のなかに、例の滑らかに痩せた敏捷な魚の友を追うて遊んで居る幻影が眼についてならなかつたのだ。で、どうかして一度その川端まで出かけてこの一二年見ずに過した魚の姿をとつくりと見たくて爲樣がなかつた。が、三四丁の坂路を降りて其處まで行く事は、二年越床に就いてゐて漸くこの一二ヶ月家の周圍などを步行する事の出來る樣になつた彼にとつてはなか〳〵の冒險であらねばなら

なかつた。

この夏、まだ鮎の釣れる頃わざ〳〵二階の窓際に椅子を置いて、

『ア、釣つた〳〵、誰かナ、榮ぢやらうの』

と誰もゐない廣い座敷で獨言を云ひながら殆んど毎日眺め暮した時から我慢して川までは降りて行かなかつた。病氣の爲ばかりでなく老いて既に白くなつた指頭に微かに釣竿の震へを感じながらも、ぢつと耐へてゐた。それがこの二三日來、誠に穩かな小春日和が續くと共に酒から出た中風病の彼の身體すら近頃に珍しい快さを覺えた。久しく忘れてゐた樣な痛さ痒さが快く身に感ぜられて來た。言葉少ない彼はひそかに心の中で喜んだ。この分では俺ももう一度はよくなる、さうとすると……、といふ樣な一度はきれいに諦めてゐた希望が自づとまた心の底に起きて來た。さうした種々な事が急にこの老人を元氣にした。そして今日ツイふら〳〵と來るともなくその川原まで來てしまつたのであつた。

水底の小石は此頃久しく水の出ないためにみな一樣に水垢を被つてゐた。それらの上をいだの子やはやあぶらめなどの小さな魚が水を透して射して來る麗かな日光を帶びながら徐ろに泳いでゐた。斯う川が石原になつてしまつてはいづれもうこの壺谷川にも鮎の上つて來ぬ時が來るだらう、と見海老人は圓やかな手近な石に腰を下してそれらの小魚の影をぼんやりと見やりながら考へた。近年この川

上の山から山を樹の深いに任せて濫伐した結果、村の人の曾て聞いた事もない大洪水が一二度打ち續いて押し出して來たのであつた。今まで到る所苔蒸した岩石ばかりから成り立つてゐた壺谷川の川底が一時に小石原と埋つて了つたのはその時からである。從來荒い瀬と深い淵との連續であつたこの谷川は大きな鮎の多く棲むので聞えてゐた所であつた。

廣い川原には一面に陽炎が立つてゐた。鶺鴒が二羽、川原に飛び水際に移りして遊んでゐる。老人の白臘の樣な頰には少女にでも見る樣な薄紅がさしてゐた。頭はまる〳〵と剃られて、鼻の下の濃い髯も短く刈り込んであるが、それは雪の樣に純白であつた。老人の家は代々醫者であつた。見海醫者もこの山の中には惜しい名人として近鄕で立てられてゐたのである。彼の上品な目鼻立が語つてゐる樣に彼は極めて溫和な謹直な性質を持つてゐた。が、唯だ病的な位ゐに酒を嗜んだ。「あん醫者どんに、酒ちうもんがなかつたら喃」と村の人の全てがこの何十年か嘆き通して來た程酒の上では彼は怠けもし、失策つてもゐた。そして終にそのために一昨年の秋から半身不隨の樣な身體になつてゐたのである。

老人は珍しく自分の五體の汗ばんでゐるのを感じた。家に歸るにしてももう少し休んで行く日蔭が欲しかつた。杖を取り直すと彼は其處の路續きに架けられてある小さな橋を渡つて行つた。さほど大きくもない木を二本並べて僅かに表面を削り均らしただけの橋を渡る事はかなり不安ではあつたが、

子供の様な勇氣で彼は微笑しながら渡つて行つた。其處は水際から崖になつてゐて、日蔭ではあるが上から滴り落つる雫のために一寸老人の腰掛けさうな所がなかつた。老人は路を歩きながらでも折々する樣に杖の上に兩手を重ね、その上に輕く自分の腮を當いた。これでも多少の休息は取れるのであつた。

川に向つてさうして居ると、自づと彼の眼には向側の坂上に並んだ自分の家を初め五六軒の百姓家が見渡された。彼自身開けすてて來たままに二階の障子はあいてゐて、強い西日に赤々と照らされてゐる。「今年は梅檀の葉の散るのも例年より遲い樣だ」とその門口に黄いろく染つて立つてゐる大きな樹を眺めながら彼は考へた。收穫に忙しい時なので、いづれの百姓家もみな戸が閉して、寂然として居る。自分の家でも今日妻の留守なことを彼は思ひ出した。

其處へ彼の頭の上から牛か馬を叱る樣な聲が聞えて來た。彼の佇んで居る崖上の森の中に一軒家があつて、其處には彼の若い時からの飲仲間が居るのであつた。

『八隱居は今日は家に居ると見ゆる。』

見海老人は杖から腮を離しながら見上ぐるともなく崖の方を仰いで、呟いた。そして、此處まで來たのだから一寸寄つて茶の一杯も飲んで行かうかと考へた。暫く考へた後。一歩々々と數へる樣にして崖に沿うたやゝ急な坂路を登り始めた。

『んたまア！醫者どんなア！』

老人が杖をつき〳〵その森の中の百姓家の廣い庭に辿りついた時、厩の前に立つてゐた其家の老婆は逸速くそれを認めて喫驚しながら斯う叫んだ。そして兩手して抱いてゐた枯草の束を其處に投り出すと老人の方に馳けて行つた。

『お前やまア、如何したとのえエ!?』

老人は齒のない口を噛み締めながら、顏中笑つて無言にそれに答へた。そして、杖を兩手に持ち直しながら、眼を瞑ぢて腰を伸ばした。

老婆は周章へながらも一番手近な緣側の上を兩手で叩いて塵を拂ひ、老人を連れて行つた。そしてなほ呆れたまゝ一二尺も離れぬ程近く寄つて老人の顏をまじ〳〵と見詰めて立つてゐた。老人は言葉少なに、あまり氣色がいゝので川端まで降りて見た事を話して聞かせた。そして、

『今日は、……家か？』

と四邊を見廻した。

『否ネの、矢張り山ばい、そつでむ、今日は早う歸るち言よらしたかる、もう直きぢやろばい、……まア、そつでむ、善うこす喃、此處まぢも來るごつならしたわ喃！』

老婆はさう言ひながら自づと湧いて來る涙を禁むる事が出來なかつた。老人はまだ赤い頰をしながら、老婆の足許の地面を見詰めてゐたが、あてにして來た相手のゐないのに落膽もし、先刻の聲を聞き違へた事を苦笑もした。

老人のいかにも疲れた樣に默つてゐるのを見ると、老婆はまた惶しく涙を拭ひながら家の中に入つて行つた。そして內から老人の腰掛けてゐる背後の障子をあけて、

『マ、こつち上らつしやり、いま、火を焚くわの』

『ウム、まア、構はじ置け、直き歸るわ』

『マ、そつでも、茶を一杯飮うぢ行かつしやり、隱居ももうぢき歸るわの』

老婆はまだうろ〳〵する位ゐ驚きが止まなかつた。それでも板敷の茶の間に蓙を敷いて、大きな圍爐裡に火を焚きつけた。

『サ、上らつしやいよ、いま直き湯が沸くわの』

老人も茶は欲しかつた。そして、久しいこと坐つて見ぬ其處の正座であつた。身體をねぢ向けて疊一枚敷よりもまだ廣さうな圍爐裡を眺めてゐたが、やがて這ふ樣にして緣から上つてその蓙の上に行つた。そんな場合でも膝一つくづさず、きちんと正座した老人を今更の樣に眺めながら、また老婆は眼を拭いてゐた。

『眞實喃、善うこすさうしち其處に來て坐つて吳れさしたわ喃、隱居が歸んで來て、どんげまア喫驚するこつか！』

老人は煙草が欲しくなつたのであつたが、家を出る時持つて出なかつた。で、無言のま、兩手を膝に置いて湯の沸くのを待つた。枯枝を一抱へ持つて來て焚きつけられた鑵子の湯は、それでも程なく音を立て始めた。その間に老婆は土間に降りて味噌漬の柔かさうなのを取り出して皿に盛つて來てお きながら、茶を入れた。さも旨さうに老人が首をちゞめて湯氣を吹き〳〵飮んでゐるのを見てゐた老婆は、半分立ち上りながら同じく齒のない顏で笑つた。

『如何爲うかい喃、一杯沸かそかいの』

『ウ……、酒か？』

『一杯ぐれなら可かつどがの、お末さんもさう云うちよらしたが、お前やあそげ病うし寢ちよらした時も每晚飮ましたげなぢア無エのえ？』

『ウ、少つとづつア飮まんと俺が身體は保てんわ……』

と返事をしかけて、

『でむ、今日は止めう、飮むと、歸ねんわ』

笑ひながら言ひ足した。

『何が喃、いまに隠居でむ清八でむ歸んで來たらお前宅まぢ背負しち、やるが喃、まア一杯飲うぢ行かつしやり』

茶で咽喉をうるほすと、さういはれずとも實は老人も飲み度かつた。久しぶりの運動と出歩いて見た滿足とで、常にもまして飲みたさが萠してゐたのだ。彼はものも言へない位る重態で寢てゐた時でも一二杯の酒をば毎晩缺かさなかつた。醫者も家族も、これ程に好きなものを一二杯位ゐは毒でもあるまいと云つて強ひてそれを禁めもしなかつた。それにはまたとても駄目なものならあれ程に云ふものを飲ませぬのも不憫だといふ意味が含まれてもゐるのであつた。十中八九駄目だらうと同じく醫者で隣村に開業してゐる彼の病氣は、豫期に反してそれこそ薄紙を剝ぐ樣に次第によくなつて來た。それ見ろ、といふ氣で彼は次第に每晩の——さすがに病氣前の樣に朝晝晩とは飲まなかつたが——杯の數を增して來て、此頃では一合か一合五勺の酒をば平氣で飲む樣になつてゐたのである。

にこ〳〵してゐる老人の前にやがて大きな杯が置かれた。

『自宅にヤ、お前宅んごつ澄んだとは無エトばい』

さう言ひながら藥罐のまゝでどく〳〵と濁酒を注いで、老婆自身も一杯手に取つた。

濁酒はまた老人にとつて珍しいものであつた。病氣以來、二年越といふものは自宅を離れて飲むの

が今日初めてであると共にこの白い酒も初めてであつた。齒莖で一度嚙み締むる樣にしてやがて飲み下す味が文句を言ひながら飲む自宅のものとまた別な風味を持つてゐた。彼は一口飲んでは口を閉ぢたまま小さく舌打をして、その風味を味つた。

程なく、醉が出て來た。一度褪めた老人の頰の色は再び薄く萠して來た。この土地で入營した若者共が除隊紀念に村に配るを常とする聯隊旗のついた大きな杯で四五杯も重ねて飲むと、その聲も次第に力づいて來た。そして山の事田畑の事などを老婆に訊きながら、ぽつ〳〵何彼と話し出した。田舍に生れたに似合はず、若い時は眼立つて色の白い、きめの細かな性質であつたが、七十に近い歲になつてもまだそれが失せずにゐた。額の豐かな、下ぶくれのした頰の邊にいかにも福々しい相が現はれてゐて、生來の無口が一層それを上品に見せた。が、酒が廻つて來ると彼の口數も自づと增して來るのが常であつた。高々と聲に出すではなかつたが、笑上戶の方で、思ひもよらぬ戲談などを言つては自ら笑つた。

さういふ姿を見るにつけても老婆には述懷が先に立つた。

『眞實喃、斯んげ快うならしたとを見るにつれちエむお末さんの苦勞は眞實大概のこつぢァ無かつたわ喃』

と燃えすさる枯枝をさしくべながら沁々と言つて、やがて老婆は顏を上ぐる樣に一層聲をひそめて

言つた。

『そつでむ、お前ももう大丈夫ぢアかる、こりかるお末さんにも樂をさせにや喃、大事ばい』

お末とは老人の妻の名であつた。

老人は一心に鑵子の下に燃えて居る火先を見てゐたが、老婆の言ふのに答ふるともなしに、

『來春、すこし暖うなつたら俺はひとつ東京まで行て來うと思ふちよる……』

と言ひかけたが、何かを考へ出したといふ風に、さきを言ひ繼がないでやめてしまつた。

『東京に、え?』

老婆は耳を疑ふ樣に首を傾げた。

『ウム、……』

『秀坊の所が解つたとの?』

『……、解るには解つちよるが、……兎に角まア行て見にや解らん、俺が行けば直き解る事よ』

と言ひ捨てゝ、眉をひそめながら笑つた。眉にも白い毛が大分混つてゐるのだ。老婆はその寂しさうな笑顏を見ると、返事を爲兼ねてたゞ默つて俯いてしまつた。

老人は、然し、自分でも不思議な位ゐもう少しその話が續け度かつた。今日の彼の氣色のいゝ、故もあつたらうが、漸く此處にその話場を見出した樣な近頃にない安心した氣持で、續けて行き度かつた

のだ。

『彼も頭から馬鹿ぢァ無えから、あんげ爲ちよつとにや、何か考えがあつてからの事ぢやと俺は昔から思ふちよる、それも知らんどつて、ヤレ、どうの斯うのと彼が事を頭からくさし居る奴が澤山居るが……』

老人は言ひさして、唾のつまつた樣に止めてしまつた。そして急いで盃を取り上げた。眞實この物靜かな老人が斯う勢ひ込んでものを言ふなどといふのは近年殆んど見た事のない事なので、老婆はただはら〳〵する樣な氣持ばかりで、いよ〳〵返事も爲難く、たゞ氣を揉むだけであつた。

老人は盃を老婆にさしながら、調子を變へて強ひて笑ふ樣に言ひ繼いだ。

『今見ちよれ、汝共が魂消る樣な偉え者になつて歸んで來るからの、ハヽヽ』

老婆も惶てゝ一緒に笑つたが、それでもたゞ、

『眞實喃……』

といふの外はなかつた。

『彼も俺共が事を思はんぢや無えどが、何か一旗擧げん事にや、ものを言はん腹ぢやと俺は睨うぢよる、何しろあんげな事があつたものぢやからの……』

醉つたと云つてもまだ僅かな酒である。老人は自分がいつになく口輕くなつてゐるのに氣がつきな

がら、話をやめるのは惜しかつた。

『何しろ彼も見懸に似合はん強情者ぢやつたからの、……お末にでも似たもんぢやろ、ハヽヽヽ』

平常の様に濁りのない笑聲になつたのを聞くと、老婆も漸く心から笑ひ出した。

『ハヽヽヽ、さうぢや、お前に似た所は何處ぢやろかい』

『是よ』

と老人は盃を取りあげてその笑つた眼をやつた。

『まこち喃、幼時から飲みよらしたの、やんがち父親より立派な飲手にならすど喃、もうなつちよらすかむ知れんばい』

『ウム』

と大きく點頭いて、

『まだ手紙を呉れよつた時に、よう酒の事が書えちあつた、今日は何處其處で何といふ酒を飲うだが速う父上と一緒に其處で飲み度いものぢやと喃、よつほど彼も好きぢやろわい』

それを聞くと、子の無い自分達が子の様にして可愛がつてゐたこの老人の一人息子の面影が醉つた老婆の心にはつきりと浮んで來た。それと共に涙がまた浮んで來た。

『何というても東京ぢやからの、どんげな酒でも有らうわい、俺共が大阪に修業に行ちよつた時ブラ

ンデンといふ酒をよう飲うだが、恐しい強い酒ぢやつた、……』

永い間、ことに病氣に罹つてから幾つとなく心の裡でこさへあげておいた空想の一つが、いま老人の胸の底で明るい〳〵影を作つてゐるのであつた。息子の事とも、世の中の事とも全然懸け離れたた だ〳〵甘い味が其處にあつた。老人はいまそれを貪りつゝあるのであつた。

そして、半ば夢から覺めた様に身體を搖つては、

『來春は行て見よう』

と呟いた。

二人ともゝ、加減に醉が廻つてゐた。障子に射してゐる日影が餘程薄くなつて來たのにも氣がつかぬ風で、たゞ向ひ合つてゐた。

其處へ厩の馬が急に大きな聲で嘶くと、何か重いものをどしんと置いた音がした。慌てゝ立ち上つた老婆は草履をも履くや履かずに土間に降りて行つたが、まだ彼が何も言はぬうちに一人の大柄な老爺がのつそりと裏手の戸口から入つて來た。そして圍爐裡の正面に坐つて居る老人を見附けると、ぴたりと立ちどまつた。

『おう！』

と唸る様に言つて、窺く様に老人の顏を見詰めながら、

『お前や、マ、どうしたの?』

『ウーム、歸んだか』

と見海老人はまだ夢の中の様な聲で言つて薄暗い土間の隅に立つてゐるその大きな聲の主を探す様に首を延ばした。

老婆は急にはしやいだ聲でこの意外な珍客の事を老爺に話して聞せた。老爺は眼を瞶りながらそれを聞いてゐたが、漸く鉢巻を取ると泥だらけの兩手を上り框についてお辭儀をした。

『行かう〳〵と思ちよつてむ、なか〳〵思ふごつ行けざつたが、……まア、そつでむ、そんげもう快うならしたか喃、それは〳〵。マ、おめでと御座つた、……、何かの、此處まぢ御座らしてむ、何うも無えかの?』

『ウム、マ、何とも無えごたる』

老人は何だかきまりの悪い様な氣持でこの幼友達の顏を見た。老人よりこの八兵衞隱居の方が二つ年上で、二人は五つ六つの時から可笑しい位る仲が好くて、いつも村の他の仲間から水をさゝれつゝ大きくなつて來たものであつた。今年、老人は六十八、隱居は丁度であつた。

隱居は其儘其處に腰かけてしまつた。山裝束を着換へるのも、草鞋をとるのも面倒臭かつたのである。そして手も洗はずに老人のさし出した大きな盃を受けた。老婆は急いでそれに酌いだ。急に忙し

く無言のまゝに盃が二三度往復したが、その間にも老人は待ち受けたこの友達の顏を見ると急に何となく氣の落ちつかぬのを感じた。そして、障子の日影の消えかゝつてゐるのにも氣がついた。

『俺は、もう、歸なう』

『……、何言うの、こりかるぢアねえの』

驚いた隱居は不思議さうに立ち上つて、泥だらけの襤褸帶を解き始めた。

けれど老人も其時既に立ちかけてゐた。そして、埒もなく前によろけて板の間に手をついた。老婆は驚いて抱き起したが、老人は笑ひながら老爺の方を見返つて、

『八爺、送つて行け』

と言つた。八爺も安心した樣に口をあけて笑ひながら、また其儘帶を締め直して、

『此處い御座い、此處かる背負ち行くわの』

とその岩疊な背を老人の方に向けて背後に兩手を延べた。

老人は否みもせずに笑ひながら其處まで老婆に手を取られて行つた。

『何か、紐でむ遣ろかい』

老婆は心配相に言つた。

『なアにが!』

と八爺は嘲る様に言ひながら、その時既に彼の背に子供の様に輕々と負はれて居る老人を振返つて

『久しぶりぢやのう！』

と笑つた。他處で二人で飲んだ後は老人は大抵斯うして負はれながら送らるゝのが近年の習慣になつてゐたのだ。老婆は庭に驅け降りて老人の草履や杖を八爺の手に持たせながら、なほ不安さうに二人のあとに隨いて行つた。

もう全く日暮であつた。森はづれから見る向岸の村には暮靄が薄く懸つてゐた。がつし〳〵と八爺は崖の路を降りて、程なく橋の所に來た。

その時恰度向岸の川原から一人の小柄な老婆がせか〳〵とこちらへ歩いて來たのであつたが、老爺たちが橋にかゝつたのを見出すと、彼女は頓狂な聲をあげて、

『まア、八爺さんぢア無えどかい！？』

老爺もそれを知つてゐた。そして、たゞ、

『お末さんの！？』

と答へた。

『まア、大概お前の宅た思うちよつたけんどのう。……』

と言ひながらそわ〳〵と近づいて、

『まア〳〵忝けのござつた、……、貴郎歩けますどが』

と老爺に負はれてゐる人に手をかけ乍ら言つた。彼が何か答へ樣とするのに被せる樣にして老爺は

『なアにが！こん儘お前宅まで連れて行こ、そん方が速え』

『さう喃。そんならそんげして貰はうかい、』

と言ひ〳〵老爺の手から杖と草履を受取つた。

『お末さんかのう！？』

此方からは既に薄暗くなつてよくは見わかぬ河岸の崖の蔭から斯うした聲が突然聞えて來た。

『アラマア、お萬かア、汝も其處に來ちよつたつかえ——！』

と此方の老婆は驚いて答へながら水際まで小走りに歩いて行つた。

『今日はまア、魂消たわ喃！』

『そうぢやつたろとも、……、いろ〳〵また忝けの御座つたよ』

『いんネ喃、そつでむまア斯んげ快うならしち善かつた喃』

『オイ喃、……』

何か言はうとしたが、老爺たちが既うどし〳〵と歩み出したのを見ると急に調子を變へて、

『そつぢア、また逢はうの、爺さんをば借いて行くどよ』

と言ひ置いて二人のあとを追つた。

その翌朝、心配してゐた程の疲勞も出ず、見海老人は元氣よく床を出た。

『ソラ見よ、俺ももうこれから大丈夫ぢや！』

自慢を言ひ〳〵膳についたが、食事は流石に進まなかつた。

その朝は暖いを以て知られた九州南部の其處の村にも秋らしく寒さの感ぜらるゝ日であつた。老人は型ばかりの朝餉の箸を置くと、また暫く床に潜つてゐた。が、次第に戸外の日光の強くなるのを感ずると、矢張りぢつとは寢てゐられないで起き上つた。

正午近い頃であつた、彼は庭先にある大きな柾檀の落葉を掃いてゐた。幹の直徑三尺に餘つてどつしりと枝を張つたその老木の落葉は、二日も始末をせずに置けば四邊の庭から石段から屋根から、庭に續いた小さな野菜畑を眞黄に染めて了ふのであつた。その日は既う一頃の樣にはなかつたが、それでも立ちつ蹲踞みつ病人爲事に專念に掃除をしてゐる老人の前後に折々小枝の樣な大きな葉がばさりと音を立て、落ちて來た。

もう少しでその掃除の終らうとする頃、庭から東に當つて日のよくさしてゐる岨路を馬に乘りながら降りて來る人影を彼は見附けた。その路はとろ〳〵と三町ばかり坂を降りて來て老人の家の門を過ぎ、ずつと村の方へ續いてゐるのである。暫くそれを見てゐると、箒を持つたまゝ老人はそゝくさと勝手口の方に廻つて行つた。そして、

『水、水』

と呼んで、老いた妻が手洗水を持つて出るのを待ちながら、

『眞卿が來たぞよ』

と囁く樣に告げ知らせた。

『……？』

老婆は脚のついた小さな手水盥を其處に置くと、ちよこ〳〵と庭先の野菜畑に近寄つて左手の岨路を見上げたが、その時はもう馬と人とは坂を降りつくさうとする所であつた。

『ど、ど、……！』

植込の蔭になつた門前に、やがて馬をあやす聲が聞えて、洋服を着けた五十餘りの中老人がいま掃かれたばかりの石段を登つて來た。急いで手を洗つた見海老人はその時室内に廻つて玄關の障子を開けひろげながら莞爾々々と立つてゐた。其處に勝手の庭からは手を前垂で拭きながら小走りに彼の妻が出て來た。

兩人がさうして立つてゐるのを見ると、こつ〳〵と登つて來た洋服の老人はや、驚いた樣子で立ち

上つたが、

『や！』

と元氣よく言つて、惶てゝ古びた山高帽をとりながらどちらへともなく頭を下げた。

程なく二人の老人は奥座敷の床を離れた庭に寄つた方に向ひ合つて酒を始めてゐた。蜜柑や柚子や山梔子などの植込を透して白々と流るゝ溪が其處からは眞下に見下された。南向きの軒から辷つた日影が、うす赤く其處の古疊の端を染めてゐた。

二人は二人きりの兄弟であつた。兄は穩和一方、弟はなか〳〵覇氣に富んで、それ〴〵の容貌もまた正直にそれを表はしてゐた。亡くなつた二人の父は兄よりも弟の覇氣を愛して、熊本から大阪京都と出してやつて醫術の修業にも特に弟には念を入れた。そして免狀をとつて歸つて來ると其處よりは三里餘も城下寄りの、附近に有福な村として知られてゐる山田村といふのへ本家よりはずつと大きな邸宅を建て與へて開業させたのであつた。そんな事から村の者共の間には折にふれてはあれこれと事あれがしにこの小田一家に關して評判が立てられてゐたが、當の兄弟同志は可笑しい位る仲が好かつた。お互ひが四十、四十五、五十歳と年の進むにつれてその交情は益々濃くなつて行つた。兄は解もなく弟を贔屓にし、弟はまた他を屁とも思はぬ性質の癖にこの兄だけをば例外として尊敬してゐた。

どうかして三月か半歳も出逢ふ機會がないとどちらからかゞわざ〳〵出向いて行つて半日一日、時によると二日がかりで一緒に時を費す事があつた。兄はもとより寡言、平常は多辯な弟も兄の前に出ると自づと言葉少なになるのが常で、何の話を爲合ふではないが双方とも唯だ酒が好きで、逢ふから別れるまでちび〳〵と盃を嘗めて、その間はどんな事があつても殆んど座を立たなかつた。はては「醫者どん兄弟を出逢はしたら二個村の病人な上つたりぢや」と村の者が愚痴をこぼす樣にもなつた。それで、先來健康で風邪藥一つ飲んだ事もない樣な兄の方が急に一昨年中風症に罹つて倒れた時など、弟の驚きは見るも氣の毒な位るであつた。發病當座毎日三里の山道を自身で通つて來るのみならず、遠く城下町の方からも自分の信用してゐる先輩を連れて來て診察させたりしたのであつた。幸にその病氣が最初案じた程でなく、急に如何といふ事の無いのが解ると弟の兄を見舞ふのも一週間越となり半月目となりして、此頃ではかれこれ三月あまりもやつて來なかつたのであつた。そして久濶に來て見ると人傳に聞いて想像してゐたより遙に兄の元氣なのを見て、弟は涙ぐんだ程に喜んだ。座に上つた挨拶がすむや濟まぬに兄の顔を見詰めながら大きな聲で、

『これなら大丈夫、兄貴、お前ももう一度は人間にならる、わい！』

と言つた程であつた。そして嫂にも心から祝ひを述べた。「これもみんなお前のお蔭なのだよ」と言つて嫂はまた改つて長い間の禮を言つたりした。

然し今日突然弟の來たのは、單に兄を見舞ふばかりではなかつた。金を五十圓二三日の中に心配して吳れないかといふ賴事を持つて來たのであつた。場所がい、だけ收入は兄の三倍もあるのであるが息子の學資や其他一體が派手好で、山氣に富んだ弟の方は常に少からぬ借金を負つて暮してゐた。兄に無心をしたのも既う數へ切れぬ程あるのであつた。

『フム！』

弟のその話を聞き終ると兄は急に顏を曇らせて目を反した。

『俺も既うこれを送つたら、どんげな事があらうとも二度と金をば送らぬ積りぢや、今度も餘程送らずに置かうかと考へて今迄打棄つて置いたのぢやつたが、昨日の電報の樣に若しそれでつまらぬ所へ行くやうになるとのう……』

兄の樣子を見ると弟はまた惶て、斯う附け加へた。彼の髮はまだ黑々と艶を持つて、や、角張つた頭の眞中から分けられてあつた。髯も眞黑で長さは三寸の餘にも及び、圓く輪を作つた風にその血色のい、唇を圍んでゐた。

『では、何か、その金を送らんと善司は監獄にでも行かんならんと云ふのか？』

『能う解らんが、先日來た手紙と云ひ、昨日の電報で見るとどうも左樣いふ事らしいのぢや』

『フーム、困つたのう！』

思はず兩膝を搖つて、彼は深い溜息を漏らした。弟も所在なげにガツシリと坐つた身體を動かした。

『また瞞着かも知れんが、さういふ風ならもう一度だけは送つてやらにやなるめえ、送つてやつて兎に角鄕里へ一度歸んで來る樣に云うてやるが可え、いつまでもさういふ風なら他國へ出しておいても あかんわい』

『俺もさう思ふちよる、歸んで來れば藥局の手傳位るは出來るぢやらうと思ふからの、その方が兩方の爲ぢやらうばい』

と自づと調子を高めて言つたが、また低聲に兄の顏を見ながら、

『如何ぢやらうの、金は出來うかい？』

『さア、ナ、俺が所には一文も無えが、婆さんにさう言うて川向うの八兵衞隱居の所にでもやつて見うかと思ふちよる』

『姉女には行て貰ひ度う無えがの、……、餘り度々ぢやからの、どうも姉女には賴まれんわい、……、兄貴、お前ちよいと行て吳れんかの』

『フーン、俺がか』

見海老人はまたきちんと揃へてゐる膝を搖つた。そして彼はこの近年、殆んど廿年以上自身に金を借りに出かけた事のないのを思ひ出してゐた。彼の家も近年では次第に貧しい暮しを續けてゐたが、

彼の妻が並ならぬしつかり者で、勝手向の事から藥種商との取引、東京に出してあつた息子の學資金の送達など一切彼女一人で引受けてやつてゐた。で、老人自身は自分の家にどれだけの借金があるのか、誰から借りてゐるのか、折々妻からの話をば聞くもの、殆んど知らぬと云つてい、位ゐであつた。世間の者も亦た好々爺の老人より話のよく解る、遣繰の確かな老婆を相手にするのを喜んだ。老婆は斯うして自分の家の事ばかりでなく他の人々の貸借の仲にも立ちまたは村で起さるる無盡の世話人などにもなつたりしてゐた。その老婆は自分の義弟の眞卿醫者を甚しく嫌つてゐた。勝手坊、横着者、威張屋、さうした塊の様にも思つてゐたのである。義弟の方でもそれをよく知つてゐた。そして鼻つ張の強いにも似ず、この老いた嫂に對しては一目も二目も置いて對してゐたのである。今日も家を出る時にはよく〳〵の思ひでこの苦手の嫂に頭を下ぐる覺悟で出て來たのだが、來て見ると案外にも兄が起き出してゐたので、忽ち腰が折れてこの兄によつてのみ事の成就を計らうとしたのであつた。

『兎に角行つて見う、大概出來ると思ふがの、……、昨夜も隱居は俺を送つて來て遲うまで飲んで行つたが、近頃木炭や椎茸の値がい、ので大分溜めたらしいからの』

と弟を慰むる様に言ひはしたが、然し此頃ではあの強情だつた隱居も大分婿の手前を兼ねてゐるらしいので話が面倒かも知れぬと心の中で思つた。それに五十圓と云へば大金なのに弟が何の抵當をも持つて來てゐぬらしいのが氣になつた。抵當に入れやうにも早や何一つ無いのに相違ないと思ふと、

改めてそれを弟に訊いて見る勇氣もなかつた。兎に角自分が行つてみる、そして若し駄目の様であつたら更に妻に賴んで何とか才覺して貰ふ、どうにかして弟のこの依賴をば成就をしてやりたいものと老人は固く心で決めてしまつた。そして八爺には今日の夕方逢ふこと、結果をば明早朝使を立てる事にきめてその話をば終つた。

『秀夫が事は解つたの？』

自分の方の話が片附くと弟はや、安心した風に盃をとつてゐたが、やがて突然斯う兄に問ひかけた。

『ウム、……、まだ解らん』

兄は呟く様に答へた。

『それも困つたもんのう、矢つ張り警察の方に賴む方が可うは無えかの』

『ウム』

斯う言つておいて、暫く彼は他處の方を見てゐたが持前の靜かな調子を一層低くして、

『この分では大概俺も大丈夫と思ふから、來春になつたら一つ東京まで行て見うかと思ふちよる』

それを聞くと弟は驚いて兄の顏を見た。そして二人は探り合ふ様な眼を見合せてゐたが、弟の何か言はうとするのを遮る様にして見海老人は言ひついだ。

『俺が東京に行けば先づ大隈伯爵の學校に行て見る、さうして彼の出て居つた學級を受持つて居らし

た教員に逢うて、その人にも訊いて見、またその人から彼の親しうしちよつた友人の名や所を調べて貰うてその友人達にも逢うて見うと思ふちよる、……』

老人は靜かではあつたが、段々熱意をこめて言ひ繼いだ。

『さうすれば同じ學問の道の教員なり友人なりにまで隱して居るとは思はれんから、彼の居所は直き解らうし、それが解つて逢へさへすれば能う彼の心持も聞いてみて、話の筋道が立つちよりさへすれば何も既う彼の云ふ通りに任せて見うと思ふちよる、……、その女と一緒になつちよるならそれとも逢うち見て、公然の夫婦にしてやつてもいゝからの、……、どうしても東京でなけりやならんと云ふなら東京で氣儘に精一杯勉強するも可からうぢや無えか、どうせもう田舍に歸んで來ても始末はつくめえからの』

思ひもよらなかつた兄の話に弟はただ驚きながら默つて聞いて居る外はなかつた。そして

『さうの、然う行けば善い事ぢやが、……、第一お前やその身體で東京まで行くるかの』

『行くると思うちよるが、の、……、來春まで待つて見てどうしても行けねエ様ぢやつたら諦むるが、それども手紙で學校、教員それから友人と、段々その様な事を訊いてやるのぢや、さうして此方の心持が能う彼に飲みこめさへすれば彼からまた何とか云ふて來るぢやらうと思ふちよる、……、一遍話を爲に歸んで來て呉る、と可いとぢやが、のう』

老人は話し終つて暫く何か考へてゐたが、やがて寂しさうに笑ひながら、

『俺が今まで秀夫の事を訊いてやつたのは皆鄉里から出た彼の友人ばかりぢやつたとぢやが、その手合と秀夫は何でも喧嘩か何か爲ちよると俺は思ふとるのぢや、その手合は小學校でも中學校でもみな秀夫と學問の上で張り合うて來て大概彼に敗されたとばかりぢやからの、それで東京で秀夫が何か一つ失策ると皆が寄つて集つて彼をこなすとぢやらうと思ふのぢや、先日の新聞に出た秀夫が事ども、その手合の仕事に違ひねエと俺は思ふとる……、秀夫はまたあんげな癇癪持ぢやからさうなれば故意とにも怪しな事を爲るぢやらうと思ふのぢや』

さういふ事までこの兄が考へてゐるかと思ふと、弟は笑ふにも笑へず、たゞ「フン、フン」と聞いてゐた。そして心中では或はさういふ事があるかも知れんとは考へてゐた。

其處へ山芋汁を大きな摺鉢に入れたまゝ老婆が運んで來た。

『如何しなつたとネ、今日は一向に德利の捗が行かんごたるが……』

とにやゝ笑ひながら、

『また何ぢやろネ、上等息子の評判ぢやろネ、……、善司が如何か爲やせんど?』

と意味ありげに義弟の顏を見た。

洋服の老人は惶てゝ長い髯をしごいて、

『イヤ、ナニ、いま兄貴から秀夫の話を聞いてちよつた所ぢやが、……、お互ひ眞實困つたもんのう』

『もうあんげな奴が事う何とも思ひなんなと始終云ふちよつとぢやけんど、なか〳〵こん人は諦めが出來ん風で困りますとよ』

『馬鹿、汝どもに何が解るか、……、秀夫が性根を知つちよるとは俺ばかりぢや！』

老人は突然大きな聲で斯う言つて、顏をあげながら、音のする位ゐ膝を搖つた。

この老人達に一人づつの男の兒があつた。弟の息子が年長で、今年もう三十歲を二つ三つ越えてゐた。幼い時から怜悧者と云はれ、父親もそれが大自慢で、二十歲にならぬうちに一人前の醫者にすると吹聽しながら正式な道も踏ませず、大阪の或る塾に入れた。學費などをもどし〳〵と送つてゐたが息子は其處でいち早く酒を知り女の味を覺えてしまつた。それから京都に行き、岡山に行き、今は次第に鄕里に近い熊本まで來て醫術修業を續けてゐるのであるが、いまだに前期の試驗をすら通つてゐなかつた。其間彼は實によく金を遣つた。世間の手前意地になつて父親もその金を送つてゐたのであつたが、殆んど全部そのために家邸まで抵當に入れて了つても尙ほ何の效果のないのを見ると、流石に落膽した。そしてこの上はせめて前期の免狀をとる迄藥局生なり何なりして自分でやつて見るがよい、こちらからはそれ迄一切送金しないからと言ひ渡したのであつた。それから既に三年近くも經つ

て居るのだが、矢張り何かの口實の下に絕えず送らせられてゐた。今度もその一つであつた、そして今迄は病氣とか盜難とかの理由で送金を求めて來たが、今度は或る義理の悪い金を遣ひ込んだといふのであつた。

『お前宅んとはそれでも金を送れ〳〵言はんだけでもいゝわの、俺がとはもう如何もならん』

嫂に盃をさしながら、自づと出る愚痴を漏らして、眞卿老はハッと思つた。

『送れと云ふてもお前宅と違つて鼻血も出ん事を知つとるかの事ぢやわの、そして何かといふと直き喧嘩腰になつて唯だ一人の父親の病氣をも知らん振して歸んでも來ん事を考ゆると業が沸いてならんがの』

『それは彼が知らんからぢや、彼には俺の病氣は知れとりやせん！』

『知らんちうのが嘘の始りよ、何本も行た手紙にみんな手前で附箋をして返し居るとぢや！』

見海老人には早く二人の娘があつて唯だ一人のいま東京に出て居る息子はずつと遲れて彼の四十二歲の時に生れたのであつた。拾ひ物をした樣に喜んだ彼は小學校すら村のには出さず、十里から離れてゐる城下町の大きな學校へ入れ、やがて其處の中學校へ入れた。小學も中學も息子の成績は頭拔けてよかつた。ほく〳〵喜んだ老人は中學から直ぐ正式の醫學校に入れて、天晴れ立派な醫者として自分のあとを繼がせる積りでゐた。村の者もそれを喜んでゐた。さうしてその醫學校の學費は村一帶から

出資する樣にして、そのため一つの無盡が起さるゝ事になつてゐたのである。所がその中學の卒業式の濟んだ日、例年通り祝賀會が開かるる事になり、息子はその會の幹事をする事になつてゐた。その年が恰度日露戰爭の開かれた頃で、中學の校長はその息子を呼んで、例年ならば今日大いに酒でも飲んで賑かに祝ふ解だが、斯うした時でそれをば遠慮するがよいと思ふから酒をば止して單にお茶と菓子とで會を開く樣にと言ひつけた。承知して校長の前を退いた息子は、その日の會場で校長から言はれた通り、時節柄お茶だけで我慢して頂き度い、その代り腹の破るゝ迄飲んで呉れと挨拶して大きな番茶の土瓶を各自の前に配つた。その中には冷酒が一杯に湛へられてあつた。さうした事をしておいてその翌日彼は唯だ一人こつそりと附近の港に出て其處から汽船に、神戸から汽車に乘つて三日ほどか、つて東京に來てしまつた。そして鄕里へ手紙を出した、私はどうしても醫者をする氣になれないから矢張り豫てからお願ひして居つた通り生來好きであつた文學を以て一身を立て度い、然し父上の意向にない學問をするのに父上から補助を受けては心に濟まぬから今後一切構はないでおいて呉れ、其間ずつと不孝の狀態を續けるであらうがさう永い事とも思はぬから許して呉れ、と書いてあつた。それを見た父親は驚きと憤りとに氣絕する程であつた。そのうちに息子を特別に可愛がつてゐた中學の或る敎員が、その事を聞き知つて態々村まで訪ねて來て猛り立つて居る父親を說き一方には東京の息子を諭した。本人の嫌ひな修業を强ひる事は中途でどんな間違ひが起らぬとも限らぬ——これが父

親には烈しく響いた、自分の甥の不始末を見てゐたからである——また苦學して好きな事をやり上げようと云つた所で思ふ樣に行くものでないと双方を說いて、終に父から學費を出す樣にして息子は早稻田大學の文學科に入學する事になつたのであつた。それには斯ういふ條件がついてゐた、學校を卒業したらば父母在世中だけでも鄕里に近い地の中學なり師範學校なりの敎師をして父母に仕ふる、その傍ら自分の好きな事を勉强するといふ事であつた。三年ほど無事に過ぎて、後一年すれば卒業するといふ時になつて或る時突然息子から自分は斯ういふ女と結婚したいから承諾して呉れと賴んで來た。その時既に村の或る家の娘を自分の嫁に貰ふ事に下相談が出來て、其家から學資の幾分をも出させてゐた親達はまた驚いた。叱りつ賴みつした手紙を息子に送つてその返事を待つてゐると、矢張り自分が間違つてゐた、卒業しても田舍へ出てゐては自分の一生の事業に狂ひが出て來る懼れがある。何卒兵隊にとられて戰場にでも行つてゐる氣で何も彼も暫くの間自分の事をば見捨て、置いて呉れ、といふ手紙を受取つたのであつた。追懸けてこちらから手紙を出すとそれは受信人轉居先不明の付箋がついて戻つて來た。そしてその事があつて程なく父親は中風で倒れたのであつた。

『苟くも郵便局といふものが、そんげな不都合を働かせて耐るか！』

老人はまた聲を荒くして妻を叱つた。

『あん子が事ぢやもん、どんけな事でも爲うぢやねの！』

老婆も本氣になつて憤つた。

『まア、まア、俺共は揃ひも揃うて子運が悪いとぢアから何も諦めにやどもならん、い、齢をしての！』

眞卿老人はさう言ひながら膝を直した。そして、

『そつぢや兄貴、俺はどしても晩方の立合診察に行かんならんで、これで歸ぬるがの、……』

と目顔で言ひながら、

『ア、何より自身の身體を大事にするが一番ぢや、ちつと快いからと云うて安心は出來ん、齢が齢ぢやからの』

『ウム、ウム』

見海老人も立ち上つた。やがて、

『ど、どう！』と言ひながら馬に乘らうとする弟の側に立ちながら、

『い、か、眞卿、大丈夫か、汝は醉うちよりやせんか、其處の坂だけでも歩いち行かんか』

『フーン、大丈夫よ、ぢや、嫂女、御馳走でがした』

『何ののう、泊つて行かる、とい、とにのう！』

馬は小走りに馳け出した。そしていつの間にか午後の日射になつてゐる坂道を元氣よく登つて行つた。

卷末記

○この卷には前卷に續く大正十三年以後の隨筆小品三十二篇と、小說十篇とを收めた。

○隨筆小品の初めの方は沼津上香貫時代、「木槿の花」以下は大正十三年八月千本濱に移つてからの作、「火を焚く」以下は十四年十月同じく千本松原の蔭なる市道町に移つてからの作である。「沼津千本松原」といふのが二篇あるが、これは文中にもある如く千本松原の一部伐採の議のあつた際に、松原擁護運動の一つとして書いたもので、前者は十五年八月の「沼津日々新聞」後者は同九月「東京時事新報」に揭載された。「野蒜の花」は前卷所載のものと同じく「創作」に出したものであるが、これはその後「流るる水」と改題されて同じく「創作」に連載された。この「流るる水」の(その九)は昭和三年九月號に揭載されて、散文としての最後のものとなつたのだつた。

○小說の中では「裾野」と「燈臺守」の二篇だけが散文集『海より山より』に採錄されて居り、他は皆一度雜誌に發表されたきりであつた。發表の誌名は次の通りである。

一　家（明治四十年十二月「東亞の光」）
蝙蝠傘（同　四十一年二月—三月「東亞の光」）
古い村（同　四十二年六月「新潮」）

裾　野（大正五年十月「新日本」）
燈臺守（同　五年十二月「家庭」）
狐か人か（同　四年十二月「日本少年」）
麥の秋（同　五年十月「早稻田文學」）
若き日（同　六年一月「秀才文壇」）
或る死んだ男（同　八年一月「短歌雜誌」）
老　人（同　九年一月「青年改造」）

○「一家」はその附記の中に「次號を以て完了すべし……」とあるが、續編は掲載されなかつた。「裾野」「燈臺守」の執筆は發表よりもよほど前ではなかつたらうかと思はれる。小說に最も熱心だつたのは明治四十年前後早稻田大學在學中で、回覽雜誌「北斗」其他に發表した作品はかなりの數に上る筈であるが、それらが皆散逸して了ひ、本卷所載のものだけしか集らなかつたのは實に殘念である。なほこの他に中學時代の作が一篇發見されたが、それは少年期の他の作品と共に第十卷に入れることにした。

○口繪寫眞の一は「沼津千本松原」の初めの一篇を書いた當時。「上香貫の家」に見えてをる落葉木は櫻、木の間に見える瓦の屋根が書齋になつてゐた離室で、母屋は二階建だが左方の木の蔭になつてゐて見えない。向うの山は香貫山である。（大悟法利雄記）

昭和五年三月一日印刷
昭和五年三月三日發行

牧水全集　第七卷

著者　若山牧水
發行者　山本三生　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
印刷者　竹內喜太郎　東京市牛込區榎町七番地

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(48)一一二一番　一一二二番　一一二三番　一一二四番

（兩角製本）

日清印刷株式會社印刷

名古屋松坂屋南
竹中書店
電話中一三三〇
NO
¥